

平成 26 年度 博士学位論文

社会的マイノリティと観光の力

ー オーストラリアにおけるアボリジニの社会参入と観光 ー

宮城大学大学院事業構想学研究科

21155003 安田純子

2015 年 3 月

論文の要旨

観光は、観光する側においても観光される側においても、経済的側面だけでなく社会や人を変えていく力を持っている。本論文では、社会的マイノリティと考えられているオーストラリア先住民アボリジニを事例として、彼らがおかれている現状を明らかにし、近年その生活文化が国内外から重要な観光資源と認知されつつあることを背景に、アボリジニが主体となった観光の取り組みによる経済的・社会的自立への可能性と文化継承など、持続可能な観光事業について考察する。

アボリジニの人びとは、同化政策等による「失われた世代」*への和解後市民としての権利を得て、オーストラリア政府からオーストラリア人として最低限の生活をする権利が与えられ、保障が受けられるようになった。しかし、現代においてもその多くがいまだ社会的には低層に位置づけられており、経済状態の低さはその要因の一つと考えられる。

アボリジニ観光は、本物という意味ではアボリジニしかできない産業である。観光が盛んになっている現代において、彼らの伝統文化を観光資源として考えると、それはビジネス効果が見込まれ、高い失業率や経済的地位の低さの改善と経済的自立に役立ち、文化継承にも役立つと考えられる。資本主義社会において経済力がつけば、社会的地位も向上し、差別されない「真のオーストラリア人」となることが可能となるだろう。そして、現代社会に主体的・積極的に関与できる“市民”として参入することにもなると考える。また観光によって、“人”としての存在がアピールされて社会の認識が高まれば、独自の文化が「同化・包摂」や「排除」から護られ、後世にも伝え残していくことが可能になると考える。

オーストラリア政府は、観光推進の一策として 2004 年に先住民観光ビジネス準備プログラム (Indigenous Tourism Business Ready Program) を発足させた。観光においては、1980 年代半ばから自然に注目したエコツーリズムと多文化社会（マルチカルチュラル）に付随したエスニック・ツーリズムが多く行われている。アボリジニ観光はこれらの融合により自然面や文化面の多面性をもった複合型の観光を形成することができる。また、アボリジニ観光は、時代の要求に即し、注目されてきたコミュニティ・ベースド・ツーリズムの代表例の一つとも言える。国

際社会においてアボリジニ美術の価値が高まったのと同様に、アボリジニ観光は、さまざまな分野に発展する可能性を秘め、今後更なる広がりを見せていくだろう。

マイノリティと言われる先住民の状況は地域的にも歴史的にも多様ではあるが、人間の根源に関わる普遍的な何か（人類の根底にある普遍性）を残しており、それは殺伐とした現代社会の人間を魅了している。この数十年の間に彼らを取り巻く社会的環境が大きく変化してきて、彼らの生活も変化を余儀なくされている。彼らのユニークな文化資源は、彼らのおかれている状況の改善に資するものであり、彼らがその変化を能動的に受け入れるために、“観光”はその力を発揮できると考える。伝統的文化や環境が破壊されるのではないかというような懸念があり、注意を要することでもあるが、観光は、マイノリティとしての彼らが主流社会の経済的・社会的負荷として見られてきた存在から、独自の文化資本を持つ大きな存在となるための力として、重要な役割を果たすものと言えるだろう。

＊ ヨーロッパ人とアボリジニの混血児は、白人社会への同化が可能と見なされ、強制的に親から引き離されて施設に収容されたり、白人家庭で育てられたりした。彼らのことを「失われた世代」(lost generation) または「盗まれた世代」(stolen generation) という。政府の政策によって 1970 年まで行われていた。

目 次

1	はじめに	8
1.1	背景と課題	8
1.1.1	観光について	8
1.1.2	アボリジニについて	8
1.2	本論文の目的	11
1.3	調査研究方法	12
2	観光の力・学としての観光	14
2.1	観光の持つ意味・魅力	14
2.2	観光する側	16
2.3	観光される側	17
2.4	人間性を回復させる観光	18
3	アボリジニ研究	22
3.1	社会的マイノリティ (minorities)	22
3.2	これまでのアボリジニ研究	23
3.2.1	アボリジニ対象の研究ならびに関連書	25
3.3	アボリジニと観光に関連した研究	27
4	アボリジニについて	32
4.1	オーストラリア先住民アボリジニ	32
4.2	アボリジニ社会の生活内容	37
4.2.1	かつての生活様式	38
4.2.2	現在のアボリジニ社会	38
4.2.3	貨幣経済社会	43
4.2.4	失業率など	45
4.2.5	教育	49

4.2.6	現代アボリジニの健康状態.....	51
4.3	多文化主義への移行と和解 (Reconciliation)	54
4.4	労働の考え方・キャリア形成.....	54
4.5	ウラン鉱山	56
5	オーストラリア政府の観光の考え・取り組み、観光政策	61
5.1	国際観光.....	61
5.2	先住民観光ビジネス準備プログラムと関心の高まり	62
5.3	先住民観光局 (Indigenous Tourism Australia (ITA)).....	63
5.4	政府によるリーフレット類	63
5.5	オーストラリア大使館 ・ オーストラリア観光局のホームページ	63
6	アボリジニが主体となれる産業（労働）：アボリジニ観光.....	67
6.1	観光資源、文化観光	67
6.2	外からの観光、内なる観光	68
6.3	現行のアボリジニ観光の評価と新たな提案.....	73
6.3.1	現行のアボリジニ観光.....	73
6.3.2	考えられる企画	81
6.4	アボリジニ観光の主体.....	83
6.5	観光資源としてのアボリジナル・アート（絵画・工芸品）	84
7	考察と今後の課題（アボリジニ観光の効果と問題点）	93
7.1	アボリジニ観光の効果.....	93
7.2	アボリジニ観光の問題点（懸念）と課題.....	95
7.2.1	問題点（懸念）	95
7.2.2	課題（ビジネスチャンス）	97
8	おわりに	105
	参考文献.....	109

図 目 次

図 1	ウルルの前で談笑するアボリジニと観光客	33
図 2	オーストラリアの地図	35
図 3	アボリジニの州別人口分布 (2006 年) (グラフ形式)	36
図 4	アボリジニ文化の変遷と政策	37
図 5	観光客に説明するアボリジニ	39
図 6	Aboriginal and Torres Strait Islander Peoples' Labour Force Outcomes アボリジニ・トレス海峡諸島民の労働力参入率 2011 年	41
図 7	Unemployment Rate(s) (年齢層別失業率) 2013 年	42
図 8	年齢層別失業率、先住民・非先住民の全体失業率における各年齢層の割合	43
図 9	アボリジニとトレス海峡諸島民の男女別職業 2011 年	47
図 10	アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業 (西オーストラリアと都市カニング) 2006 年, 2011 年	48
図 11	アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業 (西オーストラリアと都市カニング) 2011 年	48
図 12	アボリジニ・トレス海峡諸島民の修学年数 (2002 年, 2008 年)	50
図 13	12 年教育修学の年齢別割合 (2008 年)	51
図 14	2011 年の先住民と非先住民の年齢による人口構成	52
図 15	昼間に飲酒をするアボリジニの若者	53
図 16	資本主義社会の労働観とアボリジニの労働観 (経済的労働)	56
図 17	国際観光収入上位国 (2012 年)	61
図 18	アボリジニ観光に訪れる国別観光者の割合 (ヴィクトリア州 2006 年)	68
図 19	アボリジニによる岩絵の説明	73
図 20	アボリジニブッシュ	78
図 21	儀礼・儀式・まつりの様子	79
図 22	アボリジニ 絵工芸品	84

図 23	アボリジニ工芸品	85
------	--------------------	----

表 目 次

表 1 アボリジニの州別人口分布（2006 年）（表形式）	36
表 2 先住民か否かによる労働状態	42
表 3 社会保障手当（2005 年 4 月現在）＊オーストラリア全市民対象	44
表 4 15 歳以下の先住民の遠隔地による労働力状態（2011 年）	46
表 5 アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業（西オーストラリアと都市カニング）	47
表 6 国内観光と国際観光（経費と宿泊数の違い）	70
表 7 観光者の国内観光	72

1 はじめに

1.1 背景と課題

1.1.1 観光について

人はなぜ旅をするのか、観光とは何を意味しているのか。最近、大手旅行代理店がその宣伝に「旅のチカラ」をあげているが、観光のもつ意味や魅力はどのようなものだろうか。「観光する側」と「観光される側」の両側面からその答えが考えられる。

まず、「観光する側」から考えると、興味と関心との関係は大きいと言えるだろう。そして、その期待感と意識の変化は、旅をする多くの者が経験することである。近年、現代社会においては、本来の人間的な生き方が問われたり、世界的な異常気象や地震などの災害を経験して、自然と共生する知恵や技術を受け継ぐ先住民の伝統的な暮らしや文化を、観たり経験してみたいこととして注目されるようになってきた。その意味で先住民の生活文化や伝統文化は観光資源となっている。観光者にとってそれは新鮮であり、その興味関心にも沿っている。

「観光される側」から考えると、その経済効果が大きいことはいうまでもない。また、人の賑わいとその土地の人のびとを活気づけることは、東日本大震災後の被災観光地の様子からも明らかである。そして観光は、その土地の伝統文化や生活文化の掘り起しと宣伝に貢献し、結果としてその“継承”にも寄与している。伝統文化や生活文化は、伝え行う“ところ”があり“ひと”がいて、それを観る“ひと”がいることで、絶やさず“継承”していくことができる。つまり、伝統文化や生活文化は大切な観光資源であると同時に、観光はそれらを伝え、継承していくために大きく貢献している。ただし、観光者から受ける影響も忘れてはならない。

1.1.2 アボリジニについて

オーストラリア先住民アボリジニは、白人が入植してきた 1788 年以降長い間苦難の日々を強いられ、1967 年まで国勢調査の対象となることはなく、オーストラリア市民となったのは同年に行われた国民投票後である。また、1992 年のマボ判決⁽¹⁾まで土地所有権を認められていな

かった。同化政策等による「失われた世代」^②への和解後市民としての権利を得て、オーストラリア政府からオーストラリア人として最低限の生活をする権利が与えられ、そのための保障が受けられるようになった。現在のアボリジニ社会は、現金を獲得し、商品を購入し、それを財として所有することで貨幣経済の中に組み込まれた社会になった。そして白人たちによって資本主義特有の生活・意識を持ち込まれ、その生活内容に変化が生じている。

現代においてもアボリジニの地位は低く、その多くがいまだ社会的には低層に位置づけられている。経済状態はその要因の一つであり、2002 年の全国先住民社会調査 (NATSISS (National Aboriginal and Torres Strait Islander Social Survey)) の調査結果 (47140 · National Aboriginal and Torres Strait Islander Social Survey, 2008, Australian Bureau of Statistics, <http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@nsf/mf/47140/>) から、アボリジニの総世帯収入は非先住民の 59%しか得ていないことがわかった。これには雇用の問題(雇用の機会の少なさ)が関係していることは、2012 年のオーストラリア統計局の就業率に関する資料からも明らかである。(詳細については、4 章で言及する。)

現在のアボリジニは、オーストラリア国民として最低レベルの保障が与えられ、福祉給付金や失業保険の給付など、福祉という意味で補助金を国からもらっている者も少なくない。それは上から与えられるものであり、かつてのように主体的に自らでつくる生活からは離れていくことになり、また依存による就労意欲の低下など主体性の弊害になるなどの問題も出ている。彼らの経済的自立をはかることは、現代社会に生きる人としての課題である。また、政策によって失われようとしていたユニークな文化の継承も、課題となるだろう。そして、糖尿病患者の増加など、アボリジニの健康状態が非先住民より劣悪であることも、改善が急がれている。

彼らは、カネを媒体として食料や衣類、生活雑貨そして耐久消費財などの保有財をもつようになり、物質的な「もの」が豊かになった。それにより「文明」にも触れる機会が増え、白人社会の考え方も入ってきて、さまざまな利便性も手に入れてきた。ある意味での“豊かさ”や利便性ととも、その弊害もかなりでてきた。それは、主体的に自らでつくる生活からの離脱、白人を中心とする社会の底辺での暮らし、そして変えざるを得なくなったライフスタイルなどであり、かつての生活スタイルと資本主義社会の生活スタイルが混淆している。政府の援助金

によって朝から酒を飲んでアルコール中毒になる者、言葉（言語）や習慣や考え方の違いによる失業の発生や職種の違い、美術工芸品の制作状況などによる貧富の差、新しい階層の分極化など、バランスを失った生活が顕著になっている。また、アウトバック（奥地）と都市の間では、アボリジニのあり様に違いが生じてきた。

かつて、アボリジニについては、オーストラリア研究の一部として紹介する研究が多く（『概説オーストラリア史』、『オーストラリア解剖』、『オーストラリア入門』、*Culture Shock! Australia, Australian Society Introductory Essays*, 4th Edition など、各種、参考文献欄に示す）、日本におけるアボジニ研究としては、国立民族学博物館における小山修三や窪田幸子らの研究をはじめとして、文化人類学などの分野からアプローチされることが多かった（文献については、第 3 章にて記述）。日本におけるオーストラリア研究は、政治、財政、労働、豪日関係など各分野（具体的文献名などは本論文主旨と異なるため省略）から行われてきたが、日本においてアボリジニに関しての知識や情報を得る機会が増えたのはここ 20~30 年ほどである。例えば *Adam in Ochre* や *The Australian Aborigines* の翻訳書がその先駆け的存在であるが、当時は“先住民”とは言わず、“原住民”という訳を用いていた。アボリジニの辿ってきた歴史的経緯から鑑みて、アボリジニを主とした他分野からのアプローチ（研究対象の性格上、他分野とはいっても文化人類学的観点が含まれることもある）は始まって間がない。

オーストラリアでは、アボリジニについて、始めはヒトとして博物館資料の“標本”となるようなアプローチが先で、その後に民俗資料としての取扱い、つまり“標本”としての扱いから“権利を持った主体”として明示的に考えるようになっていった。そして、さらに視点をひろげて（文化）人類学^③をはじめとして、社会学や言語学^④、後に政治学（政策を含む）や美術学分野などの研究（文献については、第 3 章ならびに巻末参考文献を参照）が積み重ねられてきた。しかし、アボリジニはあくまでも研究される立場であって、研究するのはもっぱら非先住民という構図が続いてきた。また、それには客観的なものばかりではなく、社会を取り巻くさまざまな力の存在も作用していた。

観光研究については、旅行記やアメリカ観光やヨーロッパ観光のように～観光の紹介はあっても、観光学としての研究は長い歴史の中ではまだ浅いと言える。アボリジニが世界に紹介さ

れ、アボリジニ観光が脚光を浴びるようになったのは近年のことで、その研究は他の分野と比べると決して多いとは言えない。ましてやアボリジニ観光の紹介というより、観光学として観光とアボリジニの生活との関連を考察することは、これまでほとんどなかった。

1.2 本論文の目的

オーストラリア政府は 21 世紀に入り国をあげて更に観光を推進し、その一策として 2004 年に先住民観光ビジネス準備プログラム (Indigenous Tourism Business Ready Program) を発足するなど、アボリジニ観光に注目するようになった。

アボリジニの失業率は高く、オーストラリア政府にとって雇用促進は喫緊の課題であるが、白人社会にはない独自の文化資源が観光資源となればさまざまな“労働”を生み出すことができる。それによって彼らは財を蓄積することができ、経済的自立が可能となり、ひいては政府の保護や失業に伴う福祉予算の削減にも貢献する。また、観光はアボリジニの存在をアピールすることや、口承伝承のアボリジニ文化やこれまでの政策によって途絶えてしまいそうになった生活文化の継承にも役立つことになる。

本論文では、オーストラリア先住民族アボリジニを事例として、オーストラリア社会におけるマイノリティとしての現状を明らかにする。次に、近年アボリジニの生活文化が国内外から重要な観光資源と認知されつつあることを背景に、アボリジニが主体となった観光の取り組みによって、経済的・社会的自立への可能性と文化継承などを考えていく。観光を媒介として彼らの文化が観光者に見られるモノとして提示される一方、観光は彼らの文化を知らせ、存在を示す機会ともなり得る。そして、先住民であり、国民であることの自尊心を持つことは、エンパワーメントの鍵となっていくことだろう。注目されてそれほど時がたっていないアボリジニ観光に関する文献はあまり多くはなく、アボリジニと観光の組み合わせの先行研究は少ないが、観光をアボリジニの状況改善に利用することは有益であると考え。そして、観光は社会や人を変えていく力を持っているという、観光の力を考えていく。それは他の先住民と観光事業戦略を考えるための一助ともなるだろう。この関心は、かつてオーストラリアを垣間見た経験や、

語学・教育学・経済学・家政学など人文科学や社会科学などの分野を学際的に学んだことがもとになっている。

オーストラリアのアボリジニもそうであるが、先住民はマイノリティと呼ばれるグループの一つである。マイノリティ集団は「排除」と「包摂」の波にのみこまれそうになりながらも、数々のリスクを背負いながらその存在を強力に示してきた。彼らは、現代社会・主流社会の中で益々その影響を受けながら“人”として生活していかなばならなくなっている。本研究が彼らの生活状況の改善に役立つことになればと願っている。

1.3 調査研究方法

かつてオーストラリアで生活した経験を踏まえて、主に文献をもとに考察を進める。先行研究などを含む文献や、インターネットなどを利用し、現地の知人や恩師からの情報またはオーストラリア政府が公開しているデータ資料などから考察を試みる。そして、所属しているオーストラリア学会やオーストラリア大使館とのつながりを利用することも研究の助けとしたい。

アボリジニ観光の方策については、ニュージーランドのマオリ族やハワイのネイティブ・ハワイアンなどで成功していると思われることも、参考にし、取り入れて考えを進めていく。

観光については、まず考え方・あり方・方法などを確認する。そして、研究当初に起こった東日本大震災時の観光を考察した学会誌や紀要に掲載になった論文なども引用して、そのあり方や実践についてさらに深めて研究する。

〈 注・引用文献 〉

- (1) トレス海峡の島の所有権を先住民とクイーンズランド州が争っていた訴訟で、オーストラリア連邦最高裁は先住民の主張を全面的に認めた。原告代表のエディ・マボにちなんでマボ判決と呼ばれる。
- (2) ヨーロッパ人とアボリジニの混血児は、白人社会への同化が可能と見なされ、強制的に親から引き離されて施設に収容されたり、白人家庭で育てられたりした。彼らのことを「失われた世代」(lost generation) または「盗まれた世代」(stolen generation) という。政府の政策によって 1970 年まで行われていた。(第 4 章でも解説)
- (3) 「オーストラリアでの本格的なアボリジニ研究の始まりは、1870 年代に遡る。その位置づけは、世界的人類学でいう「中心」に人類学的資料を提供することで、アボリジニの民族誌資料は、当時の人類学の主要理論の構成に使用される重要なものだった。」(小坂恵敬「日本人アボリジニ研究者の可能性—パーソンフッド (personhood) 理論を通じて」山内由理子編 『オーストラリア先住民と日本—先住民学・交流・表象』お茶の水書房、2014 年、58 ページ)
- (4) 「約 350 か所、合計 243,500 平方キロのリザーブ (保護区) を・・・未開人研究の宝庫として、(そこに—筆者)言語学や社会学や人類学の研究者が入り込んでいる。」(長坂寿久『北を向くオーストラリア』サイマル出版会、1978 年、57 ページ)

2 観光の力・学としての観光

2.1 観光の持つ意味・魅力

観光とは何を指すのか。国際連合の世界観光機関（UNWTO＝United Nations World Tourism Organization）[<http://www.unwto.org/>]は、観光（tourism）を「レジャー、ビジネスその他の目的で連続して1年を超えない期間、通常の生活環境を離れた場所を旅行したり、そこに滞在したりする人の活動である。」と定義している⁽¹⁾。そして観光は、山下晋司が言うように、「国の政策がからんでいるという意味では政治的であり、観光客とホスト社会の交流という点では社会的であり、文化が観光資源になるという点では文化的でもある。」⁽²⁾ また、「観光には、運輸といったハードな技術からホスピタリティなどのソフトなサービスに至るまでの産業がかかわっている。」⁽³⁾ つまり、観光はさまざまな要素が関係した総合的領域である。そして観光は、観光者にとっては余暇活動ととられることが多く、受け入れる社会にとっては経済効果という点に注目が集まる。

その研究である観光研究は、学際的と言われる。他分野との関わりは、観光に“学”が付くと、経済学・経営学・地理学・心理学・社会学・人類学などのさまざまな専門領域からのアプローチが可能となる。つまり、観光学はいろいろな角度から追究することができ、その学際的という点においては、家庭生活全般とのかかわりを扱った家政学や当該国についてのさまざまな分野を扱った学問、例えばオーストラリア学などとの類似性が感じられる。

『観光の地平』のなかで木村勝彦は「どのように定義するにせよ、観光とは人間による、すぐれて人間的な営みであり、そこには観光資源を媒介とするさまざまな人間関係が生み出される。」⁽⁴⁾ と述べている。観光が「人間的な営み」であり、観光によって「さまざまな人間関係が生み出される」のであるから、人とのつながりや人間的な観点が重要だと言える。そして、市場経済社会に生きる者にとっては、観光も経済活動としてとらえる観点も重要だと考える。ここでいう“経済”は金銭的な側面（市場における交換取引）だけではなく、昨今耳にする「ほんとうの豊かさ」をも考え、社会的ファクターが人びとの経済行動に大きな影響を及ぼすことを含めて考える「社会経済学＝ソシオエコノミックス」（socioeconomics）の立場や、人類学

的地見地から人間の経済活動を広く理解しようとする経済人類学 (economic anthropology) の見地からの理解も必要とするのである⁽⁵⁾。“観光者” (観光する側) と“観光受け入れ者” (観光される側) = “人間” = “生活者” という概念も忘れてはならない。そして次のような観光人類学からのアプローチも考慮されるだろう。「文化的背景を異にする他者との一瞬の出会いや相互行為の中で、観光地でのホストとゲストは、誤解や軋轢、カルチャー・ショックを経験したり、親密な関係を築くこともある。観光人類学は、このような観光地に集う多様なひとびとが織りなす関係性を、「ホストとゲスト」の相互関係に着目して論じてきた。」⁽⁶⁾ 本論文では、この “ゲスト” と “ホスト” を “観光する側” と “観光される側” に置き換えて考える。観光する側と観光される側では、経済面は言うに及ばず、“生活者” としての “人間” が関わる活動として、精神面も含めてその “生活” 全般に関わる観光の意味と影響は大きな異なりをみせる。したがって、観光を勘案するときは、“観光者” と “観光受け入れ者” を分けてみていかねばならないだろう。

溝尾良隆は『観光学の基礎』のなかで、“ヒトはなぜ旅をするのか” という理由に、① 気分転換を求めて旅行する変化欲求、② 自己達成、自己拡大の動機、③ 友人、家族との団らん、親睦をあげている。そして、「自由時間に主体性をもって旅行することで、人間の肉体的・精神的充実を図ることができ、人間らしい生活を過ごしていると言える」⁽⁷⁾ としている。これらのことは特に観光する側からの考え方であり、人とのつながりが大きく考えられている震災後は、特に③ の理由は大きくなっている。それでは、観光される側はどうであろうか。

「観光の持つ意味や魅力はどのようなものか？」という問いへの答えは、観光する側とされる側の両方の側面から考えられる。佐々木土師二も社会心理学的アプローチを試みている『観光の社会心理学』のなかでは、観光者への社会心理学的アプローチと、観光地域住民と観光事業者への社会心理学的アプローチというかたちで節を改めている⁽⁸⁾。ここでは、観光のもつ力について、観光する側とされる側の両方の側面から考察を進めていきたい。

2.2 観光する側

観光する側から考えると、興味と関心との関係は大きいと言える。そして、その期待感と意識の変化は旅をする多くの者が経験することである。現代に生きる人びとは、慌ただしい社会の中で生活の質や本来の人間的な生き方が問われている。そして、近年本来の人間の発達速度以上に発展してきた“文明”に対して、アナログ的価値が浮上しているように見える。また、世界的な異常気象や地震などの災害を経験し、人びとは自然への畏怖と憧れ、そして人間も自然の一部であることを再確認している。J・パスモアが言うように、「人間は完全に自然に依存するものであること、・・・自然は人間による破壊に傷つきやすいものであること—つまり自然と人間とはともに著しい回復力をもっていながらも、やはりともに「もろいもの」であること」^⑨を受けとめなければならない。また、環境危機など現代社会に噴出している問題をラディカルに問い続けてきたI・イリイチが、D・ケイリー編『イバン・イリイチ 生きる意味』のなかで「道具とは、ある目的を達成するために設計された装置」として、「道具」と逆生産性について触れ、原子爆弾についても触れている^⑩が、現在人びとはその脅威に翻弄され、人間の生活に不可欠な自然を破壊することがいかに愚かなことかを悟っている。そして、人間的接触の大切さ、カネが決して豊かを意味するものではないことを改めて悟り、自発的な人とのふれ合いが大切で、人間の共同性や協力、協調性が必要なことを再認識している。経済的に特別な投資というよりも身の丈にあった素朴さへの価値に目を向けるようにもなった。この価値観の変化は観光にも影響するだろう。その意味で、自然と共生する知恵や技術を受け継ぐ先住民の伝統的な暮らしは、観てみたいことや経験してみたいこととなっている。

価値観の変化に適応する観光目的やスタイルにも変化がみられる。例えば、これまで合理的な観光旅行として個人旅行があつて、近年ではそれが、ガイドブック等も手伝って人との接触があまりない“孤人旅行”にもなっていた。それが震災によって“家族”について再考することになり^⑪、一緒にいて一緒に何かをしたいという欲求を満たすために、家族旅行が改めて考えられるようになったと思われる。人の「生」が意識化され、宗教的要素をもつ文化観光が選ばれる。どこでも同じような“買う・食う”になってしまう観光よりも、その土地でしか味わ

えない郷土食や特産品、その土地の人の人情や心意気に触れるなど、目的がより人間くさい観光が選ばれる。単なるハコモノでは人は動かなくなり、地方のスローライフ観光など“地方”の魅力が再認識されている。世界的な流れの中でこれらのことは日本に限ったことではない。その意味で、先住民の生活文化や伝統文化は観光資源となり得、それは観光者にとっては新鮮であり、その興味関心にも沿っている。

大手旅行会社のJTBは、「旅のチカラ」をキャッチフレーズに、さまざまな人や風景、生き方や文化に出会う「旅」にはチカラがあるとしている⁽¹²⁾。そして、教育旅行プレゼンテーション資料のなかで、JTBグループ（株）ジェイコム「旅と健康」に関する調査研究においても、旅行中はリラックス感が高まるなど変化が起こっていること、また、旅先での人の心は開放感や期待感などが高まり、意識構造に変化が起こっていることなどを紹介している。

2.3 観光される側

観光される側から考えると、その経済効果が大きいことは言うまでもない。ここでいう経済は、広辞苑にある「人間の共同生活の基礎をなす財・サービスの生産・分配・消費の行為・過程、並びにそれを通じて形成される人と人との社会関係の総体。転じて、金銭のやりくり。」はもとより、カネの利潤効果をさしている。観光産業と言われるように、その関わりにおいて経済に及ばず影響は大きな比重を占めている。観光地の経済価値は付加価値（お金）で測られるが、それは経済活動へとつながり、「乗数効果」と呼ばれるもともとの付加価値の何倍もの経済活動へと波及していく。観光者の旅行支出の内8割以上が旅行中の支出であるという資料がある⁽¹³⁾。ツーリズム産業の範囲は、旅行業をはじめとして、宿泊・サービス業、運輸業、イベント・コンベンション業、観光土産品業、テーマパーク・観光施設業のツーリズム産業、行政機関やNPO法人などの関連団体、広告業、保険業、飲食店業、情報・ITサービス業その他たくさんのツーリズム関連産業がある⁽¹⁴⁾。宿泊業、飲食店、案内サービス業など、その波及は大きく、雇用面の創出も多く可能となるだろう。櫻川昌哉は『ツーリズム成長論』のなかで、「観光は地域密着型で関連産業も多様で雇用のすそ野も広いため、地域経済に与える影響も大きい」

と述べ、震災後の東北復興に関連して、東北 6 県の観光消費額と主要産業生産額の比較し、「東北各県の重要産業である農業と比べても、同レベルあるいはそれ以上の規模をもつほど、観光が重要な産業であることが理解できる」⁽¹⁵⁾ と述べている。

当該地域の文化を体験し、その土地に息づく料理を味わうという楽しみや、特産品による現金収入などその経済効果に期待が寄せられ、また人の賑わいと活気という点でもその意義は大きい。文化は狭義の芸術を含むエンターテインメント系を指すこともあるが、ここでいう文化を生活文化や伝統文化など広義でとらえると、その生活文化や伝統文化は観光の大切な資源となる。そして伝統は伝え行“ところ”があり、“ひと”がいて、それを観る“ひと”がいることで絶やさず継承していくことができる。例えば東日本大震災の被災地エリアへの観光は復旧復興のための観光として経済効果が期待されて、震災後から“東北六魂祭”⁽¹⁶⁾が毎年行われ、被災開催県に大勢の観光者が訪れている。このことは、伝統文化の一つである“まつり”はある意味でイベントであり、観光目的となり、歴史と文化の結集であり、人と人をつなぎ、地域力を高めて活性化させることに貢献することを証明している。つまり、観光はその土地の伝統文化や生活文化の掘り起しと宣伝に貢献し、結果としてその“継承”にも寄与している。歴史ある伝統文化を絶やさず盛り上げていくために観光が果たす役割は大きいと言える。ローカルな例をあげれば、「相馬野馬追（そうまのまおい）」⁽¹⁷⁾は震災と原発事故の警戒区域のために 2011 年は開催が危ぶまれ、規模を大幅に縮小しての実施となった。2012 年 7 月、甲冑競馬と神旗争奪戦の会場となる雲雀ヶ原には 400 騎（内 280 騎が神旗争奪戦参加）の勇ましい姿を観に 42,000 人の観光客が訪れ、1000 年続く歴史を絶やさずに次年につなぐことができた。

2.4 人間性を回復させる観光

自然災害や紛争などが世界的に起こり、深刻な被害が拡散しており、“不安”が広がっている現状を踏まえると、“人間性を回復させる観光”が注目される。藤村正之は不安の鎮めとしての“癒し”をあげ、癒しの多元化として、大塚英志の言う「癒しとしての消費」— 自分自身を癒すための消費と他者を癒すための消費の 2 つを取り上げている⁽¹⁸⁾。その消費行動が観光に向け

られれば、慰安型の観光¹⁸ 指向や、観光ボランティア活動¹⁹ と結びつき、“癒し” や “ヒーリング” 目的の湯治が自然治癒力を高めるように、現在のストレスフルな状況のもとでは休息を含むプラスの非日常である観光が有効だろう。都会の殺伐としたモノより地方や地域の自然的・家庭的なモノが求められ、自然との共存を再発見できること、人工物から離れるという意味での自然に触れること、“時間” ではなく“時” を感じるという意味での歴史的なモノに触れること、人の“生” を感じるという意味での祭りなどに触れること、家族も含め人とのつながりを感じることで人間性を回復させる観光²⁰ の鍵となるだろう。アボリジニ観光をはじめとして、世界のさまざまな民族や文化や暮らしに出逢うことはまさにその観光目的に沿うものと考えられる。

“慰安” というからには、心にふれ安らかな気持ちになることができるだけでなく、安全と思える環境や安心できる環境が必要である。アメリカの心理学者 A・マズローが、人間の欲求段階において「生理的欲求」の次に「安全の欲求」をおいている⁽¹⁹⁾ ように、安全であることは、観光の前提条件となるだろう。矢口祐人が「観光とは、ある土地の人がよその土地を訪れる行為であり、人と人との出会いを作り出す」⁽²⁰⁾ と述べているように、よその土地に行くのであるから、安全と思えることは大事である。特に慰安を目的にあげる慰安観光には、そこに行つて武装を解除できる要因が多くなければならない。場所的にも食料的にもあらゆる点での配慮が必要であることは言うまでもない。

〈 注・引用文献 〉

- (1) 櫻川昌哉『ツーリズム成長論』慶應義塾大学出版会、2013年、4 ページ
- (2) 櫻川昌哉 同上、2 ページ
- (3) 原司郎・酒井泰弘編著『生活経済学入門』東洋経済新報社、1997 年、61 ページ
- (4) 溝尾良隆『観光学の基礎』原書房、2009 年、1～3 ページ
- (5) 櫻川昌哉 前掲書、12 ページ
- (6) 渡部瑞希「観光人類学における「ホストとゲスト」の相互関係」(『くにたち人類学研究』vol.1 所収) 2006 年、40 ページ
- (7) 溝尾良隆 前掲書、1～3 ページ
- (8) 前田勇・佐々木土師二監修、小口孝司編『観光の社会心理学』北大路書房、2006 年、20～26 ページ
- (9) J パスモア著、間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』岩波書店、1998 年、307 ページ
- (10) Cayley, D. (1992), *Ivan Illich in Conversation*, House of Anansi Press, (デイヴィッド・ケイリー編 / 高島和哉訳『イバン・イリイチ 生きる意味』藤原書店、2005 年、156～195 ページ
- (11) 例えば、平成 25 年 内閣府「東日本大震災後の仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）に関する調査報告書について」の (3)震災やその後の社会変化と、個人の意識変化（働き方、生活）における「震災の経験と普段の生活に対する意識の変化」の調査において、震災または原発事故で何らかの影響を受けた人が「意識が変化した」という回答が最も多かったのは、「家族をより大切に思うようになった」（41.5%）であった。
- (12) JTB「旅のチカラ」プレゼンテーション用資料より
- (13) 櫻川昌哉 前掲書、12 ページ
- (14) 日本旅行業協会、『数字が語る旅行業 2011』
- (15) 櫻川昌哉 前掲書、14 ページ
- (16) 東北六魂祭（とうほくろっこんさい）、東北 6 県の各県庁所在地の代表的な 6 つの夏祭り
を一堂に集めた祭り。東日本大震災の鎮魂と復興を願って、2011 年 7 月に宮城県仙台市で

初開催（宮城県会場）。2012 年（岩手県会場）に続き、2013 年は福島県会場、津波被災地外としては初めて 2014 年山形県山形市で開催（山形会場）された。始まりは、震災前の 2010 年に各県の商工会議所が仙台市に集まり、「東北夏祭りネットワーク」を結成したことによる。主催は東北六魂祭実行委員会。各県庁所在地の市とそれぞれの実行委員会や協会。協賛は大手各企業。後援は観光庁、復興庁、東北運輸局、東北観光推進機構をはじめ、各新聞社や放送局などである。

第 1 回の仙台市への経済波及効果は 103 億円と算定され、第 2 回の盛岡への経済波及効果は 222 億円と算定された。経済効果もさることながら、その誘客数（第 1 回 36 万人、第 2 回 24.3 万人、第 3 回 25 万人、第 4 回 26 万人）は驚くべき数値であり、心の活気づけに一役買っている。

(17) 相馬をはじめとする旧相馬藩領（福島県浜通り北部）で行われる神事および祭りで、国の重要無形民俗文化財に指定されている。毎年 7 月 23 日から 25 日に行われ、東北地方の夏祭りのさきがけと紹介される。

(18) 藤村正之 『〈生〉の社会学』東京大学出版会、2008 年、77～80 ページ

(19) A・マズローは、人間の欲求段階を 1 生理的欲求、2 安全の欲求、3 社会的欲求、4 自我欲求、5 自己実現の欲求とし、段階的に高度化すると提唱した。

(20) 矢口祐人 『ハワイの歴史と文化』中央公論新社、2009 年、166 ページ

3 アボリジニ研究

3.1 社会的マイノリティ (minorities)

本章では、アボリジニに関する背景や既存研究に触れながら考察するが、その前に本節では少し社会的マイノリティについて考えておきたい。マイノリティという言葉は新聞などでも頻繁に用いられるが、それが一体どういう人たちのことかとなると混乱することが多い。宮島喬と梶田孝道は、マイノリティとは、「何らかの属性的要因（文化的・身体的等の特徴）を理由として、否定的に差異化され、社会的・政治的・経済的に弱い地位に置かれ、当人たちもそのことを意識している社会構成員ということになるろうか」としつつ、それは、構造と主流者 (majorities) の「まなざし」によってつくられるとしている⁽¹⁾。そしてマイノリティとされるものには、先住民や歴史的・地域的少数者（フランスのブルターニュ人やスペインのバスク人、日本のアイヌなど）も含まれ得るし、場合によっては女性、子ども、障害者なども含まれる可能性があるとしている。元百合子は、「差別、抑圧、搾取や暴力等の人権侵害を最も多く、集団的に受けてきたのはマイノリティ化された集団・カテゴリーに属する、ないし属するとみなされる人びとであって、」「国内の不況であれ、世界的な金融・経済危機であれ、その否定的影響を最も多く蒙りがちなのも、周縁化された集団の成員である」と述べている⁽²⁾。社会学的には、マイノリティ化された集団を「包摂」と「排除」の対象として扱うことがあるが、大黒正伸は先住民族の形式的定義を、「多民族が属する国家ないし地域内で、歴史上、他の民族より古くから居住してきた民族」とし、実質的定義、つまりマイノリティとしての定義を、「他民族の侵略ないしは移住によって、古くからの習慣や言語、宗教などの固有の特質が危機に瀕している民族」としている⁽³⁾。そしてその例として、台湾の高砂族、オーストラリアのアボリジニ、ニュージーランドのマオリ、アングロサクソン系アメリカ大陸の先住民族（インディアンとイヌイット（エスキモー））、ラテンアメリカ大陸のインディオ、北欧地域のサーミ、日本のアイヌ民族、ハワイの先住ポリネシアン（原ハワイ人）をあげている。

社会的マイノリティと考えられる彼らは、それぞれに背景も状況も異なるが、オーストラリア先住民アボリジニを事例として観光の力を探究する本研究は、彼らのおかれている状況改善の一助となることも意図している。

3.2 これまでのアボリジニ研究

これまで、アボリジニについては文化人類学などの分野からアプローチされ、その研究は興味深いものとなっている。しかしながら、これまでの経緯において、アボリジニと観光の組み合わせ、つまりアボリジニ観光（アボリジニツーリズム）に関する研究はあまり多いとは言えない。

オーストラリア国内において、アボリジニは 1967 年に行われた国民投票でオーストラリア市民となるまでは人間としての正当な扱いをされておらず、研究対象となることはほとんどなかった。その後、歴史的推移を経て、オーストラリアでは文化人類学をはじめとしてさまざまな研究が積み重ねられてきた。しかし、これらの研究はその取り巻く背後によって中立性や客観性に欠けるものも出てきていた。つまり、「文化人類学の世界的中心である欧米の学会の興味関心や、オーストラリア内部の先住民政策の推移により左右されてきた。」⁽⁴⁾

筆者の恩師の一人であるリンダル・ライアン（. Lyndall Ryan）は、オーストラリア大使館で行われた Teach Australia の実践ワークショップ（2002）において、ゲストスピーカーの一人として招かれ、オーストラリア研究と先住民研究（Australian Studies & Indigenous Studies）と題して講演を行った。彼女による説明はアボリジニの現状を赤裸々にするものであった。その時示された数字は時々この論文中に登場する⁽⁵⁾。

その他アボリジニ（女性）に関する興味深い研究に次のような文献がある。

1. Anne Daly (1995) Employment and Social Security for Aboriginal Women, in Anne Edwards & Susan Magarey (eds), *Women in a Restructuring Australia*, Allen &

Unwin. (アン・ダリー「アボリジニ女性の雇用と社会保護について」、A・エドワード、S・マガリー 編『オーストラリア再構築における女性』)

2. Annette Hamilton (1985) A Complex Strategical Situation : Gender and Power in Aboriginal Australia, in Norma Grieve and Patricia Grimshaw (eds), *Australian Women*, Oxford University Press. (アネット・ハミルトン「錯綜する戦略的状況：オーストラリア先住民社会におけるジェンダーとパワー」、N・グリーブ、P・グリムショー 編『オーストラリアの女性』)

これらによると、アボリジニの女性はマイノリティ（アボリジニとして）×マイノリティ（女性として）の存在で、状況的にはハードではあるが、男性より柔軟に社会に適応しようと生きていることが窺える。

日本においては、アボリジニを研究対象の中心とするというより、オーストラリア研究全体の一部としてアボリジニについて取り上げることが多いようである。日本におけるオーストラリア先住民の現地調査が本格的に始まったのは 1980 年代のことである。国立民族学博物館のメンバーによるアーネムランドを中心とした現地での調査は文化人類学の領域からのアプローチであり、日本におけるアボリジニ研究の先駆けとなった。小山修三や窪田幸子の現地調査による研究は、その伝統的な生活文化を知る手がかりとなっている。

「精霊の民」⁽⁶⁾・「現存する世界最古の人種」⁽⁷⁾・「今日に生きる原始人 (adam in ochre)」⁽⁸⁾と言われるアボリジニについては、“ ドリームタイム” ・ “ドリーミング”⁽⁹⁾と呼ばれる独特の世界観や自然と共にある暮らしなど神秘的とも言える生活文化の様子が、民俗学的・文学的・社会学的な見地から研究されるようになった。そして、2014 年に日本では先住民族研究の最新の論文集として『オーストラリア先住民と日本—先住民学・交流・表象』（山内由理子編）が出版され、「日本にいる我々がアボリジニについて知る、ということはどういうことか。学問、知識、興味はどのように生み出されて、我々をどこに連れて行くのか？」⁽¹⁰⁾ という投げかけをしている。また、近年芸術としてその価値が急上昇しているアボリジニの生活画が、美術学的見地か

ら研究されるようになった。そして、1970年代まで続いた「失われた世代」についての研究は、現在まで至るその影響にどう対応するかを含め、各分野からアプローチされている⁽¹¹⁾。

以下では、アボリジニと観光の関連を考察していく前に、さらに、アボリジニが中心となっている研究ならびに先行研究となるアボリジニと観光に関連した研究についてみておきたい。

3.2.1 アボリジニ対象の研究ならびに関連書

先にもあげたように、国立民族学博物館が行っている現地調査研究は、実践的研究としてアボリジニの生活実態を知るうえで興味深い資料となっている。小山修三「オーストラリア・アボリジニ狩猟採集民の現在」(『国立民族学博物館研究報告別冊 15号』、1991年12月)をはじめとして、同じく小山『狩人の大地』(雄山閣出版、1994年)、松山利夫『ユーカリの森に生きる』(日本放送出版協会、1994年)などである。

新保満『野生と文明』(未来社、1979年)、『悲しきブーメラン』(未来社、1994年)、白石理恵『精霊の民アボリジニー』(明石書房、1993年)も民俗学的アプローチと言え、日本においては啓蒙的働きをしている。

小山修三・窪田幸子編『多文化国家の先住民』(世界思想社、2002年)、上橋菜穂子『隣のアボリジニ』(筑摩書房、2000年)、青山晴美『もっと知りたいアボリジニ』(明石書店、2001年)、『アボリジニで読むオーストラリア』(明石書店、2008年)、保莉実の『ラディカル・オーラル・ヒストリー ― オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』(お茶の水書房、2004年)も、時間軸を踏まえてアボリジニという存在を伝えている。

窪田幸子『アボリジニ社会のジェンダー人類学』(世界思想社、2005年)はジェンダー論を踏まえて人類学としての考察を試み、張能美希子『アボリジニー差別論の展開と事例研究』(文真堂、2012年)は、副題にあるように差別論の事例研究としてアボリジニを扱い、友永雄吾『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』(明石書店、2013年)は白人入植以来大きな意味を持つ土地権について研究するなど、それぞれテーマをもってアボリジニを研究している。

アボリジニの世界観については、海美央『アボリジニの教え ― 大地と宇宙をつなぐ精霊の知恵』(KK ベストセラーズ、1998 年) のなかで具体的に示されている。

アボリジニ美術に関しては、松山利夫監修、読売新聞社文化事業部編『オーストラリア・アボリジニの美術<ドリームタイム>へのいざない』(読売新聞社、2001 年) や、小山修三、上橋菜穂子、南本有紀、前田礼編『アボリジニ現代美術展』(現代企画室、2003 年) のなかに、画集として写真と解説が詳しく載せられている。内田真弓『砂漠で見つけた夢 ― アボリジニに魅せられて』(KK ベストセラーズ、2008 年) は、アボリジニ絵画のバイヤーとなった経緯などと共に、アボリジニとの生活の様子が書かれている。

翻訳書には次のようなものがある。

1. アボリジニ特有の世界観

- ・ Deborah Bird Rose , *Nourishing Terrains: Australian Aboriginal Views of Landscape and Wilderness* Commonwealth of Australia , 1996 (デボラ・B・ローズ著 保莉実訳『生命の大地 ―アボリジニ文化とエコロジー』平凡社、2003 年)

2. 総合的にアボリジニについて

- ・ Colin Simpson (1951), *Adam in Ochre* Angus and Robertson Limited in Association with the FHJohnston Publishing CoPtyLtd (竹下美保子訳『今日に生きる原始人』サイマル出版会、1972 年)
- ・ Geoffrey Brainey (1983) *Triumph of the Nomade* (越智道雄・高野真知子訳『アボリジナル』サイマル出版会、1984 年)
- ・ Kenneth Maddock (1982), *The Australian Aborigenes* Penguin Books, London (松本博之訳『オーストラリアの原住民』勒草書房、1986 年) は、オーストラリア関連シリーズ。

3. 文学作品・美術解説等

- ・ Jane Harrison (1998), *Stolen* Currency press (佐和田敬司訳「ストールン」『アボリジニ戯曲選』所収、オセアニア出版社、2001 年) *アボリジニ文学(戯曲)、特に「ストールン」は“失われた世代”(後章注にて解説)についての戯曲を書いている。

- ・ Doris Pilkington (1996), *Follow the Rabbit-Proof Fence*, University of Queensland Press (仲江昌彦訳『裸足の 1500 マイル』メディアファクトリー、2003 年) * “失われた世代” の実話をもとにして書かれており、映画化され日本でも公開されている。
- ・ Howard Morphy (1998), *Aboriginal Art*, Phaidon Press Limited (松山利夫訳『アボリジニ美術』岩波書店、2003 年) * アボリジニ美術についての解説が写真と共に書かれている。
- ・ David Malouf (1993) *Remembering Bebyion* (武舎るみ訳『異境』現代企画室、2012 年) * 現代、オーストラリア文学を代表する傑作とされ、豪日交流基金の協力のもとで邦訳された。内容は、アボリジニに育てられた白人の男という想定外の設定になっている。

3.3 アボリジニと観光に関連した研究

先にも述べたように、日本においてはアボリジニと観光を扱った研究はまだ多いとは言えず、途上にあると言えるだろう。

青山晴美は、アボリジニ研究者の一人で、「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業の実態 — マーケット調査とケーススタディ No.1」(『愛知学泉大学・短期大学紀要 43 号』2008 年)、「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 No.2 — アボリジニ文化の表象について：ケーススタディ No.2」(『愛知学泉大学・短期大学紀要 44 号』2009 年)、「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 No.3 — エコツーリズムの現状と可能性について：ケーススタディ No.3」(『愛知学泉大学・短期大学紀要 45 号』2010 年)で観光研究をしている。これらの研究はアボリジニ観光についての事例研究であり、観光を観光資源としての観点でとらえている。アボリジニの生活と観光を結び付け経済的自立の方向を探り、今後の課題を探索した本論文とは着眼点を異にしている。

観光みやげ物と表象に着目した研究に上橋菜穂子「観光土産物に表象される『象徴化された自分化イメージ』について — 西オーストラリア州中西部のアボリジニ、ヤマジーの事例を中心に」(『女子栄養大学紀要』Vol.29、1998 年)がある。みやげ物については、観光経済にとって大きな意味を持っており、その課題については本論文でも取り上げている。

朝水宗彦『オーストラリアの観光と食文化』(学文社、1999 年)は、オーストラリア観光だけではなく食文化との関係をテーマとしたユニークな研究になっている。その中には「オーストラリア観光で重要な役割を演じる先住民」という表現を用いてアボリジニも登場し、「自然の

なかで独特の生活習慣を保ってきた先住民アボリジニの存在は、オーストラリア観光の独自性を引き立たせている」⁽¹²⁾としている。

アボリジニが市民となった歴史的経緯から、アボリジニ研究はこの数十年に集中しており、ましてアボリジニ観光または先住民観光 (Aboriginal Tourism または Indigenous Tourism) についての専門的な研究はオーストラリア国内においても多いとは言えない。オーストラリアにおけるアボリジニと観光 (ツーリズム) に関連するリサーチやガイドは、政府が国をあげて観光を進めていることもあって、政府刊行物と政府観光局や各州の観光局の発行物が比較的多い。(近年、オーストラリアでは **aboriginal** という単語より **indigenous** という単語を用いることが多くなっている。⁽¹³⁾)

そのいくつかは次のようなものである。

1. Australian Government Department of Resources, Energy and Tourism, Tourism Research Australia 2010 *Indigenous tourism in Australia: Profiling the domestic market* (オーストラリア政府資源・エネルギー・観光省における、先住民観光国内市場についてのリサーチ (集成)、2010 年)
2. Tourism Australia, *National Indigenous Tourism Product Manual*, 2009 (オーストラリア観光局による、先住民観光についての手引書、2009 年)
3. Australian Government Department of Resources, *Indigenous Tourism in Australia: Profiling the domestic market*, 2010 (オーストラリア政府の資源開発部門による、先住民観光の国内市場の統計なども含む輪郭、2010 年)
4. Queensland Government, *Guidelines for developing Indigenous Tourism Experiences In Central West Outback Queensland*, 2014 (クイーンズランド州政府による、クイーンズランド中央の西奥地における、先住民観光の発展のためのガイドライン、2014 年)
5. Destination NSW, *Aboriginal Tourism Action Plan 2013-2016* (ニューサウスウェールズ州政府による、アボリジニ観光行動計画、2014 年)
6. Victoria Government, *Aboriginal Tourism*, 2008 (ヴィクトリア州政府による、アボリジニ観光、2008 年)
7. Tourism NSW, *Principles for Developing Aboriginal Tourism*, 2014 (ニューサウスウェールズ州政府による、アボリジニ観光開発のための行動基準、2014 年)

外国の研究機関においては、日本でアボリジニ観光を研究対象とするのと同様に研究している例も若干あるようではあるが、ここで注目したいのは、オーストラリアのアボリジニではな

いその国の先住民とツーリズムについて、または先住民全体とツーリズムについての研究成果を報告している以下のような論文や資料である。

1. Ontario, Ontario Cultural and Heritage Tourism Product Research Paper, 2009
(カナダ・オンタリオ州の文化的・遺産的観光創出リサーチ論文、2009 年)
2. Aboriginal Tourism association of British Columbia, Aboriginal Cultural Tourism, Blueprint Strategy for British Columbia, 2005 (カナダ・ブリティッシュコロンビア州原住民観光協会、ブリティッシュコロンビア州に関する原住民文化観光戦略青書、2005 年)

これらはオーストラリアのアボリジニについての研究ではないが、先住民の一例としてオーストラリアのアボリジニが書かれている。

〈 注・引用文献 〉

- (1) 宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002 年、1～2 ページ
 - (2) 元百合子『立命館法学』2010 年 5・6 号
 - (3) 大黒正伸（創価大学文学部・いわき明星大学文学部他兼任講師 社会学分野）講義資料
（sociology I－12「差別の社会学」はいかにして可能か？<http://www7ocnnejp/~ooguro/css112htm>）より
- *この資料における『「非自発的マイノリティ」としてのアイヌ民族』は、アイヌ民族が日本社会における非自発的マイノリティになっていった経緯を取り上げている。
- (4) 山内由理子編『オーストラリア先住民と日本 ―先住民学・交流・表象』お茶の水書房、2014 年、「はじめに」、iii ページ
 - (5) 2002 年当時、ニューカッスル大学 人文学学科長 オーストラリア研究創設教授。彼女は、アボリジニの研究者であると同時にある意味でマイノリティとされるオーストラリア女性学の研究者でもある。つまり、マイノリティ×マイノリティを研究対象としていた。
 - (6) 白石理恵『精霊の民アボリジニー』明石書房、1993 年
 - (7) オーストラリア先住民は、現存する世界最古の人種といわれ、「今日に生きる原始人（adam in ochre）」ともいわれる。また、F・エンゲルス『家族、私有財産および国家の起源』（1884 年）のなかにもオーストラリア黒人として登場している。自然と文明の交錯するその生活は、長い歴史と共にある。
 - (8) コリン・シンプソン著、竹下美保子訳『今日に生きる原始人』サイマル出版会、1972 年、まえがき 1 ページ「現代のあらゆる民族に共通した祖先と言い得る唯一の人種、それはオーストラリア原住民である。（アーサー・キース卿）」（同上書、目次前文）
 - (9) ドリーミングの名称は英語の **dreaming** からきている。アボリジニの世界観を表す言葉で、1896 年に中央砂漠を調査した人類学者 B・スペンサー（B. Spencer）が最初に使用したと言われる。数多くあるアボリジニ言語のこの概念に相当する言葉を英語ではドリーミング（dreaming）と訳し、アボリジニ自身も英語で表現する場合、ドリーミングという言葉を用いている。

(10) 山内由理子編、前掲書、帯ならびにはじめに

(11) ヨーロッパ人とアボリジニの混血児は、白人社会への同化が可能と見なされ、強制的に親から引き離されて施設に収容されたり、白人家庭で育てられた。彼らのことを「失われた世代」(lost generation) または「盗まれた世代」(stolen generation) という。政府の政策によって 1970 年まで行われていた。

* 「盗まれた世代」の精神状態は、家族（特に親）やコミュニティから強制的に引き離されること、そして愛情によって護られているとは決して感じることでできない所に突然送られることによって、かなり不安定になっていた。アボリジニとしてのアイデンティティは、白人の価値観を押しつけられ強制されることによって失われ、その後の深いトラウマにつながっていった。それは、ドリーミング（アボリジニの生き方の神髄）を根底におく伝統的生活やアボリジニの文化（アボリジニとしての特性）の破壊をも招いた。つまり、アボリジニの世界と白人の世界のどちらにも属することのできない人間をつくりだしてしまったのである。また白人の家庭に送り込まれた子供の大半は、奴隷よろしくこき使われ、精神的・肉体的虐待と搾取の対象となった。この「盗まれた世代」の影響はいまだに続いている。失われた絆はいまだ回復できないままである。両親や祖父母を探し続ける孤児たちとその子孫がおり、子供を探し続ける親がいる。「盗まれた世代」は、自分が本当は何者で、どこ土地の者なのかという疑問を抱え、自分の存在に対するアイデンティティの喪失に今日でも苦しんでいる。彼らはアボリジニであることへの劣等意識を植え付けられ、その解消に向けて自分自身への問いかけを続けている。親の愛を知らずに育ったアボリジニの中には、愛がわからず、受け入れられず、表現できず、自分の子供にうまく愛を伝えられない者もいる。

(12) 朝水宗彦『オーストラリアの観光と食文化』学文社、2003 年、86～88 ページ

(13) アボリジニ (Aboriginal) という単語は、オーストラリアの先住民だけではなく全ての先住民を指すことがある上に、オーストラリアではトレス海峡諸島民を含めることが多くなっているからである。

4 アボリジニについて

4.1 オーストラリア先住民アボリジニ

オーストラリア先住民である「アボリジニ」という存在が世界的に知られるようになったのは、そう遠い昔のことではない。2000年のシドニー・オリンピックにおけるパフォーマンスは記憶に新しい。アボリジニ観光を考察するにあたり、まずアボリジニについて、全体的に把握しておきたい。

『オックスフォード・オーストラリア辞典』などでは、アボリジニの語源は **ab·origine** となっている。また小山修三によると、オーストラリア大陸の先住民は、オーストラリア・アボリジニ (**Australian Aborigines** または **Aboriginals**) と呼ばれており、アボリジニとは、ラテン語の **ab origins** (最初からの) にもとづく「原住民」という意味の普通名詞であるが、それがオーストラリアでは固有名詞として使われるようになったという⁽¹⁾。彼らには、約 **250** の方言集団に固有名がある。最近では「先住民」 (**Indigenous People**) という言葉がアボリジニおよびトレス海峡諸島民 (**Torres Strait Islanders**) ⁽²⁾の両方を包含する言葉として頻繁に使われるようになってきた。現在オーストラリアの公式文書では「アボリジニおよびトレス海峡諸島民」 (**Indigenous People**) と記され、「ファースト・オーストラリアン (**The First Australians**) 」という呼び方も、「和解 (**Reconciliation**) 」(政府(主流社会)と先住民との和解、2000年に文書で発表された) 後、登場してきた。オーストラリアには、まずアボリジニが到来し、トレス海峡諸島民が後から到来した。両者は別系統であり、生業がちがうため直接利害の衝突はなかった。両者は、メラネシア(南太平洋の西域で「黒い島々」の意)系海洋民族という点では共通しているが、言語や文化などの違いが大きいと言われている。

1788年にヨーロッパ人が入植した時点で30万人いたとされるアボリジニの人口は、白人による虐殺や暴行、白人が持ち込んだ伝染病の感染や環境破壊などによって減少した。1901年の人口調査では、約6万人とその数は凄まじく減り続け、それは1920年代まで続いた。その後、1920年代になると保護の政策が整備されてきたこともあり、アボリジニの人口は徐々に回復してきた。現在の人口は約25万人とされるが、純粋アボリジニは約10万人と推測されている⁽³⁾。



図1 ウルルの前で談笑するアボリジニと観光客

(出典：TOURISM AUSTRALIA (<http://images.australia.com>) より許可を得て掲載)

オーストラリアは、6つの州と1つの準州、首都特別区からなっている(図2.地図)。(現在アボリジニはノーザンテリトリーだけに限らず土地所有が認められ、2006年のアボリジニ人口の分布ではニューサウスウェルズ州 152,685 人(29.6%)、クイーンズランド州 144,885 人(28.%)、北部準州(ノーザンテリトリー) 64,005 人(12.4%)、西オーストラリア州 70,966 人(13.7%)、南オーストラリア州 28,055 人(5.4%)、ヴィクトリア州 33,517 人(6.5%)、タスマニア州 18,415 人(3.6%)、首都特別地域(首都キャンベラおよびその水源域) 4,282 人(0.8%)となっている⁽⁴⁾(表1)。各州において、アウトバック(奥地)に住んでいるのはアボリジニ人口の3分の1ほどであり、3分の2は都市に住んでいる⁽⁵⁾。隣国ニュージーランドの先住民マオリが、過去、クマラと呼ばれるサツマイモを栽培するなどしていた土地を入植者に奪われて経済的基盤を失い、その大半が都市生活者となった経緯とは異なりを見せるが、先住民と主流(マジョリティ)社会との関連において類似性も見られることは確かである。「都市生活というかたちで、先住民がマジョリティ社会へ参入するということは、彼らに生活様式の大幅で急激な改変をせまり、一定の同化を要求する⁽⁶⁾」。

その歴史的な流れや政策は、図 4 で示したように、絶滅政策および隔離による保護政策から同化政策、統合政策、さらに 1970 年代になるとアボリジニの独立、自主性を強調する政策⁽⁷⁾が打ち出されるようになった。1970 年代半ばには白豪主義に終止符が打たれ、現在の多文化主義に至っている。

第二次世界大戦後、オーストラリアは、始めは国の防衛のために、後になって経済復興や内陸開発のために、若い男性や若い夫婦の労働力を必要とし、大量に移民を受け入れることとなった。移民の出身国を非イギリス系に広げ、政府はその移民に対して、同化政策をとった。優先される価値観はイギリス系であり、同化政策はアボリジニも対象となった。

60 年代の終わりになると、非英語圏の移民の増大によって同化政策は行き詰った。社会情勢の変化から、手が加えられて統合政策へと移行、統合政策はアボリジニにも適応され、主流であるイギリス系に強要された同化政策とは異なり、個人的に生活のスタイルを選ぶことができるようになった。その後、政府は人種差別的要素の強い移民政策を廃止（1972 年）し、白豪主義の終焉を迎えることとなった。ウィットラム労働党政権（1972 年～1975 年）は、オーストラリアは多文化社会であると公式に宣言し、多様性を受け入れるという多文化主義政策に変えていった。

[illegible]

図2 オーストラリアの地図

表 1 アボリジニの州別人口分布（2006 年）（表形式）

地域名（州を含む）	人数（人）	割合（%）
ニューサウスウェールズ州	152,685	29.6
クイーンズランド州	144,885	28.0
北部準州（ノーザンテリトリー）	64,005	12.4
西オーストラリア州	70,966	13.7
南オーストラリア州	28,055	5.4
ヴィクトリア州	33,517	6.5
タスマニア州	18,415	3.6
首都特別地域（首都キャンベラおよびその水源域）	4,282	0.8
計	516,810	100

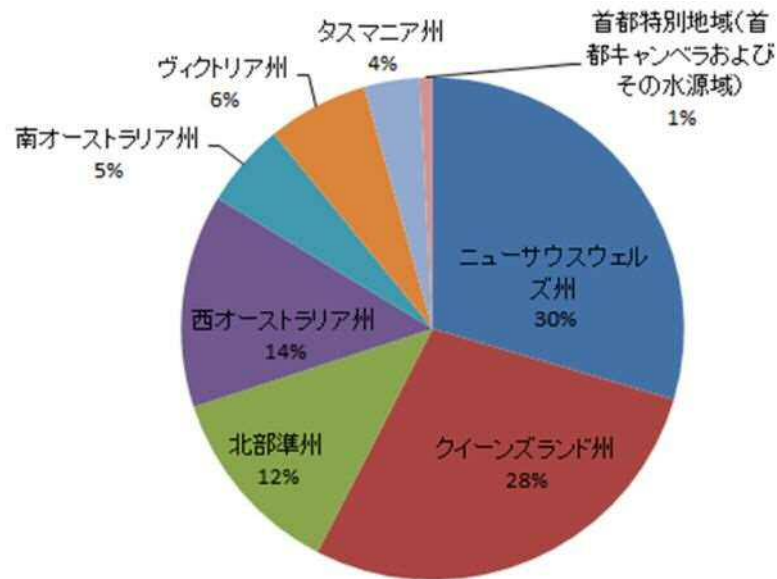
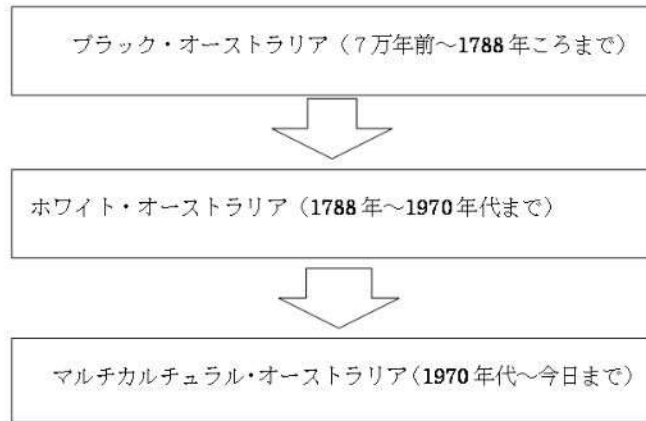


図 3 アボリジニの州別人口分布（2006 年）（グラフ形式）

表 1 および図 3 アボリジニの州別人口分布（2006 年）

出所：32380-ExperimentaiEstimates and Projections, Aboriginal and Torres Strait Islander Australians, 1991 to 2021 Australian Bureau of Statistics より作成

① アボリジナル・オーストラリアから多文化オーストラリアへ：



② アボリジニ政策：

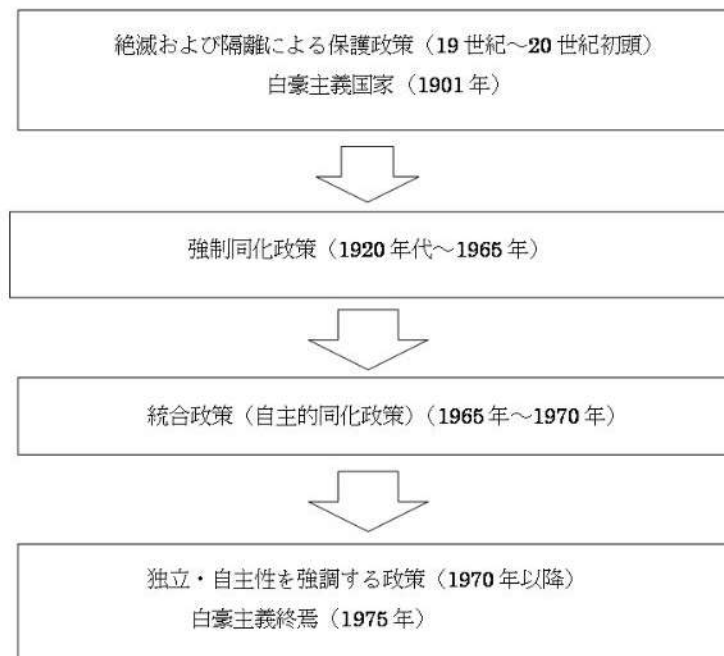


図4 アボリジニ文化の変遷と政策

4.2 アボリジニ社会の生活内容

アボリジニの生活様式は主流社会（白人社会）の影響を受け劇的に変化してきた。彼らの伝統的な生活文化を観光資源とするうえで、その変化と現在のアボリジニ社会（暮らし）における問題点をみておきたい。

4.2.1 かつての生活様式

かつての生活は採集と狩猟に基づき、簡単な石器や木器を利用していた。彼らは自然環境についての知識と理解をもとに、毎年同じ時期に領地内の特定の範囲で食糧をもとめて移動して生活していた。

男は投槍をはじめとして、ウーメラ（槍投げ器）やブーメランを使って、カンガルーやワラビー、エミュー、ゴアナ（オオトカゲ）などの野生動物を捕った。女は、編み簍をさげて、木の実、野生の野菜、穀類など植物性の食物を掘棒などの道具を使って採集したり、昆虫や小動物を捕獲したりしたが、水を発見することも重要な仕事であった。また、男はヤス漁やモリ漁、女は貝採りやカニ釣りと、仕事が異なっていた。つまり、分業がみられたが、女性の採集や採取に依存する割合が高かった。自ら耕作することや飼育することがなかったため、基本的には動植物など自然の恵み（ブッシュタッカー）に依存し、特定の領土の自然の恵みにすべてを依存していたので、その自然の恵みを与えてくれる土地を中心に宗教行為⁽⁸⁾が行われていた。

生存のための仕事や生活のための活動と生産的労働は一体であり、それは生活と渾然と一体化し一般的な労働のコンセプトを持っていなかった。つまり近代的な意味の労働の概念は存在しなかった。しかも、慣習・儀礼、魔術・宗教、イデオロギーなどが絡み合って生活が営まれていた。

4.2.2 現在のアボリジニ社会

白人たちによって資本主義特有の生活や意識を持ち込まれ、現代のアボリジニ社会は、資本主義以前から産業化社会、そして現代という資本主義社会の歴史的流れを横倒し的に同時進行させているように見える。



図5 観光客に説明するアボリジニ

(出典：TOURISM AUSTRALIA (<http://images.australia.com>) より許可を得て掲載)

現在のアボリジニは1967年の(憲法改正)国民投票によってオーストラリア国民となった⁽⁹⁾。そして政府からオーストラリア人として最低限の生活をする権利が与えられ、保障が受けられるようになった。彼らの収入は政府による福祉給付金や失業保険金の給付⁽¹⁰⁾により助けられており、社会保障手当やアボリジニ専用の補助金などの資金をベースに、アボリジニ社会が運営されている。しかし、それにとまって人工的にもたらされた貨幣経済がアボリジニ社会にも浸透し、彼らの生活は激変した。

現在はTシャツやスカートなどの衣服を着用し、無線、電話、自動車(ラウンド・クルーザー)、銃などを使い、砂糖、缶詰なども食料としている。そして行政、教育、医療、マーケットなどの設備がそろった「まち」からの支援による「むら」が存在し、白人とアボリジニが運営する政府出資のアボリジニ組織がある。彼らはカネを媒体として食料や衣類、生活雑貨そして耐久消費財などの保有財を持つようになった。このことにより、アボリジニ社会は物質的には豊かになり、現代社会の「文明」にも触れる機会が増え、さまざまな利便性も手に入れてきた。

しかし、この結果ある意味での“豊かさ”や利便性だけではなく、その弊害もかなりでてきている。

図 6、図 7 で見るように非先住民と比べて、アボリジニ（先住民としてトレス海峡諸島民も含む）は、労働力参入率に大きな差があり、失業率が高く、オーストラリア政府による雇用促進は難航している。それはそれぞれの図で見るように各年齢層においても著しい割合を示している。特に図 8 を見ると、アボリジニは全体に失業率が高いうえに若い層の失業率が高く、また全体の失業率に占めるアボリジニの割合も高いことがわかる。この状態においても、オーストラリア国民として最低レベルの保障が与えられているため、今日では「保護」という半人前の状態ではなく、「福祉」というかたちで保障が受けられるようになっている。しかしそれは上から与えられるものであり、かつてのように主体的に自らつくる生活からは離れていくことになった。また、社会保障手当や補助金の支給は、依存による就労意欲の低下など主体性確保の弊害になるなどの問題も出ている。そして、白人を中心とする社会の底辺に暮らすことにもなり、ライフスタイルを変えざるを得なくなった。原始的なライフスタイルから離れて都市化してきて、アボリジニとしての伝統や文化の直接的継承も難しいところまでできているのかもしれない。

アボリジニ社会における地位や価値観は、男性にとっても女性にとっても同様であり、かつては命を生み育むといった人間の根源に関わることや、精神的思考のうえで人間存在に関わること、生きていくために大切と思われる知識と技術に重要性を見出していた。しかし、その考え方にも変化がみられるようになり、市場主義経済社会における労働観念や意識、金銭的ベースがあることは社会的基盤があることを意味していることなど、社会的な地位や金銭面に重きが置かれるようになってきた。この変化の背景には、教育と福祉と貨幣経済の 3 つの要素が密接に関わりながら関係している。

Labour Force Participation Rates By Indigenous Status(a), 2011



(a) Excludes those whose Indigenous and/or labour force status was 'Not Stated'
Source: ABS 2011 Census of Population and Housing

出所：オーストラリア統計局 (Australian Bureau of Statistics) Labour force (労働力)

Labour force (労働力) 青ーアボリジニとトレス海峡諸島民 赤ー非先住民

出所：(Australian Bureau of Statistics) オーストラリア統計局資料

図 6 Aboriginal and Torres Strait Islander Peoples' Labour Force Outcomes

アボリジニとトレス海峡諸島民の労働力参入率 2011 年

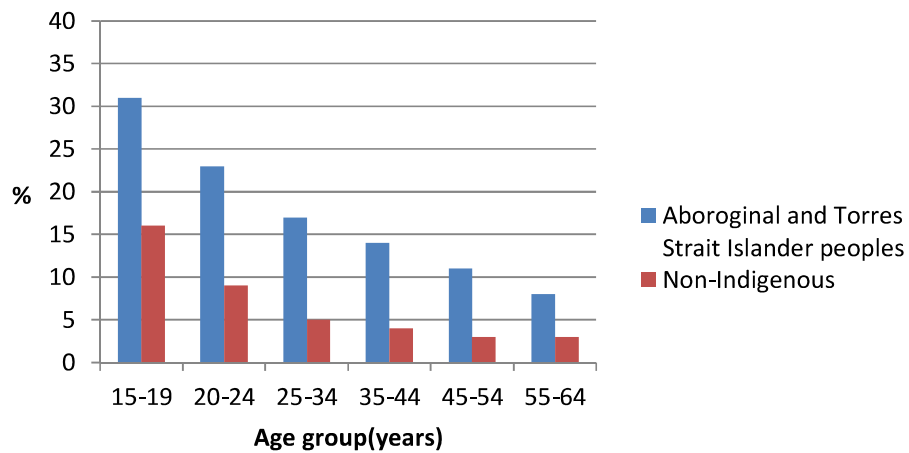
表2 先住民非先住民の労働状態

先住民か否かによる労働状態 (a) (b) - 2011		
労働状態	先住民 (%)	非先住民 (%)
雇用率	46.2	72.2
失業率	9.6	4.2
非労働率	44.1	23.6
合計	100	100
合計(調査人数)	315,230	13,195,580
労働参加率	55.9	76.4
全労働人口に対する失業率	17.2	5.5
(a) 年齢15歳～64歳の住民を対象		
(b) 先住民であるか否かを表明していない住民, および雇用状態を表明していない住民を除く.		

*先住民合計%は四捨五入などによる誤差範囲内

(オーストラリア統計局資料 41020 オーストラリア社会動向 (Nov2013) より作成)

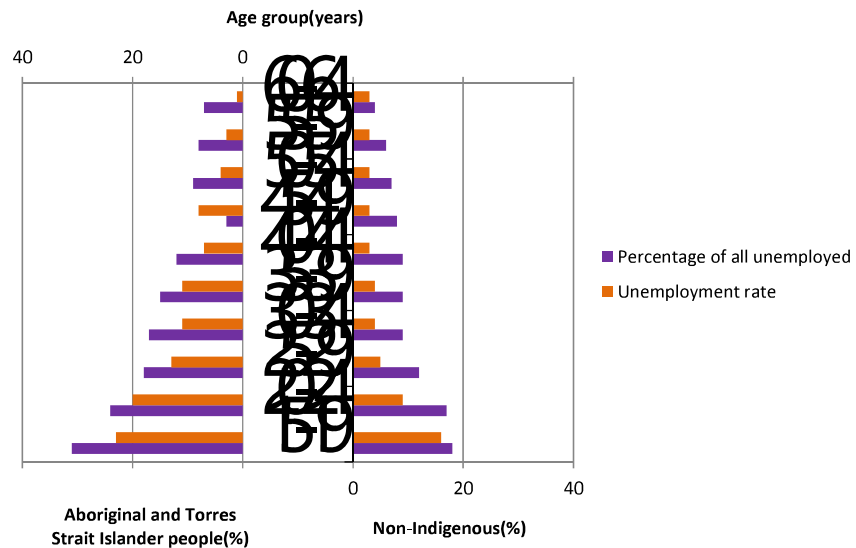
Unemployment Rate(a)



(a) Usual residence Census counts.
Excludes overseas visitors. Includes Other Territories.

図7 Unemployment Rate(s) 年齢層別失業率 (青—先住民 赤—非先住民) 2013年

Unemployment Rate and Percentage of the Unemployed by Indigenous Status and Age(a),2011



(a) Excludes those whose Indigenous and/or labour force status was 'Not Stated'
Source: ABS 2011 Census of Population and Housing

図8 年齢層別失業率、先住民・非先住民の全体失業率における各年齢層の割合

出所：（Australian Bureau of Statistics）オーストラリア統計局資料

2011年 橙—年齢別失業率 紫—全体失業率における各年齢層の割合

4.2.3 貨幣経済社会

伝統的なアボリジニ社会では狩猟採集を行っていたが、今では現金を獲得し、商品を購入し、財として所有することで貨幣経済社会に取り込まれている。

現金収入源は3つある。1つ目は政府が金を注入する“人工的”な経済であり、政府から支給される失業保険など各種の社会保障金である。表3はオーストラリア全市民を対象とした社会保障手当のうち、失業手当と若年者手当を表している。後述の失業率の高さからアボリジニの人びとへの支給率は高いことが予想される。2つ目は、就労による賃金収入である。低い教育レベルや労働観の違いによって、未熟練労働の職業に就く者も多く高

い収入を得ているとは言えない。また、都市部と地方との差が生じてきている。3つ目は、美術工芸の制作活動によるものである。近年、美術工芸は世界的に認められるようになった。特に生活画はペイントとして市場に出され、アーティストと呼ばれる者もいるようになって収入に差が生じてきた。

「まち」開設当時、アボリジニは現金になじめなかった。それ以前は「もの」の価値を現金に換算しなかったし、働いて金を稼ぐという考え方もなかった。もちろん商品観や近代的賃労働観は持っていなかった。生存に必要なものを手に入れつくりだす活動はしていたが、貨幣を獲得するために働くという意識や必要がなかったため、労賃などの現金収入を受け入れたのは、1950年代終わりになってからである。しかし、“仕事を生きがいにする”という様子はなく、人生の意義を職業や金に求めてはいない。また、彼らに“貯える”という生活哲学はない。そして、「腹が満たされれば次の飢えまでやすむ」⁽¹¹⁾という労働観・生活哲学が未だ残っている。

表3 社会保障手当（2005年4月現在）＊オーストラリア全市民対象

支払い	受給資格	フリーエリア（選択）	撤回率
失業手当	21歳以上、失業者	2週間に付き62ドル、使用しなければ1年間で1,000ドルにすることが可能	2週間の収入が62~142ドルで50%、1年間の収入が142ドルを超えると70%
若年者手当 (YA)（失業者）	16~20歳の失業者、「独立」と見なされない限り親の収入調査あり	失業手当と同じ	失業手当と同じ

出所：アリソン・マクレラン、ポール・スミス編、新潟青陵大学ワークフェア研究会訳

『オーストラリアにおける社会政策—社会实践のための基礎知識』（2009）第一法規、210ページより作成

4.2.4 失業率など

① 失業率・職種

小池秀夫は「オーストラリアにおける失業率とその地域差」⁽¹²⁾において、1986年の国勢調査をもとに、アボリジニの年齢別・州別労働力率と失業率を調べた。小池は1986年の場合、失業率は男女とも35%に達しており、全国平均の4倍弱であること、男女別に大差はないが、年齢別の差はあり、15～19歳層で労働力人口の過半数、20～24歳層で4割が失業し、そのパーセントは働き盛りの年齢層でも30%前後に達し、全国の約5倍になっていることに注目した。そして、各州ともほとんどの年齢層において全国平均の2倍以上の失業率であり、劣悪な雇用・失業状態であることを示している。

かつての状態が悪かったであろうことは、C・マクグレガー『オーストラリアの人びと』に記されているアボリジニについての以下の文章からも容易に想像できる。「彼らはオーストラリア社会でもっとも迫害され、権利を侵されているマイノリティである。多くが貧困にあえぎ、満足な教育も受けられず、白人の偏見によって見下され、路頭に迷い、未来に希望がもてないでいる。(中略)もし仕事につけたとしても、たいていは卑しい未熟練労働である。そして何にもまして大きいのは、彼らの人生の大半が白人の厳しい根強い人種偏見にさらされていることである(穂田照子監訳)PMC出版、1987年」。

先にあげた表2、図6、図7、図8でもわかるように、その後になってもアボリジニ(先住民としてトレス海峡諸島民を含む)の失業率は高く、特に若い層では、失業率が高いというだけではなく、非先住民の倍以上になっている。また表4で示したように、失業率が高い中でも主要都市は低く、地方や遠隔地(アウトバック)が高くなっている。この差の理由としては、アボリジニの雇用機会の関係が考えられる。そして、失業率の男女差はあまりないように見えるが、労働力率が異なっていることにも注意が必要である。

アボリジニが“人”としての存在が認められている今日でも、未だ決して良いとは言えない状態であるこれらの要因は、労働観を含む考え方・生き方の違い、低い教育、言語(英語)の習熟度、偏見と差別などから生じてきた広義のキャリア形成不足によると考えられる。

就職していてもアボリジニは未熟練労働など低い地位の職業に就いていることが多い。表 5 ならびに図 10～11 のアボリジニ・トレス海峡諸島民の職業は、西オーストラリア州の例である。これらの例は、政府の関与などもあって職種に公務員やそれに類する団体職員の割合が高いことが際立っている⁽¹³⁾。また、都市（カニンガー西オーストラリア州の都市名）のほうに職の機会があることが読み取れる。しかし、失業者や未熟練労働者が多いのも事実である。それは後に示す教育のレベルの低さが関係し、また熟練の乏しさや労働観の違いも理由となっている。就職の機会均等が法的に示されているため、アボリジニに対して表面的には就職差別はないように見えるが、実際はそうではないことは明らかである。また、男女の職種の差もみられる（図 9）。

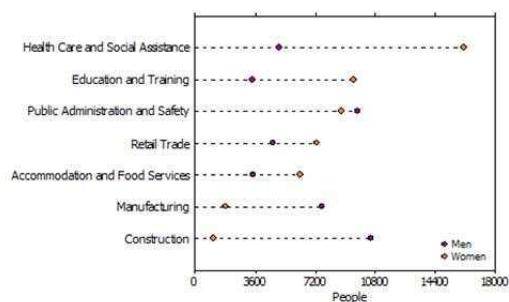
表 4 15 歳以下の先住民の遠隔地による労働力状態（2011 年）

男性・女性	男 性		女 性		全 体	
失業率・労働力率（％）	失業率	労働力率	失業率	労働力率	失業率	労働力率
主要都市	12.3	66.5	14.3	52.5	13.2	59.3
地方	19.8	62.0	18.9	49.9	19.4	55.8
遠隔地	16.2	54.6	13.3	44.1	14.9	49.3
オーストラリア	16.4	61.6	16.1	49.3	16.3	55.4

*Australian Bureau of Statistics (2012) オーストラリア統計局カタログ番号 6287DO001

より作成

LEADING INDUSTRIES OF EMPLOYMENT FOR ABORIGINAL AND TORRES STRAIT ISLANDER PEOPLE(a)(b) BY SEX, 2011



(a) People aged 15-64 years.

(b) Excludes those whose Indigenous and/or labour force status was 'Not Stated'.

Source: ABS 2011 Census of Population and Housing

図9 アボリジニとトレス海峡諸島民の男女別職業 2011 年 出所：オーストラリア統計局資料

表5 アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業（西オーストラリアと都市カニング）表 2006,2011 年

Occupation of employment							
Aboriginal and Torres Strait Islander peoples – City of Canning		2011			2006		
occupation	Number	%	Western Australia-ATSI%	Number	%	Western Australia-ATSI%	2006 to 2011
Managers	14	5.7	5.6	11	4.5	4.3	+ 3
Professionals	43	17.5	12.9	37	15.2	10.1	+ 6
Technicians and Trades Workers	40	16.3	13.1	40	16.4	11.5	+ 0
Community and Personal Service Workers	34	13.8	15.5	38	15.6	15.0	- 4
Clerical and Administrative Workers	46	18.7	13.0	38	15.6	11.1	+ 8
Sales Workers	4	1.6	4.5	15	6.1	4.8	- 11
Machinery Operators And Drivers	25	10.2	13.2	23	9.4	8.9	+ 2
Labourers	35	14.2	17.9	35	14.3	28.3	+ 0
Inadequately described	5	2.0	4.3	7	2.9	6.0	- 2
Total employed people aged 15+	246	100.0	100.0	244	100.0	100.0	+ 2

出所：オーストラリア統計局資料



図 10 アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業（西オーストラリアと都市カニング） 2011 年
出所：オーストラリア統計局資料



図 11 アボリジニ・トレス海峡諸島民の職業（西オーストラリアと都市カニング）
2006 年，2011 年（出所：オーストラリア統計局資料）

② 収入源

先にも触れたように現金収入源は、政府が金を注入する“人工的”な経済、つまり連邦政府から支給される失業保険などの各種の社会保障金、就労による貸金収入、そして美術工芸の制作活動によるものである。

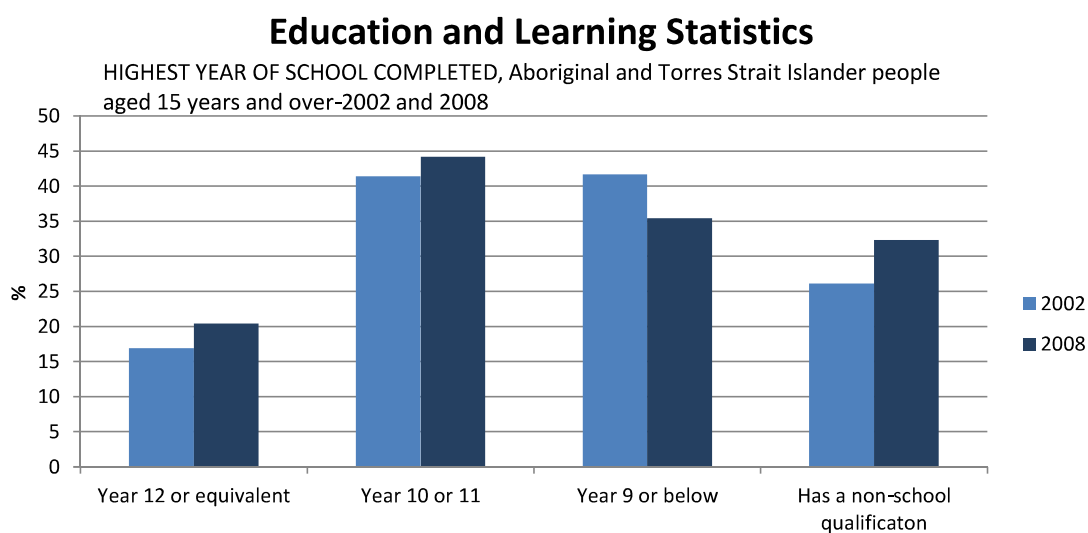
『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』のなかで、友永雄吾が調べた 2006 年の国勢調査などでも失業率は全人口 52%に対し 20.3%とやはり約 4 倍となっている⁽¹⁴⁾。(全人口約 2,000 万人、先住民人口約 42 万人。)そして同書にはアボリジナル法人の 2007 年の収入源について、3 つの団体の決算書にもとづき作成されたグラフが載っている。それによると、(1)ヨルタ・ヨルタ・ナイション・アボリジナル法人の収入源は州および連邦政府から 59%、助成金 27%、事務所レンタル 1%、その他の収益 13%、(2)ルンバララ・アボリジナル法人の収入源は 96%が州および連邦政府から、その他の収益 4%、(3)ニュンダ・アボリジナル法人家族サービスの収入源は州および連邦政府から 68%、その他の収益 32%であった。いずれにしても州および連邦政府からの割合が多く、経済的自立とは言えない状態が窺われる。

4.2.5 教育

教育は雇用・収入・健康問題に影響し、好傾向のための主要因と考えられている。オーストラリア政府は「すべての国民に教育を」という信念のもとで、無線学校など遠隔地でも教育が受けられるよう教育の改善を図ってきた。そのため教育参加は増加傾向にあり、高等教育を修了する者も増えてきた。アボリジニも僅かではあるが増加傾向にある。図 12 に見るように 2002 年と 2008 年では修学年数が少し増えて、その傾向は続いていると考えられる。しかし、図 13 でもわかるように、12 年教育の修学について非先住民と比べると教育レベルは低いのが現状である。教育レベルの低さは、職に就く機会を減らす要因となり、また職種も限られ、収入面に影響している。そして、衛生や栄養の知識不足は健康面にも影響している。

アボリジニの教育がなかなか進まない要因の一つは、アボリジニ側の教育に対する不信感がある。「失われた世代」(第 3 章注)の経験から、教育を白人化する契機と考える者がいる。そし

でもう一つの要因として、経済的理由で教育費が捻出できないこと、親の教育レベルの低さが子供たちの教育に影響していることがあげられる。アボリジニの修学率の向上のためには、政府による経済面の援助や、アボリジニの人びとの収入向上や、国全体における白人中心の考え方などの点での改革が望まれる。

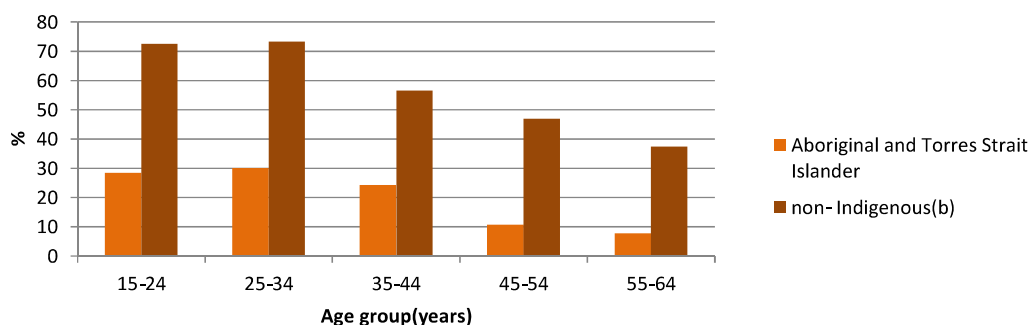


Source: Table 05; National Aboriginal and Torres Strait Islander Social Survey, 2008 (cat. no.4714.0)

図 12 アボリジニ・トレス海峡諸島民の修学年数（2002 年，2008 年）

出所：豪国勢調査 2008

COMPLETED SCHOOL TO YEAR 12, persons aged 15-64 years(a)-2008



(a)Excludes persons still attending secondary school

(b)Estimates for non-Indigenous persons from the Survey of Education and Work were averaged across the 2008 and 2009 surveys

Source: Table 3.2, Education; The Health and Welfare of Australia's Aboriginal and Torres Strait Islander Peoples. Oct 2010 (cat. no. 4704.0)

図 13 12 年教育修学の年齢別割合（2008 年）

出所：豪保健福祉局カタログ番号 4704

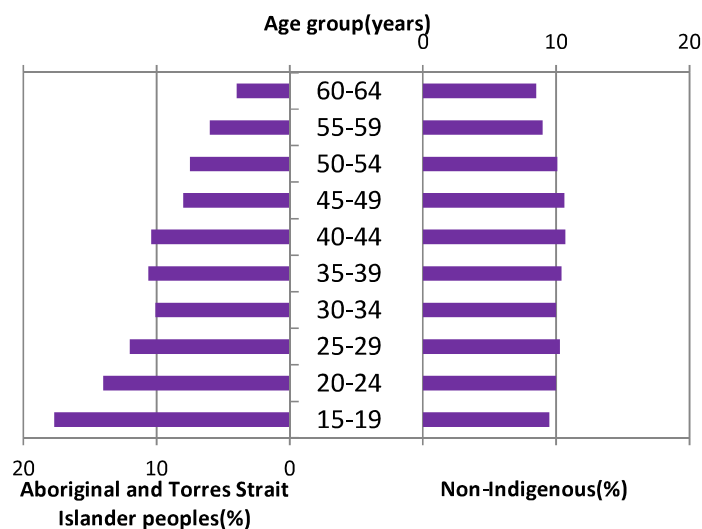
茶—アボリジニ・トレス海峡諸島民 こげ茶—非先住民

4.2.6 現代アボリジニの健康状態

アボリジニの健康はオーストラリア人の平均に比べてあまり良くない状態にある。アボリジニの平均寿命は男性 57 歳、女性 64 歳（白人の平均寿命は男性 76.6 歳、女性 82.0 歳）というデータがある⁽¹⁵⁾。また、国連開発計画 (UNDP) による人材開発報告書 (Human Development Report 2004) での報告によると、先住民と非先住民との平均寿命の差は、－20%になっている。

図 14 は 2011 年の先住民と非先住民の年齢による人口構成の割合を示している。先住民は非先住民に比べ、子どもの層の割合が多く、年齢が高くなると人口構成での割合が少ない。このことから、未だに平均寿命が低いことがわかる。

POPULATION BY AGE BY INDIGENOUS STATUS (a)(b), 2011



(a) Number of people, by 5 year age groups, as a proportion of the population aged 15-64 years of age.
Excludes those whose Indigenous status was 'Not Stated'
Source: ABS 2011 Census of Population and Housing

図 14 2011 年の先住民と非先住民の年齢による人口構成 (%)

出所： (Australian Bureau of Statistics)オーストラリア統計局資料

アボリジニは全オーストラリア人に比べて寿命が短く、その主な死因は心疾患、負傷、呼吸器疾患、がん、内分泌系疾患（糖尿病）などである。アボリジニの健康状態が全オーストラリア人の平均と比べて悪いのは、幼い頃よりの生活環境の影響とその抱える社会的・経済的問題が大きく関わっていると考えられている。

オーストラリア統計局による 2012 年から 2013 年の先住民の健康調査のデータ (4727055003・ Australian Aboriginal and Torres Strait Islander Health Survey: Biomedical Results, 2012-2013) から次のように健康状態が劣悪なことがわかる。

- ・調査した 11.1%（10 人中 1 人）が糖尿病であった。 ＊血液検査の結果、さらに 47%の人はその危険性が高い。
- ・調査した 65.3%の人に、心疾患の危険因子があった。 ＊コレステロールを低くする薬物を飲んでいても総コレステロールの値が高かった。

・調査した 17.9%の人に慢性腎臓病の兆候があった。

現在、都市に住みオーストラリアの白人社会の影響を受けて欧米型の食生活を営むアボリジニを中心に、糖尿病をはじめとする生活習慣病が問題となっている。伝統的な狩猟・採取生活を営んでいた頃のアボリジニは、糖尿病や心臓病に罹患するものはいなかったが、近年、糖尿病を発症するアボリジニが増加した。アボリジニの間で見られる糖尿病はⅡ型糖尿病であり、遺伝的な体質に加え欧米型の食生活や都市型の生活習慣の影響が原因と考えられる。青山晴美もその原因として、伝統的文化から切り離されて都市生活を送るアボリジニの食生活が脂肪と糖分のみが多く栄養価の低い食事に偏っていることがあり、加えて、劣悪な住環境、貧困、精神的にも物質的にも恵まれない状況があると述べている⁽¹⁶⁾。

自らのアイデンティティを失いアルコール中毒にかかる者も多い(図 15)。2012 年から 2013 年の統計局のデータ (4727055001・ Australian Aboriginal and Torres Strait Islander Health Survey: Biomedical Results, 2012-2013) によると、15 歳以上の先住民の 72%がアルコールを飲んだことがあり、特に男性になると 77%とその数字は上がる。2009 年の国立健康医療研究協会 (NHMRC : National Health and Medical Research Council) は、寿命のリスクへの影響のためにアルコールに関するガイドラインを示している。



図 15 昼間に飲酒をするアボリジニの若者 (Adelaide にて) (撮影：筆者)

4.3 多文化主義への移行と和解 (Reconciliation)

オーストラリアでは、白豪主義（オーストラリアは白人のみの世界でなければならないという有色人排斥主義・政策）から、今日の多文化主義への流れの中で、1920年代から1960年代にかけて、アボリジニの白人同化政策が行われていたが、“和解” (Reconciliation)⁽¹⁷⁾がなされ、現在はオーストラリア市民となっている。その流れについては前出図4①②を参照してほしい。同化政策の一環として行われていた強制隔離政策の結果生じた「盗まれた世代 (stolen generation)」の後遺症とも言える問題は今でも続いている。「盗まれた世代」とは、ヨーロッパ人とアボリジニの混血児は白人社会への同化が可能と見なされ、強制的に親から引き離されて施設に収容されたり、白人家庭で育てられた者たちのことで、「失われた世代」 (lost generation)ともいう。政府の政策によって1970年まで行われていた。(第3章注でも詳細説明)

2008年2月に当時の首相ケビン・ラットはこの「盗まれた世代」に対する謝罪のなかで平均寿命や教育、経済的機会における先住民と非先住民間の格差を埋めることに触れ、真に平等なパートナーとなり、均等な機会を保障することを示している。

4.4 労働の考え方・キャリア形成

「まち」の開設当時、アボリジニは現金になじめなかった。貨幣経済が浸透していなかった時期には、モノの価値を現金に換算することはなく、働いて金を稼ぐという考え方もなかった。生存に必要なものを手に入れてつくりだす活動はしていたが、貨幣を獲得するために働くという意識や必要がなかったため、労賃などの現金収入を受け入れたのは1950年代の終わりになってからである。

貨幣経済社会の一員として生きていくには、収入を得ること、そのために働くこと、職業に就くことを必要としている。働くことについて、現代社会の人びとと先住民との意味合いはかなり違っていた。先住民のかつての暮らしは自然と共にあり、まさに生きるために自分の内から動機づけられた活動であったが、貨幣経済社会において財を得て生計を維持する活動という

意味での“労働”は先住民たちにとっては新しく、カルチャーショックは否めなかっただろう。経済的労働の意味が明確でなければ「何のために、何をするか」がわからず、能動的に“働く”こともなく、そのすべもわからないまま、保護対象者となっているのかもしれない。また、生きる意味の重要性を説いたV・E・フランクル (Viktor Emil Frankl) は、労働の意味について「具体的な職業そのものが問題なのではなく、人間的な実存の唯一性の本質をなす人格的なものと独自のものを労働において発揮し、そのことによって、人生を意味あるものに行っているかどうかの問題なのである。」⁽¹⁸⁾と述べているが、それ以前に、生きていくための活動役割(仕事)はあっても職に就く(職業労働)ということがなかった彼らは、経済的労働の意味だけではなく、哲学的労働観(人生観)についても戸惑うことになっただろう。図 15 で示したように、街中にはアルコール片手に流浪するアボリジニの姿がある。

収入を得て生活をするという考えとそのための労働について、貨幣経済社会において賃金という形で収入を得る働きを“労働”(経済的働き・賃金労働・社会的労働)とし、それ以外の直接賃金という形にはならない働きを大きくくりとして“仕事”(非経済的働き)と考えると、アボリジニの伝統的な生活文化における生きるための働き(活動)は、“仕事”と考えることができる。貨幣経済社会において収入を得て生活することになると、生きるための働き(仕事)が、非経済的仕事と“労働”(経済的労働)に分けて考えられるようになる。つまり、アボリジニの日常的な非経済的仕事の中身が変わり、日常の労働の仕方も変わってくる。そして、生きるための仕事が“労働”(賃金労働)に変わることは、アボリジニの労働観を変えることである(図 16)。

その生きるための働き、“仕事”が、観光という媒体を通して、賃金(ガイド料や出演料など)または代金(自らが制作した絵画やみやげ物などの販売)という形で収入を得る働きに変わると、経済的労働(社会的労働)となる。その労働は観光という商品の交換価値を収入(賃金・代金)という形で表す観光事業、産業となる。つまりアボリジニ観光は、アボリジニが行う経済的・社会的労働の一つとなる。そして、そこに職業としての労働の意味を見出し得るかもしれない。

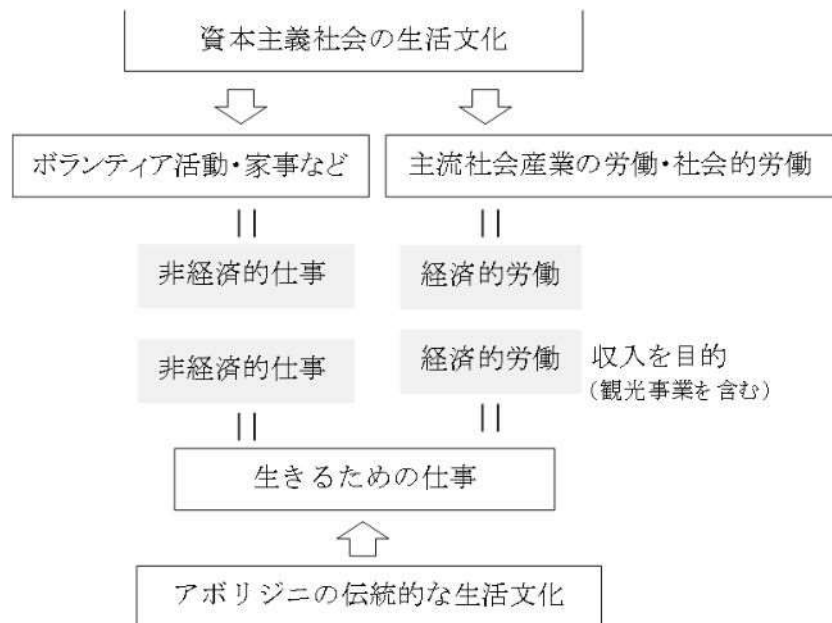


図 16 資本主義社会の労働観とアボリジニの労働観（経済的工作）

4.5 ウラン鉱山

原子力を用いるためには、その原料となるウランが欠かせないのであるが、ウラン鉱山の多くがアボリジニの人びとの伝統的な土地所有地に存在している。採掘権をもつ企業は土地使用に対し金銭で解決しようとするが、そのような行為がアボリジニの人びとの自尊心を傷つけて、多くの先住民がウラン鉱山開発に反対してきた。村上雄一は、「ウラン鉱山開発には巨額な資金が動くが、それが必ずしもその土地に住んでいる人びとを幸せにしているわけではないことがわかる。それどころか伝統的な土地とのつながりが途切れてしまうことによる、先住民としてのアイデンティティの喪失、アルコール中毒等の健康被害、そして金銭トラブルによる共同体内の人間関係の分断が引き起こされるなど、先住民が彼らしく生きることを困難に、すなわち、彼らの基本的人権が侵害されるような事態を引き起こしているのである。」⁽⁴⁹⁾と述べている。このことは、「失われた世代」と同様（ことによってはそれ以上）の問題であると言えるだろう。

〈注・引用文献〉

(1) 小山修三『狩人の大地』雄山閣出版、1994年、18ページ

(2) トレス海峡とは、ニューギニア島南岸とオーストラリア北端のヨーク半島との間の海峡であり、1606年にスペインの航海者トレスが発見・通過したことにちなんで命名された。この幅約130kmの海峡には、木曜島など約300の島々からなるトレス海峡諸島があり、オーストラリア領である。トレス海峡諸島民（Torres Strait Islanders）とは、この諸島の居住者または出身者を指している。

(3) アボリジニの定義：1967年採択のオーストラリア政府によるアボリジニの「主観的定義」は、次の3つの条件をすべて満たす人間である。（神保満『悲しきブーメラン』未来社、1994年、67~69ページ）

①アボリジニの子孫であること

②自分はアボリジニだと思っていること

③自分の属するコミュニティの人びとがアボリジニと認めてくれていること

（＊政府は個人の背景を調査したりしないので、③はあまり重要ではない。）

つまり、アボリジニの血が入っていて、アボリジニだと主張すれば、アボリジニということになる。この定義では、「バート・アボリジニ」（混血の子孫）も含まれる。（＊政府は「バート・アボリジニ」という用語を採用せず、この用語は公用文書以外で用いられている。）これに対して、「純粋のアボリジニ」（混血のないアボリジニ）は、次の3つの条件による（「宗教的定義」）。

①自分達の家族に伝わる神話（ドリーミング（dreaming）といい、先祖の行動に関する物語）と歌と踊りーすなわち儀式をもつこと。

②その儀式に対応する土地をもつこと。

③男性の場合、成人式に始まり各年齢に対応する宗教的訓練を受け、「男」として成熟してゆき、女性の場合、女性の儀式に参加し、かつアボリジニ男性と結婚すること。つまり、女性も神話を継承していること。

- (4) <http://www2unwto.org/32380>・Experimental Estimates and Projections, Aboriginal and Torres Strait Islander Australians, 1991 to 2021, 2009, Australian Bureau of Statistics, <http://www.abs.gov.au/AUSSTATS/abs@nsf/DetailsPage/323801991%20to%202021?OpenDocument>
- (5) 関根政美・鈴木雄雅・竹田いさみ・加賀爪優・諏訪康雄『概説オーストラリア史』有斐閣、1988年、312ページ、313ページ
- ＊アボリジニの居住地域別人口（1981年、割合）
- 1 アウト・ステーションその他の小コミュニティ 49%
 - 2 小都市—アボリジニ都市（所有地・保護区含）196%
 - 3 小都市—白人都市（中都市含） 343%
 - 4 大都市（人口 20,000 人以上）および州首都 413%
- (6) 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市—人類学新しい地平』青木書店、1999年、iii ページ
- さらに、都市生活にともなう変容は、先住民にとってのみ固有な問題ではなく、先住民が他者と異なるのは、先住民がマジョリティ社会との拮抗関係をより明確化させる点にあるとして、権利回復運動や文化復興運動となってあらわれる、と述べている。
- (7) 社会情勢の変化から、同化政策は統合政策へ移行。統合政策は、アボリジニに適応され、その移行の中でオーストラリア国民として認知されることとなった。1972年、政府は人種差別的要素の強い移民政策を廃止。それは事実上の白豪主義の終焉であった。政府は、現実への対応策として同化政策から多文化主義（政策）に変えた。アボリジニ政策は、1970年代に全国アボリジニ協議委員会（NACC）と全国アボリジニ会議（NAC）を、1989年にアボリジニ・トレス海峡諸島民委員会（ATAIC）を、1990年にアボリジニ和解問題協議会を設立、その後も揺れ動きつつ政策の将来の方向性が示された。
- (8) 出産に関すること、イニシエーション、ドリーミング（祖先や神話に関する独特な思想）についての行為が、秘密裡に行われる。

- (9) 1967 年にアボリジニ問題について、憲法改正国民投票が行なわれた。連邦政府が初めて、本格的な原住民問題への取組みを決意した意思表示であった。(中略) 憲法改正案は、(1) 原住民問題について連邦議会が立法権限を保有できる、(2) 原住民を「オーストラリア人口」として国勢調査の記録に加える、というもので、国民投票はかつてない賛成票で可決された。(中略) かくして、オーストラリアの年鑑 (Year Book of Australia) をみると、1967 年版までは人口統計に「原住民を除く」とあったが、68 年版からこの言葉が削除され、アボリジニを含めた新しい人口統計となっている。(長坂寿久『北を向くオーストラリア』サイマル出版会、1978 年、59~60 ページ)
- (10) 連邦政府の社会福祉省からアボリジニ援助局を通して、失業保険金など各種の社会保障金が支給される。失業保険金 (失業手当) は、就業年齢になっても職をもたないすべてのアボリジニに支給されている。それは、2 週間に一度支給され、その金額は家族構成の違いによる。(松山利夫『ユーカリの森に生きる』日本放送出版協会、1994 年、128 ページ)
- (11) 小山修三『狩人の大地』雄山閣出版、1994 年、186 ページ
- (12) 小池秀夫 「オーストラリアにおける失業率とその地域差」(『愛知学院大学論集「経営学研究」』第 2 巻第 3・4 号 1993 年、45 ページ)
- (13) アボリジニが公務員に積極的に採用され始めたのは 1970 年の後半で、先住民族への優先政策の導入が大きな役割を果たしている。アボリジニ関連の業務の採用では、「アボリジニの事柄に従事していること」、「アボリジニの文化を熟知していること」などの条件が求められた。このことはアボリジニに職業と所得を提供する機会の一つとなっている。
- (14) 友永雄吾『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』明石書店、2013 年、63 ページ
- (15) Teach Australia (豪日交流基金主催、2002 年) Professor. Lyndall Ryan 報告資料より
- (16) 青山晴美『アボリジニで読むオーストラリア』明石書店、2008 年、194 ページ
- (17) 政府と先住民との和解、1990 年代に提起され、2000 年に文書で発表された。しかし完結できず、2008 年の「盗まれた世代」に対する「謝罪」を経て、理念上決着したのは 2013 年と考えられている。真の和解にはもう少し時間が必要かもしれない。

- (18) V・E・フランクル (Viktor Emil Frankl) 著、山田邦男監訳『人間とは何か 実存的
精神療法』春秋社、2011 年、208 ページ

『人間とは何か 実存的精神療法』は、アウシュヴィッツを潜った精神科医で心理学者であるフランクルの主著。このなかにも書かれている労働の意味において、「人間がどういう職業についているかが重要なのではなく、むしろその人間がいかにかそれを為しているかが重要なのである」と述べた次の文。

- (19) 村上雄一「放射線被ばくと人権に関する一考察 ―脱被ばくへ向けて―」『行政社会論集』第 26 巻第 2 号、福島大学行政社会学会、2014 年、45~48 ページ

5 オーストラリア政府の観光の考え・取り組み、観光政策

5.1 国際観光

オーストラリア政府は観光に力を入れ、特に海外からの観光者誘客に力を注いでいる。国際観光の収入は多く、2010 年は 30,103 百万米ドルで世界 8 位だった⁽¹⁾。また、2012 年の資料によると、図 17 で見るようにオーストラリアの国際観光収入は 31,500 百万米ドルと若干上がったが、世界 10 位となっている。

海外においてもアボリジニの存在は興味の対象であり、特に 2000 年のシドニーオリンピックでその存在が世界に示されて以降、アボリジニ観光はより多くの外国人観光者の観光目的の一つとなった。

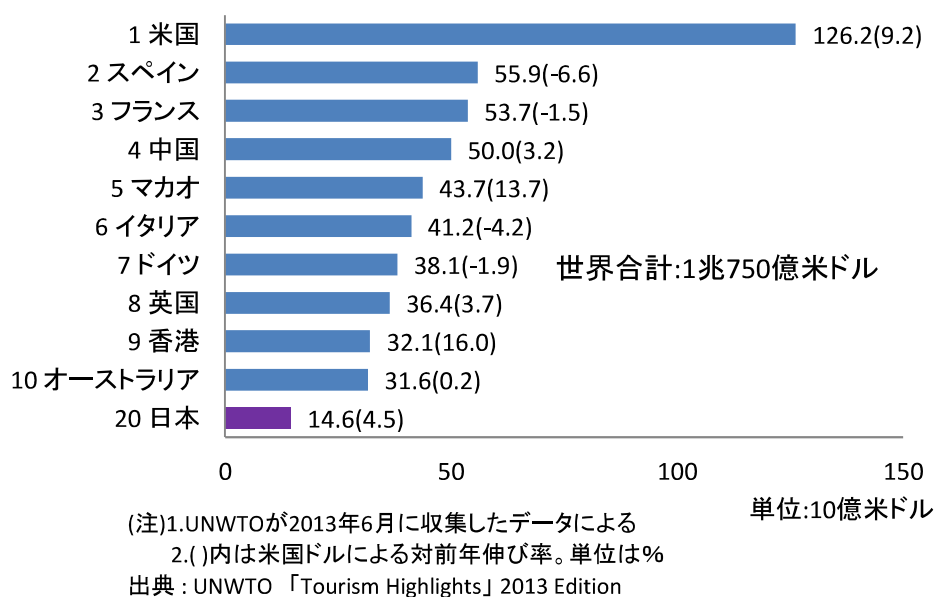


図 17 国際観光収入上位国 (2012 年)

出所: 数字が語る観光業、2014 年、日本旅行業協会、81 ページ

(UNWTO Tourism Highlights 2013 より作成)

5.2 先住民観光ビジネス準備プログラムと関心の高まり

オーストラリア政府は2004年に先住民観光ビジネス準備プログラム（Indigenous Tourism Business Ready Program）を発足させた。これは政府がアボリジニの伝統文化を観光資源としてビジネス展開していくことを示したと言える。そして、海外からの主な観光客が先進国の西洋人であることから、その好むかたちでのビジネス展開と、近代資本主義にそったビジネスモデルのかたちでの展開を行うことになった。

このプログラムでは、「ビジネスマネジメント能力とスキルの開発、戦略プランの立て方、マーケット調査の方法をアドバイスすると同時に、観光ビジネスの流通方法、ネットワークの立ち上げ、商業ベースにどう載せていくのか等の課題が出されている。」⁽²⁾ そして、「アボリジニ観光ビジネスを新たに立ち上げた場合は最大2年間の支援が得られる。成功した観光ビジネスは、ビジネス準備完了となり、主要観光産業と提携したり、ジョイントベンチャーとして資本主義市場の企業の中に組み込まれることも指導される。」⁽³⁾

これは、経済的自立のためにアボリジニを観光産業に参入させる政府の方針を打ち出したもので、アボリジニの雇用を促進させ、失業率を減らし、経済的安定をはかることをねらいとし、それが国家全体の安定にもつながるとしている⁽⁴⁾。また、アボリジニ文化の保護とアイデンティティの確立にもつながるものと考えられている。つまり、アボリジニ観光を奨励することにより、外貨を獲得し、経済的自立にともなう福祉予算の軽減、そして文化の保護に役立つことが期待される。政府の先住民調査委員会による報告書（1994年）⁽⁵⁾では、すでにアボリジニ観光の経済的な面だけでなく、文化面や環境面なども考慮していた。

一例として、北部準州（ノーザンテリトリー）では、2006年1月に、先住民観光（Indigenous Tourism、アボリジニ観光も含む）の2005年から2008年の鍵となる方向性についてリサーチの方針（Agenda）を出し、ノーザンテリトリー観光協会（Northern Territory Tourism Commission）やチャールズ・ダーウィン大学（Charles Darwin University）をはじめとして各種の研究機関もその方針を出している。これにより、先住民観光への関心がこのころから高まってきたことが窺われる。

5.3 先住民観光局 (Indigenous Tourism Australia (ITA))

先住民観光局が 2005 年にオーストラリア観光庁 (Tourism Australia) の中に設置された。

その目的は、「1 アボリジニ観光を持続可能な観光産業のリーダーとして方向づけること； 2 アボリジニの観光ビジネスに必要な能力・技能トレーニングをすること； 3 アボリジニ観光の成功は、これまでのマーケット調査から得た観光客のニーズに見合う形で、アボリジニ文化をいかに魅力的に表象するか」⁽⁶⁾にかかっている。

5.4 政府によるリーフレット類

政府はアボリジニ観光を進めるにあたり、各種のリーフレットやマニュアル本を出版している。例えば、全国先住民観光開発マニュアル (National Indigenous Tourism Product Manual) はオーストラリア観光局が 2009 年に第 3 版を発行している。その内容は文化理解から始まり、芸術と文化やまつり (フェスティバル) や各種のイベントなどについてであり、また州それぞれにわけ、観光推進に向けマニュアルを作っている。

各州の観光局においてもガイドブックなどを発行している。例えば、クイーンズランド州では Guidelines for developing Indigenous Tourism Experiences In Central West Outback Queensland を 2014 年に発行し、ビクトリア州では Aboriginal Tourism を 2008 年に発行している。また、例えばニューサウスウェールズ州では Destination NSW が Aboriginal Tourism Action Plan 2013-2016 を、Tourism NSW が 2001 年に Principles for Developing Aboriginal Tourism を発行したように、各観光機関でもリーフレット類を出している。

5.5 オーストラリア大使館・オーストラリア観光局のホームページ

オーストラリア観光局のホームページはかなり充実しており、近年のホームページの変化が著しいことは好ましいことである。ホームページ上のアボリジニ観光の占める割合が増え、自然観光と共に観光局が力を入れていることがわかる。かつては州ごとのアボリジニのフェスティバル紹介に終わっていたが、近年はそれを紹介するアボリジニツアーの種類が増えている。

オーストラリア政府観光局の日本語ホームページには、「オーストラリアのアボリジニ」「アボリジニ オーストラリアについての詳細」「アボリジニの文化と触れあう」「オーストラリアのアボリジニのフェスティバル」などの項目がある。「オーストラリアのアボリジニの生活を体験して、その地域の魅力や周辺の旅を心から楽しんでください。」という文からはじまり、各州の見どころやフェスティバルの様子などの紹介やそのツアー例（中には具体例なども）などが掲載されている⁷⁾。（リンクがはられ、打ち出しは 50 枚以上になる。）

またホームページでは、毎年 7 月の第 2 週の NAIDOC[®]ウィークを先住民の歴史や文化をアピールする機会として大きく取り上げている。その要因の一つとして、アボリジニはオーストラリア唯一無二の存在であり、特有な自然とともにユニークな存在であることがあげられるだろう。また、人びとが自然や人間の生き方に関心をいだくようになったことも一因であろう。

これまでみてきたように、福祉予算などアボリジニから政府が受ける負荷は大きいと言わざるを得ない。その意味でも、オーストラリア政府は国際観光収入のためだけではなく、アボリジニの雇用拡大にもつながるアボリジニ観光に力を入れている。また、アボリジニ・アートの文化価値が世界的に認められるようになって、アボリジニの文化を観光資源とすることとともに、そのままにしておくで消滅する恐れがある唯一無二の文化を失われる前に存続する要因としてもアボリジニ観光に力を入れている。そしてそれだけではなく、アボリジニの人間としての存在を認め、多文化主義の下で「失われた世代」について謝罪後、国内においてアボリジニに対する関心が高まっている。教育機関でもアボリジニについて取り上げ学ぶ機会が増えると、国内観光としても先住民観光（Indigenous Tourism、アボリジニ観光を含む）に力をいれることとなった。そして国はアボリジニ文化を国民的遺産と位置づけ、アボリジニの“誇り”と“自信”とアイデンティティの回復のためにも力を注いでいる。

〈 注・引用文献 〉

- (1) 日本政府観光局編『日本の国際観光統計 2010 年』国際観光サービスセンター、2011 年、102 ページ (UNWTO Tourism Highlight 2013)
- (2) 青山晴美「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業の実態—マーケット調査とケーススタディ N o 1」『愛知学泉大学・短期大学紀要 43 号』2008 年、66 ページ
- (3) 青山晴美、同上、67 ページ
- (4) アボリジニの雇用を促進させ、失業率を減らし、経済的安定をはかることをねらいとし、政府はレンジャーマニュアルを作り養成したり、積極的に公務員として登用しようと試みたりしている。例えば、オーストラリア政府持続可能な環境・水・人口・コミュニティ機関 (Australian Government Development of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities) は *Indigenous Employment and Capability Strategy 2012-2014* などの冊子を作り、アボリジニやトレス海峡諸島民の能力やキャリア開発を進めて、雇用促進を図っている。観光もその一つの試みである。
- (5) 「調査報告書『アボリジニおよびトレス島嶼人観光における国家戦略』は、先住民の雇用機会や経済的な貢献を以下のように調査目的としていた。①主流観光政策 主流観光産業における先住民のため、より大きな雇用機会を創出することを支援する国家戦略のための情報を提供する。②先住民観光政策 観光企業を所有する新規および既存の先住民を成長促進させる国家戦略のため、情報を提供する。」(朝水宗彦 『オーストラリアの観光と食文化』学文社、2003 年、87 ページ)
- (6) 青山晴美、前掲書、67 ページ
- (7) オーストラリア政府観光局の日本語ホームページの「オーストラリアのアボリジニ」では、例えば、アボリジニの歴史・民族・文化・アートの項を設け、具体的に細かにツアーなどを紹介している。“レッド・センター、5 つの必見ポイント”、“カカドゥ (Kakadu) を知るための 5 つの方法”、“カカドゥの古代アート”などが詳しく、所 (州) 別 (例えば、ノーザンテリトリー、アリススプリングス (Alice Springs) 、カカドゥとアーネムランド、

テナント・クリーク (Tennant Creek) とその周辺、など)、部族別、体験項目別に紹介している。

- (8) NAIDOC は、「アボリジニおよび島民の日遵守全国委員会 (National Aborigines and Islanders Day Observance Committee)」の頭文字を意味する。NAIDOC ウィークは、7月の第1週目の日曜日からの週をさしている。「NAIDOC ウィークは、オーストラリア先住民にとっては自らの歴史や文化をアピールする機会であり、それ以外のオーストラリア人に対しては、アボリジニとトレス海峡諸島民の先祖から伝承された独自の文化や持続的な貢献を認め、学ぶ機会を提供する」としている。(オーストラリア大使館ホームページより)

6 アボリジニが主体となれる産業(労働)：アボリジニ観光

アボリジニ観光は、オーストラリア政府も注目しているが、アボリジニだからこそその事業と言えるだろう。白人中心社会の中でアボリジニが主体となって資本主義社会に参入できる産業として、アボリジニ観光を考えたい。

アボリジニが主体となるということは、観光対象としての主体はもとより、観光業としてもその中心として関わるのが肝心と考える。つまり、アボリジニについての観光なのだから、その内容が多少見せ物的になったとしても、アボリジニ自らが企画や説明、運営などにも中心的に係わり、実演したり描いたり創作するものでなければならないだろう。その意味では、アボリジニ本人たちに観光の経済的意味と近代的労働観を定着させることが必要である。白人が営むビジネスにおいていわれるままの人形にならないための知識も必要となるだろう。アボリジニの土地や観光者向けの場所で、観光者はアボリジニの文化を観たり体験したり、生活画（ペイント）や工芸品や表象として使われた製品を買ったりする。

ここでは、観光資源と文化観光という観点から、アボリジニ文化についてオーセンティシティ（美的価値や歴史的価値）も考慮して考察し、また内なる観光と外からの観光という角度からアボリジニ観光のビジネス価値と文化継承価値を考える。そしてアボリジニが主体となり得る（観光対象としてはすでに主体となっている）観光についての具体例について評価し、さらに日本におけるツアー例に鑑みて観光ツアー案をいくつか考えていきたい。

6.1 観光資源、文化観光

観光は、本来経済的利益を生み出すものではなかったさまざまな文化を観光“資源”とし、観光客に向けた“商品”へと変える。そして“収益”を生み出させる。観光開発が伝統文化を破壊するという議論があるが、観光が伝統文化の衰退を防ぎ、復興させ、継承に貢献することも事実である。「それぞれの地域に固有の生活文化やそれらを基盤にした民族や伝統を求める観光活動の形態は一般に、文化観光と呼ばれ」⁽¹⁾、「こうした観光への関心は近年高まりをみせており、ツアーとして地元の人びとの家や村への訪問、民俗芸能や行事の見物、工芸品の買い物などが

行われている。^②」この意味からアボリジニの伝統的な生活文化は観光資源となる。食べ物、踊り、楽器（音楽・歌）、生活の情報や儀礼のために始まったペイント、生活道具として作っていた工芸品は具体的な観光資源である。彼らの有形、無形の民俗文化財は人文観光資源としてアボリジニの土地（自然風景地）とともに観光利用され得る。

6.2 外からの観光、内なる観光

外からの観光、つまり海外からの観光は、国として外貨獲得につながるため、オーストラリアでも力を入れている。2012年の資料によると第5章図17で見るようにオーストラリアの国際観光収入は315億米ドルで世界10位となっている。海外においてもアボリジニの存在は興味の対象であり、特に2000年のシドニーオリンピックでその存在が世界に示されて以降、アボリジニ観光はより多くの外国人観光者の観光目的の一つとなった。つまり、アボリジニ観光は国の観光ビジネスに一役買っているのである。

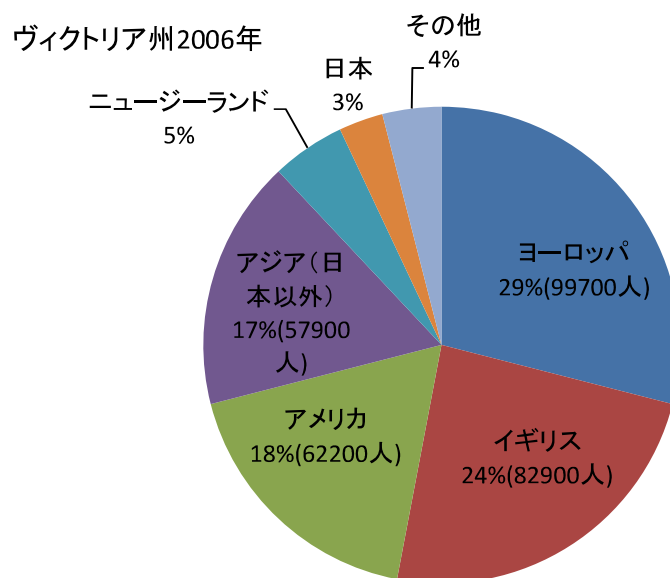


図 18 アボリジニ観光に訪れる国別観光者の割合（ヴィクトリア州、2006 年）

出典：Caroline Martin & Karyn Ross (2008)[168]より作成

例えば、図 18 で示すように、アボリジニ観光に訪れる国別観光者の割合を示すヴィクトリア州 2006 年のデータによると、多い順に、ヨーロッパが 29% (99,700 人)、次いでイギリス 24% (82,900 人)、アメリカ (U S A) 18% (62,200 人) と続き、日本以外のアジア 17% (57,900 人)、ニュージーランド 5%、日本からは 3%、その他 4%であった。(Caroline Martin & Karyn Ross (2008)[168]より)

また別な州の例をみれば、将来的には、アメリカ、中国、イギリスからのアボリジニ観光への参加者が増えるとニューサウスウェールズ州は考えている。日本からはほぼ横ばいで、中国からの参加者増加の見通しは近年の中国の発展を反映しているものと思われる。(Aboriginal Tourism Action Plan 2013-2016 より)

近年、オーストラリアの人びとは国内観光として、アボリジニ観光をするようになった。その数は表 6 が示すように、外国から来る観光者を上回り年々増加している⁽³⁾。これまでのアボリジニは人間としてその存在を示す機会を得ることができず、“そこいらにいるヒト”として白人たちの眼中には入らなかった。それが、1993 年の国連先住民年をきっかけとするアボリジニの市民権獲得を機に、その歴史や生活様式が注目され、アボリジニを知りたい・観てみたい・会ってみたい対象となった。多くの教育機関ではアボリジニ文化を学習する機会を提供し、アボリジニに対する興味を高め、国内のアボリジニ観光にも結び付く一要因となっている。国内のアボリジニ観光の増加は、オーストラリアだけの「オンリーワン観光」であるアボリジニ観光が自国内という身近にあり、オーストラリアの地に共存するものとして理解しようとの表れと考えられる。そしてこの関心の理由の一つには、ジョン・パスモア⁽⁴⁾がいうように、オーストラリアにおいても自然と共存することへの関心が高まっていることもあげられるだろう。その意味でアボリジニの伝統的な文化が観光対象となることは、単なる“見せ物”ではなく、“誇り”を持って存在を示す機会となり得るのである。

表 6 国内観光と国際観光（経費と宿泊数の違い）

	visitors (million)	Share of total visitors (%)	Nights (million)	Share of total nights (%)	Expenditure (\$million)	Share of total expenditure (%)	Average length of stay (nights)
domestic overnight							
Indigenous	2.1	71	16	26	3045	42	8
Other visitors	64	94	240.7	65	39323.5	75	4
Total domestic	66.1	93	256.7	59	42368.5	71	4
International							
Indigenous visitors	0.9	29	45.3	74	4131.7	58	51
Other visitors	4.3	6	131.8	35	13013.8	25	31
Total international	5.2	7	177.1	41	17145.6	29	34
Total visitors							
Indigenous visitors	3	100	61.3	100	7176.8	100	20
Other visitors	68.3	100	372.5	100	52337.3	100	5
Total visitors	71.3	100	433.8	100	59514.1	100	6

出所：（Australian Bureau of Statistics）オーストラリア統計局資料

「オンリーワン観光」という意味では、日本におけるアイヌ文化観光と類似しているところがあるが、アイヌ文化観光が主に北海道で行われるのに対し、アボリジニ観光はウルル（かつてはエアーズロックと呼ばれていた）やアボリジニが多く住むノーザンテリトリーが多いとはいえ、その規模の大小はあるにしてもオーストラリア全土（全州）で行われている。ケアンズにあるジャプカイ・アボリジニ・カルチャーパーク（Tjapukai Aboriginal Cultural Park）のようにテーマパーク化された施設もある。（ジャプカイ・アボリジニ・カルチャーパークについては後に説明。）

ここで少し、観光者相手の「伝統文化」は擬似的な「伝統文化」だろうか、という議論について考えておきたい。“観光商品”となっている伝統文化は、擬似的なものとして否定的に扱うべきだろうか。観光需要のための演出、観光者に、“本物”だと感じさせる演出がなされ、たとえ観光のために“商品”化されているとはいえ、アボリジニ自身が熟成させてきたアボリジニ文化の一端であるはずであり、その文化要素は過去から現在に至り脈々とアボリジニの精神、例えばドリーミングが根底に流れている。それは、非日常を求め、また観光対象についての知識をもった観光者の先住民イメージにかなう文化的差異を伴うものとなっている。観光者が、都市化されたアボリジニにではなく、伝統的とされるアボリジニの姿に価値を見出し、観光商

品として欲し、また、伝統文化として、ふさわしいとアボリジニ自身も認めているならば、それは時代の状況に適合した伝統文化の一形態となり得る。観光のニーズはアボリジニ文化を活性化させ、独自の観光資源に商品としての価値をつける。したがって、観光との関わりによって、生きるアボリジニの伝統文化もまた、擬似的な伝統というよりもむしろ時代に適合し伝統となるだろう。

2010 年の TRA 全国観光者調査 (TRA National Visitor Survey) ⁽⁵⁾によると、観光者は国内観光として、①アート・クラフトまたは文化的な展示を見に行く(54%)、②先住民の土地 (site) やコミュニティを訪ねる(27%)、③ギャラリーを訪ねる(24%)、④カルチャーセンターを訪れる(22%)、⑤先住民と一緒に体験し触れあう(20%)、⑥先住民のアートやクラフト、みやげ物を買う(10%)、⑦ダンスやシアター・パフォーマンスを観る(8%)、⑧先住民ガイドとツアーに行く(6%)、⑨先住民の民家に泊まる(2%)、⑩フェスティバルに参加する(np)、などを行っている。そしてその観光者数と支出は、次の表 7 の通りである。観光者数は、日帰り総人数が 2,114,400 人、宿泊あり総人数が 16,014,000 人とかなりの人数にのぼり、その支出（経費）は、30,450（単位\$million）と相当な額になっている。このことから、アボリジニ観光が人口に膾炙してきたことが窺われる。

表 7 観光者の国内観光

観光内容	観光者数(日帰り)	(宿泊あり)	支出(経費)(\$million)
アート・クラフトまたは文化的な展示を見に行く	1,132,800	86,849,000	1,815
先住民の土地(site) やコミュニティを訪ねる	568,600	4,737,800	8,226
ギャラリーを訪ねる	517,500	4,299,600	9,297
カルチャーセンターを訪れる	459,000	4,541,100	8,616
先住民と一緒に体験・触れあう	421,000	3,414,400	5,902
先住民のアートやクラフト、みやげ物を買う	208,500	2,653,800	5,751
ダンスやシアター・パフォーマンスを観る	159,000	1,362,700	2,325
先住民ガイドとツアーに行く	129,900	1,627,000	3,309
先住民の民家に泊まる	50,200	395,900	695
フェスティバルに参加する	2,114,400	16,014,000	3,045

出所 : Australian Government Department of Resources, *Indigenous Tourism in Australia: Profiling the domestic market*, 2010

6.3 現行のアボリジニ観光の評価と新たな提案

6.3.1 現行のアボリジニ観光

はじめに現行のアボリジニ観光において、アボリジニの文化的資源とそれを観光資源としたツアーについて評価をしておきたい。



図 19 アボリジニによる岩絵の説明

(出典：TOURISM AUSTRALIA (<http://images.australia.com>) より許可を得て掲載)

文化観光が観光者によってなされ、アボリジニの土地や観光客向けの場所で、観光者はアボリジニの文化を観たり体験したり、ペイント・工芸品・表象として使われた製品を買ったりする。

2010 年にオーストラリア政府が行った先住民観光（トレス海峡諸島民も含むため、政府は Indigenous という言葉を用いることが多くなった。従ってここでは資料の Indigenous Tourism は便宜上 Aboriginal Tourism とほぼ同意で考える。）についての調査報告がある。⁽⁶⁾

そのなかで、「観光者は何をしたか」の統計は次のようであった。この調査においても、表 7 の調査と同じ結果になっている。

- ① アートやクラフト、文化的展示物を観る (54%)
- ② 先住民の土地 (site) やコミュニティを訪ねる (27%)
- ③ ギャラリーを訪ねる (24%)
- ④ カルチャーセンターを訪れる (22%)
- ⑤ 先住民と一緒に体験したり触れあったりする (20%)

このことから、観光者はアボリジニのアート（岩絵を含む）や工芸品などを観ることを主目的にその文化に接し、体験し、会って触れ合い、知りたいということがわかる。②の「先住民の土地 (site) やコミュニティを訪ねる」というのは、まさに近年注目されているコミュニティ・ベースド・ツーリズム (community based tourism) といえるだろう。

また、同報告書の「どんな学びの体験をしたかによる観光者の割合」の資料によると、本物 (authentic) のアートやクラフトを観光者の 60%以上が体験している。そして、観光者の 2 割から 4 割が体験したと示すものに、岩絵・洞窟画、ドリームタイム（*第 3 章で説明既出、本章でも説明）、ブッシュ・タッカー（*②で説明）、ハンティング、先住民音楽、ブーメランと槍投げ、ダンスとパフォーマンスがある。

① アボリジニの土地や岩絵のガイド・博物館（資料館）訪問やアートセンターなど施設見学
アボリジニ所有の土地で、その場所の説明や岩絵、点描画、透視画についての説明や解説をすることは、“精霊の民”として伝承されてきたアボリジニたちにしかできないことである。
アボリジニ美術が社会で認められ、価値あるものとなって以来、実際の場所で描かれたものを生の解説を聞きながら見ることは、臨場感あふれたツアーとして人気がある。それぞれのアボリジニには“ドリーミング”（ものがたり）⁷⁾があり、その物語が日本昔話の語り部のごとく語られる。例えば、ノーザンテリトリーのレッド・センターではアナング族の案内でウルル（エアーズロック）の麓を歩き、アレンテ族が暮らしてきたアリススプリングスの町で、アボリジ

ニの絵をみてまわる。世界遺産のカカドウ国立公園でアボリジニの描いた岩絵を見学し、ドリームタイムといわれる神話を学ぶ。

1990年代末からのアボリジニ美術ブームとも言える市場評価の急上昇が起こった。アボリジニ美術の高騰のニュースは人びとの興味をかきたて、国内外で取引が盛んになり、それがきっかけとなりアボリジニ絵画（岩絵）鑑賞ツアーが盛んに行われるようになった。例えば、3日間のノースクイーンズランド・ツアー（North Queensland tour）では、アボリジナル・サファリのハイライトとして、ブラットショー古代岩絵跡（The Bradshaw ancient rock art sites）訪問がある。また、岩絵だけではなく、土着の芸術のギャラリーへの訪問もある。当然、表象をつかったみやげ物も多種類でできている。美術工芸品産業と関連した観光ツアーは、アボリジニにとって限られた現金収入手段の一つとなっている。

ツアーには、アートセンターを訪ね、アボリジニのアート制作を見学したり、体験をしたり、アボリジニについての資料館などの展示の見学を含むものもある。観光者にとって、体験型ツアーや資料館への訪問は興味と関心・印象が深まり、より知りたいという欲求につながっている。文化を見る・見せるという意味でその啓蒙的働きは大きいと言えるが、同時にそれは扱い方に注意を要する。つまり、見る側（観光者）は、体験することや展示物によってその文化を知識とするであろうし、見せる側にとっては、資料に対する先住民の権利意識やタブーに関わるもの（例えば遺骨や祭礼具（secret/sacred items）など）の展示などは慎重に扱わねばならない。特に博物館は、教育機関・研究機関であるため影響は大きい。

* ウルル観光（旧エアーズロック）

ウルルは国土のほぼ中心に位置する（図2 オーストラリアの地図参照）。

世界遺産になっているウルル観光（旧エアーズロック観光）は有名で、日本からも多くの観光者が訪れている。それは、7つの聖地を巡り、マウントオルガ「風の谷」を散策するツアー、日没の夕日に照らされ刻々と色を変えていく大岩のドラマチックなサンセットツアー、一泊してサンライズの大岩の陽光を眺めアボリジニカルチャーセンターを訪れるツアーから構成される。アボリジニの聖地であるこの地はもともと女性たちの出産のための洞窟であり、自然の中

の住まいであった。ツアーでは、洞窟に描かれた壁画についてアボリジニが説明している。政府の賃貸料と入所料（ゲート通過料）の25%が収入の一部となっている⁽⁸⁾。越路道雄は、ウルルからの余剰利益を教育施設に注ぎ込もうとするアナング族の計画について、「滅びかけたアボリジニの文化遺産が観光ルートにのせられることで息を吹き返し、その利益が子孫の教育に役立つことは、新石器時代の文化が現代の文化的キャッシュフローと合流したことを意味し、今や忘れられかけた古老たちの記憶や知識が再評価されつつあるのである」⁽⁹⁾と述べている。注意しなければならないことは、“聖地”であり、どこまでそれを公に曝してよいのかということである。それは、観光される側（観光主体）の判断だけではなく、「一枚岩に登らないでほしい」というアボリジニ（アナング族）のメッセージをどう受け止めるか、観光する側（観光者）の自粛と良識にもかかっていると言えるだろう。

* 博物館・民族資料館の扱い

それぞれの州にある博物館や民族資料館において、アボリジニをはじめとして先住民の扱いが変わった。はじめはヒトの“標本”としての扱いであり、主流社会側の視点にたったものであった。1993年の国連の国際先住民年に際して、オーストラリアでは博物館の所蔵する先住民の資料に関して行動指針「以前の所蔵品と新たな義務」（Previous Possessions, New Obligations）が策定され、資料の取り扱いに対して一定の指針が示された（*2005年に改訂版が策定されている）。同時に、オーストラリア博物館協議会（Council of Australian Museum Association）は、新たな行動指針を発表し、“権利をもった主体”として扱うようになった。行動指針では、先住民のシークレット・アイテムほか民俗資料の取り扱い、調査・研究など博物館活動への先住民の関与とそれらの管理に言及している。また、ガイドとしての専門職員としてアボリジニの雇用や展示についての先住民自身の決定などが図られるようになった（2005年の改訂版では先住民が持つ権利についての言及が最初にされている⁽¹⁰⁾）。

② 生活体験(食物採集見学を含む)ツアーと“カントリー”、そして アボリジニのレストラン

“味わい”が観光のキーワードの一つになっているように、観光の醍醐味の一つとしてその土地で育まれた食文化を味わうことがある。食に関することや生活に関することは、人間の生きるエネルギーとしての興味対象であるため、オーストラリアのどの観光局のツアー案内にも何かしらあげられている。アボリジニ観光では、アボリジニにしかわからない食料（ブッシュタッカー）の採集や、現地での生活文化を見るためにアボリジニ砂漠ツアーが行われる。また、アウトバック（奥地、砂漠のこともある）をアボリジニがガイドし、踊りやブーメラン投げをショーとしてみせながら、蜜アリ、ウィッチャリークラブ（ボクトウガの幼虫）、薬草などを紹介するツアーがある。アボリジニは、恵みの源である“カントリー”（土地）に対する思い入れがとても強く大切にしている。それは、人間が生まれ育った大地は家族が暮らす大きな家という概念であり、その思いは観光者を引き付ける。彼らは、一見不毛に見える大地にも豊かな自然の恵みがあることを知っていて、それを食料として利用する知恵を身に着けている。ツアーでは自家製のダンパー⁽¹¹⁾を焼いたりもする。例えば、10日間という長いウンダグツダイ・ツアー（Wundargoodie tour）⁽¹²⁾では、腕時計や携帯電話をはずし忙しい毎日から離れ、アボリジニと一緒に暮らしてその生き方に触れる。

なお、オーストラリア唯一のアボリジニのレストランである「タジャナビ」（Tjanabi=祝う、ごちそうになるという意味）はメルボルンにあり、ここではグルメ料理を含む土着のツアー・パッケージを行っている。



図 20 アボリジニブッシュ（筆者資料）

③ 儀礼・儀式・まつり

儀礼等は秘密裏に行われるため観光対象とはならないが、まつりは観光の大きな要素となり、政府観光局は州ごとにフェスティバルを紹介している⁽¹³⁾。まつり本番の時にはもちろん必要に応じて観光者に一部を見せることは、ショーとなる可能性は否めないが、アボリジニの紹介と存在アピールに役立つだろう。樹皮から採取する顔料によるボディーペイントは儀礼や儀式やまつりの時のもので、部族により異なっている。

それぞれの国におけるそれぞれの所のどのような人たちでも自分たちのまつりをもっていて、そのまつりは人びとを活気づける伝統的な一大イベントになっている。つまり、ヒトを超えた「根源的なもの」に対する“まつり”は世界レベルのどこでも行われており、観光という観点から考えてもそのユニークな展開は、見てみたい・触れてみたい・会ってみたいという興味・関心のもとになることが多い。観光の視点で考えるとき、観光者による負の効用には、注意をはらわねばならないが、経済効果・賑わい・伝統の継承などのプラス面が大きいと思われる。隣国ニュージーランドの先住民マオリ⁽¹⁴⁾は、パケハ（白人のこと）文化の移入によって歴史の

片隅に埋もれたが、その伝統芸能が 20 世紀初頭には観光の重要な要素として国家に認知されたことにより、娯楽的要素を多分に盛り込んだ祝祭として再編・復興されて現在に至っている。無論状況は隣国といえども異なっているが、“まつり”や伝統芸能の伝承は、アボリジニにとってもエスニック・アイデンティティ主張の手段として機能するものである。またそれは観光者にとっても異文化について視覚聴覚などを通して肌で感じる機会となり得る。つまり、観光を通して文化的他者からの需要によりアボリジニ文化を活性化させることになり、その相乗効果が期待される。



図 21 儀礼・儀式・まつりの様子

(アデレードで行われたパフォーマンス 筆者資料)

④ 楽器演奏とダンス

アボリジニの人たちは、ダンスをする時や、時には儀礼や儀式のときに、独特の楽器を使う。これらアボリジニ独特の楽器の紹介も文化観光となり、とくに、ディジュリジュウ⁽¹⁵⁾という楽器の音色は惹かれる者も多く、その代表的なものになっている。観光者は演奏を聴くだけではなく、吹いたり作ったりする。この楽器はまつりや儀式の時に吹くことが多いといわれるが、その不思議な音色は近年では CD 化され、日本でも手に入れることができる。この生の演奏をアボリジニの土地で聴くというツアーが音楽家をはじめとして多くの人たちに人気で、そのツアーは聴くだけではなく、アボリジニ関連のセンターで演奏の仕方を習い、楽器製作まで体験するというものである。五感で感じる体験型ツアーは近年人気になっており、この体験が高じて、演奏家になった者もでてきた。

また観光者は、先祖代々受け継がれてきたアボリジニの迫力あるダンスやスピリチュアルなダンスパフォーマンスを鑑賞する。その際アボリジニは、伝統的な踊り（歌舞）を伝承することになる。また、それとともに、時代に適応した新たな踊り（歌舞）を創造することにもなるだろう。例えば、ケアンズにあるジャプカイ・アボリジニ・カルチャーパーク（Tjapukai Aboriginal Cultural Park）⁽¹⁶⁾では、ディジュリジュウのレッスンが行われたり、「ジャプカイ・ナイト」と呼ばれるディナーショーが行われ、迫力あるアボリジニのダンスを見ることができる。

*ジャプカイ

これはクイーンズランド州北部のケアンズにある先住民の文化を紹介するテーマパークであり、オーストラリアで最大級のアボリジニ観光施設の一つである。1987年にダンス・シアターとして設立されたのが始まりで、アボリジニ観光の先駆的役割を果たしている。ジャプカイとは、ケアンズ周辺に住んでいた部族名である。現在は、昼間はアボリジニ文化を体験できる「ジャプカイ・デイ」として開園し、夜はアボリジニダンスショーを含むディナーショー、「ジャプカイ・ナイト」を開催している。そこでは、天地創造の時代のドリーミング(伝説・哲学的考え方)から現在に至るまでのジャプカイの人びとの生活や文化を見せると同時に、観光者にそれらを体験させている。近年では、ジョイントツアーも立ち上げ、年間15万人以上の観光者が訪れ、何百万豪ドルの利益を得ている成功例となっている。この施設では約100人の従業員が働いているが、その8割がアボリジニであり、アボリジニの雇用率を高めている。アトラクションは文化復興の事業でもあり、オーストラリアの地元の学校が先住民についての教育の一環として訪れている。そして、先住民としてのアイデンティティと誇りを取り戻す糸口ともなっている。インターネット上ではジャプカイのツアーについて、日本語での案内（ケアンズにある日本人経営の旅行会社企画）などをみることができる。このことから、日本人を対象にした観光振興の拡大をはかっていることが読み取れる。

以上は、政府観光局の案内にも載っている人気のツアー例である。アボリジニの有形・無形の伝統文化が文化資源となり、観光資源として利用されている。

6.3.2 考えられる企画

アボリジニ文化を文化資源としての観光資源と考えるならば、それを活用し文化資本として、物語・演劇などのツアーを企画することができるだろう。

⑤ 物語

オーストラリアの物語作品には、市民権を得て以来アボリジニが登場するものが多くなった。その舞台を訪ねるツアーの企画は、日本でフィクション・ノンフィクションを問わず物語の舞台を訪ねるツアー企画があるように、これからのアボリジニ観光の一つとなるかもしれない⁽¹⁷⁾。特にアボリジニ自らが話を紹介し案内すれば、リアリティー溢れるツアーが企画できると考える。

物語の数例をあげれば：

1. 小説・映画 *Rabbit Proof Fence* (邦題「裸足の 1,500 マイル」)

ドリス・ピルキングトンにより書かれ、2002 年に映画化された（その映画は日本でも公開され、DVD 化された）。内容は、1931 年の西オーストラリアを舞台とする実話に基づく話である。隔離・同化政策のために家族から引き離され収容所に置かれた少女たちが、ギブソン砂漠の端に位置するジガロングの家族のもとに帰ろうと逃げ出し、母親の待つ故郷に帰るために、オーストラリアを縦断するウサギよけフェンスをたよりに 2,400 キロもの距離を逃走する。

2. 小説 *Remembering Babylon* (邦題「異境」)

デイヴィッド・マルーフにより書かれ、1993 年に刊行された。2012 年に邦訳されている。内容は、19 世紀半ば、クイーンズランド開拓最前線の時、辺鄙な街に、アボリジニに育てられた

白人の男がやってきた。異質なふたつの世界に帰属し疎外されるその男ジェミーの存在を軸に描く、現代オーストラリア文学を代表する傑作である。国際的な賞を数多く受賞し、オーストラリア大使館で邦訳出版記念会を開催している。

3. 映画 *Australia* (邦題「オーストラリア」)

この映画は、オーストラリア出身のニコール・キッドマンとヒュー・ジャックマンが主演である。内容は、オーストラリアの大自然が一人のイギリス貴族の女性サラの人生を一変させる。アボリジニの少年との出会いを通じて母性にめざめ、カウボーイのドローヴァーと情熱的な恋に落ちるという筋書きである。映画のストーリー展開においてアボリジニが重要な役割を果たしている。2008年に映画化され、日本では2009年2月に全国ロードショーになった。＊ウンダーグウディ・アボリジニ・サファリツアーでは、映画化されたキンバリー地域を紹介している。

⑥ アボリジニ演劇鑑賞ツアー

この企画は、日本における演劇鑑賞の旅（例えば、舞台鑑賞の旅募集など、旅行会社の広告で見受けられる）のようなツアーであり、団員にアボリジニを含む劇団の公演やアボリジニに関わる内容の演劇を観る。これによって、アボリジニの存在がアピールされ、団員の収入とアボリジニの収入にもつながる。演劇の一例をあげれば、ジェーン・ハリソン (Jane Harrison) 作の *Stolen* は、「盗まれた世代」の後遺症に悩むアボリジニたちの姿を描き、それをプレイボックス・シアター（主な団員がアボリジニであるメルボルンの劇団）が公演している。

先に例をあげたジャプカイのように、すでにシアター・パフォーマンスとして、アボリジニのダンスにストーリーをつけて見せるところもあるが、ここでは施設でのショーというよりあくまでも日本の観劇ツアーをイメージした、食事も付けるジョイントツアーである。

青山晴美が言うように、「アボリジニ観光の成功の鍵を握るのは、体験型であること、幅広い年齢層に関心をもたれること、個人でもツアーでも楽しめることにある。また、観光客にとっ

でのアクセスの利便性、アクティビティの時間、ツアーガイドの有無などもビジネスの鍵を握る」。(18) これらのことはアボリジニ観光に限ったことではないが、考慮されねばならないことである。

6.4 アボリジニ観光の主体

アボリジニ観光において、観光される側は誰が中心となっているのかは問題である。理想はアボリジニが主体となって観光を進めていくことである。しかし、現状は政府が関与するにせよ、白人の指揮のもとで観光となっていることは否めない事実である。政府は、案内人やレンジャーとして専門の公務員扱いでアボリジニを雇うためにマニュアルを出している。また、政府の観光局が中心となってフェスティバルの集客に努めている。ネット上はアボリジニが経営する旅行会社があるが、実際に存在するかは定かではない状態である。

オーストラリア国内でも最大クラスのアボリジニに関するテーマパークであるジャプカイ・アボリジニ・カルチャーパーク (Tjapukai Aboriginal Cultural Park) (前述) は、最初はアボリジニが小規模なダンス・シアターとして始めたといわれるが、白人の手によってカルチャーパーク化され、現在コーディネートしているのは白人である。そこに雇用されている約 100 人の従業員のうち、約 80 人がアボリジニであることは、アボリジニの雇用面で貢献しているといえ、プロとしてのダンサーもいる。このことは、経営主体が白人であることが悪いわけではないということを示しているといえよう。つまり、より能動的にアボリジニが経営にも参加できることが望まれる。

先にあげたように、アボリジニ美術は、社会で認められ、価値あるものとなり、美術工芸品の生産はアボリジニにとって経済的自立に貢献するものとなった。それは、岩絵、点描画、透視画などを現場で見ても、アボリジナル・アートとして美術館で観るにしても、観光資源となっている。そこで次に、特に観光資源として意味あるものになっているアボリジナル・アート (絵画・工芸品) について考えておきたい。

6.5 観光資源としてのアボリジナル・アート(絵画・工芸品)

美術工芸品の生産は、アボリジニにとって経済的自立に貢献するものとなっている。⁽¹⁹⁾ アボリジニの美術は国際的に評価され、その評価は国内に影響を与えた。これまで価値が置かれていなかったアボリジニの絵への人びとの態度が変わった。現在では中西部砂漠の点描画が国家的シンボルとなっている。そして、アボリジニ・アートの見学や制作体験ツアーが行われ、アボリジニ・アートは観光資源になった。(図 22)

先の観光事例であげたように、アボリジニの土地で描かれている岩絵は観光資源となっている。それらを観るツアーではアボリジニがガイドとなり説明をしており、アボリジニならではの仕事と言える。しかし、アボリジニが主体となった企画ツアーでなければ収入につながるとは確実には言えないというのが現状である。



図 22 アボリジニ 絵工芸品 (中央筆者)



図 23 アボリジニ工芸品（所蔵：筆者）

アートセンターでは、世界の需要に応じてアボリジニが作家として絵を描くようになった。そこでは、工芸品も作っている。それを見学したり観光者も描いたりする体験ツアーが行われている。ここでは、アボリジナル・アートは主要な観光資源となり、作品は販売されている。それらは、①内輪での販売、②贈り物として、③都市の店で直接販売、④アートセンター（美術工芸センター）への販売、⑤アートアドバイザーによる買い付けなどである。制作を性別で見ると、女性は、ストリング・バック、パンダナス製品（植物で作ったバスケットなど）、貝製品、ネックレスなどを制作し、男性は、樹皮画、彫刻、木管楽器（ジジュリドウ）、槍、ポールなどを制作して売っている。これらは、現金収入をもたらすものとして奨励され、政府によっても推進されている。美術工芸品は、アボリジニの精神世界と密接なつながりをもっていて、その表象と考えられる⁽²⁰⁾。つまり、美術工芸品の制作は、経済活動であるとともに精神世界についての表象の双方を結ぶ活動と考えられるのである。

オーストラリアでは、人権差別などの国内的・国際的状況が変化し、二十世紀の後半から主流社会においてアボリジニの文化についての態度が好転してきた。1993 年の「国際先住民年」、1995 年～2004 年の「世界の先住民の国際 10 年」、さらには 2005 年からの「世界の先住民の国際 10 年第二」にも後押しされ、アボリジニ文化に対する多様な動きがみられる。アボリジニ美術は国際的な場面で評価されるようになり、そのユニークさゆえにオーストラリアの顔の一つとなった。国際的評価は海外からの観光者をオーストラリアに引き寄せた。また、オーストラリア国内に影響を与えて主流社会の人びとの考えや態度に変化をもたらし、アボリジニ観光をしようとする国内の人びとの数を増やす一助となっている。それまで何の価値も置かれていなかったアボリジニの文化（美術）が 1980 年代になり国際社会からその独自性の評価を受け、他に誇れる文化資源⁽²¹⁾になった。オーストラリアらしいもののシンボルの一部として国家的文化資源となって、アボリジニ文化は現存する世界最古の文化として、世界中が注目している。

しかし、懸念すべきことが 5 つある。その 1 は、文化資本としてのアボリジニの美術が彼らの収入につながっているかということである。国際社会で認められてきた美術工芸品はバイヤー同士などアボリジニとは関係のないところで取引されており、彼らの生活は全く変わっておらず、アボリジニの文化が他者化されているのではないかということである。その 2 は、絵や工芸品だけが独り歩きしてしまい、彼らの信仰と本来の意味から逸脱させられているのではないかということである。その 3 は、エミリー・カーマ・クングワレイ⁽²²⁾のように本人の意図にかかわらず評価を得た結果、アボリジニ社会においては今までになかったほどの大きな貧富の差が生じていることである。また、それにとまって、財をもたず皆でわけるという独特の思想がなくなってしまうのではないかということである。その 4 は、バイヤーや観光者の要求に従い絵に込められた秘密を明かすことは、アイデンティティに関わることだけに懸念される⁽²³⁾。そしてその 5 は、“アボリジニ工芸らしきもの”の出回りについてである。量産されたものの価値について、少なくとも作者が認め量産されたものは別として、“らしいもの”をどこまで作品とするのか、“まがいもの”とするのかということである。観光とは切り離せない“みやげ物”

の扱いと表象などについて、またアボリジニが搾取されることなく見合った収入を得ているかなど、アボリジニ観光を主要な産業とする時の課題が見えてくる。

〈 注・引用文献 〉

- (1) 前田勇編『21 世紀の観光学』学文社、2003 年、125 ページ
- (2) 同上
- (3) Australian Government Department of Resources, Energy and Tourism, *Tourism Research Australia 2010 Indigenous tourism in Australia: Profiling the domestic market*, 2010, p.3
- (4) Passmore John (1974) *Man's Responsibility for Nature* Geraid Duckworth & CoLtd (間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』岩波書店、1998 年)
- (5) Australian Government Department of Resources, *Indigenous Tourism in Australia: Profiling the domestic market*, 2010
- (6) 同上
- (7) ドリーミングの名称は英語の **dreaming** からきている。アボリジニの世界観を表す言葉で、1896 年に中央砂漠を調査した人類学者、B・スペンサー (B.Spencer) が最初に使用したといわれる。数多くあるアボリジニ言語のこの概念に相当する言葉を英語ではドリーミング (**dreaming**) と訳し、アボリジニ自身も英語で表現する場合、ドリーミングという言葉をもちいている。(第3章で既出)

現在意識され経験される時間とは別に、ドリーミングという時間の概念－創世時代から今に至る永続的で永遠な時と生命－をもっている(松山利夫監修、読売新聞社文化事業部編『オーストラリア・アボリジニの美術<ドリームタイム>へのいざない』読売新聞社、2001 年、129 ページ)。またドリーミングはアボリジニの生き方・あり方に深く関わる独特の観念・思想・世界観である。その意味でドリーミングはとても重要であり、複雑で、さまざまな考え方を内包している。主として男児は、通過儀礼(イニシエーション=子供を青年にするための儀式)を経てドリーミングの知識を獲得していく。ドリーミングは過去の時代であるとともに、儀礼により活性化される現在でもあるという独特の概念である。そして、アボリジニという人種の形成、個人の生と死、社会や生活のあり方などを包括する観念でもある。彼らの思考・行動の根底にドリーミングが存在している。精霊によって万物が創成され、自

分たちの祖先が動植物であったとするドリーミングは、人も自然の一部であることを教え、人が自然と共に生きていることを伝えている。つまり彼らは、人間が自然の一部であるという世界観を持っており、人間が自然の一部にすぎないということを深いどこかで感じている。

- (8) ウルルを含む公園は、アボリジニへ返還後、**99** 年期限で政府に貸し戻され、アナング族とオーストラリア自然保存局 (ANCA) が共同管理している。観光客が支払うゲート通過料の **25%**に加えて、政府が賃貸料を年間 **15** 万豪ドル支払う。**1995** 年の時点で **90** 万豪ドルが、ウルル近くのミチュル・コミュニティに住む部族員 **600** 人以上に分配された。
- (9) 越智道雄『オーストラリアを知るための **55** 章』明石書店、**2006** 年、**198** ページ
- (10) 「これには、**1998** 年に出された報告書「我々の文化と未来」 (Our Culture Our Future: Indigenous Cultural and Intellectual Property Rights) の影響が大きい」と、若園雄志郎は言及している。この報告書はアボリジニ・トレス海峡諸島民委員会 (Aboriginal and Torres Strait Islander Commission) 理事会による研究成果と提言がまとめられたものであり、先住民文化及び知的所有権の本質と先住民自身が守りたいと考えている事項、それらに対するオーストラリアの法整備の状況、そして実現可能な解決策の提示がされている (若園雄志郎「先住民と博物館—アイヌとアボリジニの比較から」山内由理子編『オーストラリア先住民と日本—先住民学・交流・表象』お茶の水書房、**2014** 年、**233** ページ)。
- (11) 非発酵堅パン。かつてはソテツの実から手間暇かけてソテツのパンをつくっていたが、現在では小麦粉を水でこね、焚火の灰に入れて **1** 時間ほどで焼きあげる。
- (12) アボリジニと一緒に寝起きする生活体験ツアー。
- (13) オーストラリア政府観光局のホームページにおいて、オーストラリアのアボリジニのフェスティバルの紹介は、「アボリジニたちはフェスティバルを通じて、古代から続くしきたりに始まり、現代的な慣習まで、みずからの文化をたたえ、見る者と分かち合ってきました。」と始まり、続いて具体的に州や部族のフェスティバルを紹介している。例えば、オード・バレー・マスター (西オーストラリア州)、ローラ・アボリジナル・ダンス・フェスティバル (クイーンズランド州)、ドリーミング・フェスティバル (クイーンズランド州)、ウオーキング・ウィズ・スピリッツ (ノーザンテリトリー)、ガーマ・フェスティバル (ノーザ

ンテリトリー)、ダーウィン・アボリジナル・アート・フェア (ノーザンテリトリー)、ガンバランヤ「ストーン・カントリー」フェスティバル (ノーザンテリトリー)、ヤルキット・ウィラム・ンガーギー (ビクトリア州) など。

- (14) マオリは、1000 年以上も前にポリネシア中央付近からニュージーランドへ移住してきた海洋民族である。伝統的社会は、出自集団(祖先を共有するもの同士) が一定の土地を共有し、協力して生業を営む。農耕やクマラと呼ばれるサツマイモの栽培をしていたことは、アボリジニと大きな違いであろう。現在マオリ人口は約 57 万人 (2006 年度国勢調査) で、ニュージーランド全人口の 147%を占める。(割合はオーストラリア全人口に占めるアボリジニ人口より多い。) また、1840 年のワイタング条約締結は相手が英国であるのに対し、アボリジニは英国とではなくオーストラリア政府と戦い交渉している。
- (15) シロアリにより空洞になった木を用いて、低音と独特のリズムを奏でる楽器。
- (16) ケアンズにある先住民の文化を紹介するテーマパーク。1987 年にダンス・シアターとして設立。(詳しくは本文中の次項ジャプカイ参照)
- (17) 現(2014 年現在) 駐日オーストラリア大使のブルース・ミラー氏は、志賀直哉の「城崎にて」を読み、城崎温泉を 3 度訪ねているとのことである。また、松尾芭蕉の「奥の細道」を読み、その場所を訪ねた経験を持っている。つまり、大使も日本の文化に基づいた観光に興味を持っていることから、アボリジニ文化に立脚した観光もあり得るであろう。
- (18) 青山晴美、前掲書、2008 年、67 ページ
- (19) 美術工芸の制作活動は、現金収入の基本をなしている。それは白人とは関係なしに自らの手ですすめ、稼ぐことができる仕事と言える。樹皮画や彫刻は男性が、バスケットやネックレスなどの小さな工芸品などは女性がおもに制作する。女性が単価の安い小物を何人かで協力しながら時間をかけてつくっているのに対し、男性は単価の高い品物を短期的につくる。女性の収入は日々の生活のたしとされ、男性の収入は家族のための大きな買い物のためにつかわれる。彼らは継承してきた樹皮画や生活用制作物を工芸品として、貨幣経済社会との間の交換財にした。樹皮画には聖地に関する物語が秘められており、神話 (ドリーミング) に関する内容が文字の代わりや儀式の際に身体や地べたに描かれている。アボ

リジニ絵画は、小さな点を何百も打ち込んだ独特な画風やレントゲンで写した透視画のような画風で描かれている。それらは、白人の勧めにより紙の上やアクリル画に描かれるようになって、アボリジニ絵画として人気が高くなっている。

- (20) 窪田幸子『アボリジニ社会のジェンダー人類学』、世界思想社、2005 年、138～139 ページ、142～143 ページ

- (21) 文化資源という用語について

山下晋司は、『資源化する文化』（弘文堂、2007 年）の序で、文化を資源としてとらえることはまだあまり一般的ではないかもしれないが、文化資源の保存や管理といった問題はけっして新しくはないとして、文化資源学会の定義を示している。それによると、文化資源とは、「ある時代の社会と文化をしるための手がかりとなる貴重な資料の総体」となる。そして、山下は、文化資源とは何かそこにあるものというより、ある社会的コンテクストにおいて文化が「資源になる」という動態的な定義を導入することが必要であるとしている。

山下はこの書のなかで、文化の資源化をめぐる先住民の事例として、アボリジニ美術、その他フィリピンのイフガオ、ネパールのビャンス、北欧のサーミをあげ、先住民に関する議論が比較的活発になっているが、それは先住民においてこそ文化という資源が先端的なカタチで問題になっているからだというべきであろう、としている。本論文では、文化資源はアボリジニの文化（考え方）・生き方としても考えている。

文化資本という用語について

窪田幸子は、文化資源をブルデューのいう文化資本と似通っているとして、この概念について取り上げている。それによると、ブルデューは文化資本を「知識、技術、教育など、社会の中での可能性を含めたより高い地位を保証するような要因」と定義している。そして、これを 3 つに分け①身体化されたもの（思想、好みなど）、②客体化されたもの（文化財など）、③制度化されたもの（学歴、教育など）からなるものとしている。そして、文化資本は社会的に象徴的な事柄や象徴経済を評価できるような制度を所有する社会集団を前提としており、権威に関わるような状況でのみ現れるもの、文化資源はどのような社会的コンテクストでも現れるものとしている。文化資本より広い概念で、文化資本が威信につ

ながるような物質や事柄に関わるものや知識、態度、制度であるのに対し、文化資源は特定の場面において有用な象徴的な知識、もの、制度の全てを含むと述べる。窪田は、これまで資源と見られなかったアボリジニの文化的実践としての美術が文化資源化し、さらにその一部が文化資本に姿を変えるという動態のプロセスを指定し、注目している。(窪田『資源化する文化』)

(22) エミリー・カーマ・ウングワレー (Emily Kame Kngwarreye) (1910?~1996) は、アンマチャラ部族 (Anmatyerre) に属する。アリススプリングス北西の町ユートピア出身のアーティスト。1990 年代末に国内外で彼女の絵画 (色彩豊かな自由な作風で知られ、一般的な砂漠の点描画とは異なる独自の表現が注目されている) の評価が急激に高まり、国際美術市場では高額で取引されるようになった。*2000 年には、「アウェレ (Awelye) 」 (1989) という作品が 156,000 豪ドルで落札された。

(23) かなりきわどいところまで描かれ、聖なるものとしての生命エネルギーが目減りしていくのではないかと懸念されている。

7 考察と今後の課題(アボリジニ観光の効果と問題点)

7.1 アボリジニ観光の効果

アボリジニの生活文化を観光資源という観点からみると、アボリジニ観光はアボリジニが主体となり得る産業であり、観光が盛んになっている現代においては、収入という点でそのビジネス効果は大きいと考えられる。また、「見せる」、「魅せる」という意味で文化継承への貢献度も高いと考える。

① 経済的・社会的状況改善

先の章でアボリジニの失業率について各種のデータをあげた。L.ライアンが2002年に示したデータにおいてもその傾向は変わらない。例えば、雇用について、雇用参加率はアボリジニ以外が62%であるのに対しアボリジニは52.7%、失業率でみるとアボリジニ以外が90%であるのに対しアボリジニは22.7%である。また、オーストラリア人の年間所得が20,000豪ドルであるのに対し、大半のアボリジニ成人の年間所得は14,000豪ドル以下、住宅事情も劣悪となっている⁽¹⁾。これまでみてきたように、アボリジニが主体となる観光によって雇用機会が増えることにより、これらの数値の改善に役立つことは間違いない。

また、収入を得て、教育を受けることによって、財源⁽²⁾と知識という点から栄養状態の改善や生活習慣病の疾病率を減少させるなど、健康面のトラブルを減らすことができる。それは、乳児死亡率（アボリジニの乳児死亡率はその他のオーストラリア乳児死亡率の3倍）を下げ、先にあげた平均寿命（アボリジニの平均寿命：男性57歳、女性64歳－白人の平均寿命：男性76.6歳、女性82.0歳）を延ばすことにもつながるだろう。そして、劣悪な住宅事情が変われば健康に及ぼす影響の改善に役立つことは言うまでもない。

現在のアボリジニはオーストラリア市民として認められた存在になったが、オーストラリア社会に参入しているアボリジニたちを取り巻く社会環境や生活環境はいまだ良いとは言えない。政治や社会面における潜在的差別が横たわり、先にあげた同化政策による「盗まれた世代」のアイデンティティ喪失は今も続いている⁽³⁾。公的レベルで表面的には平等になったが、日常生

活レベルでは偏見や差別が残存し、マルチカルチュラルになっても自己の確立が難しいのが現状である⁽⁴⁾。この歴史的変遷の中で、アボリジニに対する主流社会（白人社会）の理解は緊急の課題である。

それまで人類学的対象の興味資料でしかなかったアボリジニ文化が、観光によってオーストラリアの独自性として注目されるようになった。このことは、アボリジニに対する主流社会の理解にもつながると思われる。そして、近代市民社会において、経済的自立をはかり、社会のことに積極的・主体的に関与できる本当の意味の“市民”になる好機となることが期待される。

排除された社会に生きてきたアボリジニにとって、アボリジニがその中心となるアボリジニ観光は、彼らが“真のオーストラリア人”（同化という意味ではなく独自のアイデンティティを持ったうえで、形式だけではなく社会的存在としても同等なオーストラリア国民）になるチャンスを提供するものと考え。観光によってアボリジニの伝統的な文化をアピールすることは、アボリジニの文化的慣習に対する尊敬と理解の必要性を表している。それは主流の文化だけが正しいという考えを否定し違いを許容することとなり、文化的財産としてアボリジニの“誇り”を示すことになるだろう。アボリジニは、観光者に文化をみせ、ガイドや説明をし、それで収入を得る自分を“誇り”にするのではなく、他人が興味をもつものを持っていることに“誇り”を持つのである。

かつては大勢を占める白人社会には、アボリジニの歴史に対する深い理解が欠落していた。主流社会（白人社会）における受け入れにはまだ問題があるが、観光を通して文化慣習の異なりに理解を促すことは、その社会的地位の低さの改善に役立ち、ひいてはアボリジニに対するサービスの種類や質について再考することにつながると思う。そして、新しい形での政策にもつながるものとも期待される。

② 文化の継承

文化の継承という意味でも観光は大きな役割を果たしている。伝統文化は行事を行う場所と行う人を見る（関心を持つ）人がいて続いていくものである。アボリジニの伝統文化は口承伝承であるために継承されない、または「失われた世代」の影響で途切れてしまうのではないか

という懸念がある中で、それは観光によって続けられ、思い出されることさえある。また、伝統文化はその民族が伝えるだけではなく、観光を背景として他にも伝承し残していくこともできる。つまり、アボリジニの伝統文化を白人など他が学び伝承することもあり得るのである。例えば、アボリジニ独特の楽器ディジュリジュウについて、観光がきっかけでその音色に惹かれ、吹き方や作り方を学び演奏するまでになってしまう人たちが多くいる。また、観光によって文化が価値あるものとして評価され、それにより伝統文化が“誇り” 高きこととして受け継がれていくのである。そしてその文化を学ぶ者が現れて、広がる可能性さえある。その意味で観光は貢献していると言えるだろう。観光は、本来経済的利益を生み出すものではなかったさまざまな文化を、観光資源として観光者に向けた商品へと変える。観光開発が伝統文化を破壊するという議論があるが、観光が伝統文化の衰退を防ぎ、復興させ、継承にも貢献することも事実である。そして、次節で例としてあげるハワイのフラのように誇りを持ちうる伝統となることも可能であろう。

7.2 アボリジニ観光の問題点（懸念）と課題

アボリジニ観光を進めるうえで、いくつかの懸念が考えられる。懸念が現実化されないように考えながら進める必要がある。また、アボリジニ観光はまだ注目されて新しいために、課題も考えられる。しかし、この課題は今後の更なる発展に向けてのチャンスともなるだろう。

7.2.1 問題点(懸念)

懸念されることは、アボリジニの文化が時代を踏まえ変わってきていること、そして文化資本としてのアボリジニの伝統文化がビジネス化され作られたものとなり、装飾されてしまうことである。観光効果とともにそれから受ける影響も忘れてはならない。ビジネスとするからには多少のデフォルメと見世物（ショー）化は否めないかもしれない。しかし、本来のアボリジニの伝統文化が著しくゆがめられ、装飾され、全く作られたものになってしまっただけでは本来あるべき姿から逸脱することにもなりかねないのである。また、観光者にとって、本場オーストラ

リアにおける本物のアボリジニの語りやパフォーマンスは、それがなんであれアボリジニ文化と解釈されてしまうかもしれないのである。これらの点には気を付けねばならないだろう。

ここに、矢口祐人が『ハワイの歴史と文化』（中央公論新社、2009 年）のなかで述べているネイティヴ・ハワイアン^⑤の例がある。

クックが到来（1779 年）して以降の長い歴史の中で、ネイティヴ・ハワイアン文化はさまざまな形で抑圧されてきた。移民が増加する一方で、ネイティヴ・ハワイアンの人口は減少し、社会的地位も低下した。ハワイ語の使用を禁止されたり、フラも排除される場所であった。経済力も弱められ、多くの人びとが生活に苦しむようになった。ネイティヴ・ハワイアンの文化は異文化との接触の中で抑圧を受けてきたが、しかし、決して消滅しなかった。さまざまな異文化の要素を取り込んで、いろいろと形を変えながら、したたかに生き残ってきた。それは 2 世紀前の「純粹」なハワイ文化とは異なり、昔ネイティヴ・ハワイアンのコミュニティの中で踊られたフラは、今娯楽用として観光者の前で踊られることもある。今日のフラすべてが観光者向けであるわけではなく、伝統を重んじながら、その意味を考えながら演じる人たちもたくさん存在する。フラの伝統は根強く残り、1920 年以降、フラが観光化されていくなか、旧来のフラ（フラ・カヒコ）の伝統も保ちながら、観光用の新しいフラ（フラ・アウアナ）を創り出した。

矢口は次のように述べている。「フラは多彩な形に変化しながら、今日までネイティヴ・ハワイアンが誇りを持ちうる伝統としていきているのである。」^⑤

このネイティヴ・ハワイアンの例は、条件や置かれている状況に差異はあるが、アボリジニの懸念に対する先行的な一つの考えを示していると思われる。

アボリジニの考え方の違いも懸念材料の一つである。本人たちの意思にかかわらず貨幣経済社会に投げ込まれたアボリジニたちは、収入を得るという考えや、主流社会（白人社会）の労働観を受け入れなければならなくなった。問題は、アボリジニ本来の思想^⑥と近代的労働観とのミスマッチや、主流社会における知識と知恵、つまり教育の不足からその観光の営業主となれずにいることである。アボリジニ文化が文化資本となろうともアボリジニ芸術が文化資源や観光資源になろうとも“彼らとは関係のないもの”にしてはならないのである。

また、アボリジニ社会は、伝統的には平等であり、かつての対主流（白人優先）社会においては同じ立場を共有してきた。しかし、観光ビジネスの競争などにより、今後、アボリジニ美術において起こっているような経済格差や、不協和音が生まれ、本来の考え方や平等を享受していた社会が覆されることが危惧される。

そして、主流社会を含むアボリジニ以外の周りの人たちとの関係についても、どのようにつながっていくか、関係を持っていくかが課題となるだろう。先にあげたジャプカイの人たちの例は、ある意味でテーマパーク化しており、その存在が周囲に認められている。自国の文化を持ちつつやってきた移民者たちと同様に、影響を受け影響を与える存在として、互いに認め合う関係作りを進めることがその発展には肝要であろう。

さらに、観光者から受ける影響も忘れてはならない。アボリジニは、ウルル（旧エアーズロック、第6章で説明）をはじめとして、聖なるものを大切にしてきた。それは、文化の一つとして損なわれないように大切にしていかなければならないことである。“精霊の民”アボリジニの聖地に観光者が足を踏み入れること、多くの観光者によってその土地が荒らされてしまうこと、アボリジニ独特のライフスタイルや独特の時間の流れが阻害されてしまうことなどが、取り返しのつかないことにならないような注意を要する。そして、地域から剥奪され、他者化され、阻害されてはならないのである。このことに関しても、ネイティヴ・ハワイアンは、懸念に対する先行的な一つの例になるだろう。

7.2.2 課題(ビジネスチャンス)

① 宿泊施設などについて

アボリジニ観光を進めていくうえでの課題の一つに、宿泊施設がある。アボリジニの居住地はアウトバック（奥地）にあることが多いため、アボリジニ観光のツアーは日帰りではないことが多い。すでに寝泊りできる施設を設けているアボリジニの土地もあるが、まだ充分整っているとは言えない。人が泊まる（生活する）ということは、食事の提供を始めとして、いろい

るな需要を生み出すことになる。宿泊施設については更なる観光ビジネスのチャンスとも言えるため、今後の展開が望まれる。

近年、「着地型商品」ということを聞くことがある。「着」地とは発着の「着」であり、「着地」側で考える地域商品を「着地型商品」と呼ぶという。そして、「発地」が考える「発地型商品」ではなく、「着地型商品」に売れ筋が移るだろうというのが、業界の通説になっていると、鶴田浩一郎は述べている。^⑦ このことは、あまり現地のことを知らない出発地（ここでは現地以外場所）が考えるのではなく、細かなところまでわかってかゆいところに手が届く「着地」（現地）が担当するのがよいことを意味している。労働力やサービスも商品と考える資本主義経済においては、物理的な宿泊施設関連事業はいうまでもなく、各種サービスにおいてもアボリジニの雇用拡大につながるはずである。

また、先にあげたオーストラリア政府の観光目的調査で多かった「先住民の土地（site）やコミュニティを見る」や、パーセンテージは少ないが「先住民の民家に泊まる」は、まさに近年注目されているコミュニティ・ベースド・ツーリズム^⑧と言えるだろう。この「観光する側」からの要求に応える意味でも、時代の流れとともに変化を伴っているとはいえ、アボリジニの伝統的な暮らし（アコモデーション＝宿泊を含む）は、時代の要求ともマッチし、その観光への活かし方は更なる広がりの可能性を持っている。

② アクセスなど

①とも関係があるが、アボリジニ観光のツアーでは、アクセスの利便性が問題である。観光の目的地が都市から離れていることが多いため、交通手段を確保しなければならず、運送業者とのタイアップなどが必要となるだろう。または、必要に応じてアボリジニが移動することもあり得るかもしれない。ジャプカイのように、観光施設を設けることも視野に考えることもあり得るだろう。これらは課題ではあるが、関連事業のことまで考えると、土地勘に優れたアボリジニの雇用拡大などのチャンスとも捉えることができる。

ニュージーランドの例をみると、温泉がわくろトルア地域は、アクセスが不便なため、その観光の経営は、1830年頃（記録上は1970年代）からマオリのファナウ（拡大家族）やハブ

(準部族)が行い、ガイド業、宿泊業、みやげ物産業が発展し、マオリ文化をベースとした歌や踊りなどのパフォーマンスも行ってきた⁽⁹⁾。このことから、不便は逆にチャンスと考え、アクセスの不便さはアボリジニ主体独占の可能性が覗えるかもしれない。

③ 本物とニセモノ、表象商品（みやげ物）について

制作物・みやげ物も、商品として観光ビジネスの一つとなっている。これらは、どこまでが本物でどこまでが模造のみやげ物か、また、その商標をどう扱うかの明確化が望まれる。

観光地における建物や施設、芸能、食べ物、お土産などは、すべからく「本物＝authenticity, original」、伝統的なものでなければならないという議論や、「ニセモノ＝imitation, copy」ではだめだということに対して、小林天心は「実のところこの本物・ニセモノの境界はきわめて曖昧である」と述べている⁽¹⁰⁾。そして、伝統は常に進化するのだから、みやげ物も「誰が見てもすぐわかる大量生産品、どこにでもあるまがいものではなく、その土地のオリジナル、独創的でユニークなものはどんどん考案され、作られていい」と述べている⁽¹¹⁾。また、旅行者のためのみやげ物として扱われる「単なる工芸品」と芸術作品として扱われる「美術品」（アボリジニ美術のブーム以降）との境目、そして「美術品」についても西洋素材を用いて作られたものは「本物ではないのか」、「オリジナル」と「複製」などが曖昧になっている。これらのことはアボリジニ関連のモノに限ったことではなく、身近に見受けられる。「オーストラリアらしいもの」で「アボリジニ関連らしいもの」、例えば、Tシャツに描かれたアボリジニ美術（らしきもの）は、大量生産物などに利用が可能であるために商品化される。表象について、上橋菜穂子は「観光土産物に表象される『象徴化された自文化イメージ』について ―西オーストラリア州中西部のアボリジニ、ヤマジーの事例を中心に―」という報文を書いて考察試みている。⁽¹²⁾ 生活のために作ってきたアボリジニにとって著作権や知的財産権など面倒な課題がでてきている。しかし、この商品も観光資源の一つとするならば、特許料、ロゴ的使用料、制作・販売における労働を考えると経済活動となり、経済的自立に向けた一助となることは確かだろう。ただし主体となる事は無論、教育の低さゆえの不当な扱いには気をつけなければならない。

そして、アボリジニ美術らしきものであっても、アピールと継承に役立つこともあることは事実である。観光客を対象に制作・販売される「民芸芸術品」のことを呼ぶ「ツーリストアート」という言葉がある。⁽¹³⁾ 産業化に向けた課題解決のために、本物の市場を一次市場、その複製を使った市場を二次市場として分けて考えるという論点が話題にのぼっている。

④ 持続可能性 (sustainability)

観光者の観光需要などによって左右されるなど、不安定要素が多分にあつては雇用の解決にはならないため、観光を生業と考えるためには、持続可能性（サステナビリティ）という観点も必要である。アボリジニが観光産業にプロとして従事するからには、いかに常時観光需要を確保するかは大事なことだろう。例えば、ニュージーランドのマオリは、冬季観光イベントとして“新年祭”を位置づけ、積極的に観光を手段として誘客に努めている。

観光者誘客という意味では、教育旅行も可能であるようなアボリジニ文化のあるべき姿を踏まえた上で、観光者のニーズに合わせ、いかにアボリジニ文化を魅力的に表象するかに努めねばならない。それには、男女の別なく幅広い年齢層に関心を持たれること、時流に乗ったファッションだけにならない工夫、体験型であること、個人でもツアーでも楽しめることなどが必要であり、また観光者についての調査も必要となるだろう。

観光用に表象するために困難なことは、国土が広く、言語部族が多く分かれて住んでいたために異なる部族社会を形成していたことで、この解決には、観光者が望む一般化されたアボリジニ社会や文化全体の本質（根本）をどう探るにかかっている。

⑤ 観光ビジネス（ショービジネス）、そして、海外からの観光者に対する外資ビジネス

常時収入源とする観光ビジネスとするためには、ツアー会社やホテル産業などとのタイアップも必要となってくるだろう。すでにその動きはみられている。例えば、ツアー・ゴールドコースト会社（Tour Goldcoast）では、「ナイト zoo&アボリジニダンスショー」というツアーを募集している。そのツアー内容は、カランピン動物園でのカンガルーの餌付け体験やコアラ抱っこ、夜活発に動く動物の生態を見せるナイトサファリツアー、アボリジニやトレス海峡諸島

民のダンスショー、「カプマリ」と呼ばれる伝統的な調理法の説明と「カイカイ」と呼ばれる伝統料理をアレンジしたバイキング形式の夕食とショッピングなどとなっている。また、ATS 旅行会社は、「カラビンワイルドライフサンクチュアリー、野生動物公園、ゴールドコーストツアー」（昼のツアー）を募集し、その中にはアボリジニダンスショーも含まれている。いずれのツアーにおいても、先住民たちはダンサーとして働いている。①や②であげたようにアボリジニの居住地域に訪れた観光者を相手とする観光だけではなく、このようにショービジネスにおいて、アボリジニがプロのダンサーとして会場で伝統のダンスを披露し、観光者が観るという観光スタイルも登場している。（テーマパーク化されているジャプカイの例とは別に考える。）

また、ホテル産業と関係してショーを行うという例がある。例えば、アウトリガー・サーファーズパラダイス（**Outrigger Surfers Paradise**）⁽¹⁴⁾でのダンスパフォーマンスショーがそれである。このホテルのデジャ・ビューレストランで 2014 年 1 月から毎週 2 回アボリジニダンサーによるパフォーマンスショーが行われている。レストランを利用する人は誰でも無料で鑑賞することができ、パフォーマンス終了後には、ダンサーとの記念撮影と交流体験ができる。クイーンズランド州政府観光局による情報とトラベルジャーナルゲートウェイ⁽¹⁴⁾によると、アボリジニダンス界の第一人者でオーストラリア全土だけでなく海外でもパフォーマンス活動を行っているルーサー・コーラ（地元ユガンベ **Yugambeh** 出身）とダンサーたちが、アボリジニの人びとが持つ神聖なる大地、山脈、海への敬意を踊りによって表現する。アボリジニ文化を背景とした伝統的で熱意のこもったパフォーマンスは多くの人に感動を与えている。65 年前にハワイで営業を始めて以来、自然、大地、海に深いつながりを持つハワイ文化を尊重してきたアウトリガーホテルズ&リゾーツは、その心とノウハウによって、オーストラリア先住民文化の歴史をホテル利用者に紹介している。場を提供する第三者の必要とその理解も要するが、この形式の観光も今後の在り方の一つとなるだろう。

園内やホテル内の売店にアボリジニ関連のグッズなどを置くようになると、それらの制作や販売に関わった人たちの収入につながるなど、波及効果も期待される。（中間搾取に注意を要することは言うまでもない。）

州政府が情報を提供するといったことでも裏付けられるように、ツアー会社による紹介や特にホテルにおけるパフォーマンスショーは、海外からの観光者向けの外資ビジネスとなるだろう。アボリジニの神聖な踊りがショーとなり、観光化されていくことは一抹の懸念を抱くかもしれない。しかしながら、伝統を保ちながら観光者用のパフォーマンスを行うことは、世界最古の歴史の一つとされるアボリジニ文化を観光者に見せることで誇りを持ち得る伝統文化を示すことになるだろう。

〈 注・引用文献 〉

(1) Teach Australia (豪日交流基金主催、2002 年) Professor. Lyndall Ryan 報告資料より

(2) 図 17 国際観光収入上位国によると、オーストラリアは 31.6 億米ドルの収入があった。

このことから、アボリジニ観光が持続的にアボリジニに労働を提供していくならば、職種の違いにより収入にも差が生じるであろうが、これまでより多くの収入が見込まれる。

(3) 幼いときに(母) 親から引き離されるという経験は成長しても情緒不安定を引き起こ

す要因となり、投獄者の 40%がアボリジニで「盗まれた世代」だという。(前掲、L・Ryan 報告資料より)

(4) ただし、これはアボリジニに限ったことではなく、人種や肌の色の違いによる差別も存在する。

(5) 矢口祐人『ハワイの歴史と文化ー悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論新社、2009 年、209~211 ページ

(6) 「白人がいう「原住民 (Natives) の資質は、資本主義的な生産能力の視点からみれば、今のところ非常に劣るかもしれない。(中略) 働くことより生活を楽しむことに人生の価値があるとすれば、「原住民」がかれらの生活を楽しんでいないとは誰がいえよう。」と、長坂寿久はアボリジニの価値観の相違を述べている。(長坂寿久『北を向くオーストラリア』サイマル出版会、1978 年、65 ページ)

(7) 櫻川昌哉、前掲書、2013 年、93 ページ

(8) ローカル (田舎・地方) に住む人びとが観光者を、宿泊をともなってコミュニティに招くというツアー。住民側には収入と活気、観光者側には田舎の慣習・伝統文化やワイルドライフに触れるという利点がある。また、観光というツールを使ってコミュニティの再生を考えたり、ヒトの根底にある生き方を考えるきっかけとして注目されている。参考：

(<http://www.responsibletravel.com/copy/what-is-community-based-tourism>) URL

日本では、2010 年に官報扱い、日本交通公社発行『コミュニティ・ベースド・ツーリズム研究』では、「観光には人や地域を元気にし、コミュニティを再生・発展させていく力を持っているが、観光を本当の意味で地域にとってプラスのものとしていくためにはさまざま

な課題が存在していることも事実で、地域コミュニティが主体的にどのように観光と係わっていくことができるか、という観点からこの研究に取り組んでいる」ということを言っている。

- (9) 北海道大学観光学高等研究センター、財団法人日本交通公社「3 ニュージーランド・マオリ編」2010 年、115 ページ (<http://hdlhandle.net/2115/42685>) URL
- (10) 山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣、2011 年、178 ページ
- (11) 同上
- (12) 「女子栄養大学紀要」Vol.29、1998 年、135～150 ページ
- (13) 山下晋司編、前掲書、2011 年、188～189 ページ
- (14) アウトリガー・エンタープライズ・グループが運営するオーストラリア東海岸のゴールドコーストにあるリゾートホテル。アウトリガー本社 (Outrigger Hotels & Resorts) はハワイのホノルルにあり、1947 年に開業、ホテルとリゾート業を中心にホテル開発業、リテール業を行っている。アウトリガー・リゾーツは、ハワイ、グアム、オーストラリア、フィジー、バリ、タイの主要ビーチリゾートに計 29 のホテルを経営している。
- (15) 日本の観光産業に関する全ての人を対象にしたオンライン・マーケティング・サイト。

8 おわりに

オーストラリアでは過去 30 年程の間に人権差別などの国内的・国際的状況が変化し、主流社会においてアボリジニの人びととその文化に対する態度が変わってきた。その一つは、アボリジニ文化が見るべき価値のないものから、オーストラリアらしいもののシンボルの一部として国家的文化資源となってきたことである。1993 年の「国際先住民年」、1995 年～2004 年の「世界の先住民の国際 10 年」、さらには 2005 年からの「世界の先住民の国際 10 年第二」にも後押しされ、国内外ではアボリジニ文化に対する多様な動きが見られる。

アボリジニ観光は本物という意味ではアボリジニしかできない産業である。観光が盛んになっている現代において、アボリジニの伝統文化を観光資源として考えると、それは収入という点でビジネス効果が見込まれ、経済的地位の低さの改善と経済的自立に役立つと考えられる。アボリジニにしかできない特殊技能や技術を示したり、必要な教育を受けて労働力の質が向上すれば、経済力のアップにつながるだろう。資本主義社会においては経済力をつけることは社会的地位の向上にもつながり、差別からの離脱も可能となる。それによって社会の認識も高まり差別されない“真のオーストラリア人”となることも可能となるだろう。そして、現代社会（近代市民社会）に主体的・積極的に関与できる“市民”として参入することにもつながると考える。また、文化を見せることで存在をアピールし、文化の継承をはかるだけではなく、アボリジニのアイデンティティを守り、自信と誇りにつないでいけるものと考察する。かつて差別や偏見の対象とされてきたアボリジニの文化が、現在では、オーストラリアのアイデンティティを示す象徴的役割の一端を担い、オーストラリア観光の目玉商品となりつつある。

オーストラリア政府は、前述のプログラム（2004 年）でアボリジニの伝統文化を観光資源としてビジネス展開していくことを示した。10 年がたとうとしている現在、自然との共生や本来の人間の生き方が問われる時代の要求とも相まって、アボリジニ観光が注目されるようになってきた。政府の先住民調査委員会による報告書（1994 年）では、すでにアボリジニ観光の経済的な面だけではなく文化面や環境面などにも考慮していたが、ビジネスという経済面だけでは

なく、観光という新しい文脈においても自己の文化を示すことができるようになってきていることは、評価に値する。

これまで、アボリジニ文化は時代の変遷にかかわらず変化しないものと解され、伝統的な部分だけがアイデンティティを形成するものとして、観光においても扱われてきた。アボリジニ自身が文化の変遷を踏まえた上で、自らの伝統文化を語ることは好ましいことである。しかしその一方で、アボリジニ文化が“商業的な観光商品”として本来の文脈から離れてしまうことが懸念される。例えば、岩絵は先祖からの神話（ドリーミング）の伝達手段や文字の代わりのコミュニケーション手段であったが、観光者に見られるモノとして本来の意味が変えられていくのである。

オーストラリア観光においては、1980年代半ばから自然に注目したエコツーリズムと多文化社会（マルチカルチュラル）に付随したエスニック・ツーリズムが多く行われている。自然とともに暮らしてきたアボリジニの観光は自然環境に負荷を与えず、オーストラリア独自の観光資源を活かすことができる。つまり、アボリジニ観光は、エコツーリズムとエスニック・ツーリズムが融合することにより自然面や文化面の多面性を持った複合型の観光を形成することができる。またそれは、時代の要求に即し、注目されてきたコミュニティ・ベースド・ツーリズムでもある。アボリジニ美術が国際社会から注目を集め価値あるものとなったのと同様に、アボリジニ観光はさまざまな分野に発展する可能性を秘め、今後益々広がりを見せていくことになるだろう。そして、文化資源としてのアボリジニの伝統文化は、アボリジニ観光における観光資源として重要になっていくだろう。アボリジニ観光の更なる発展は、アボリジニの人びとの社会的地位の改善につながるものと考ええる。そして、経済的自立を踏まえて、社会的な務めを果たすことを可能とし、アボリジニの人びとが多文化主義社会となったオーストラリア社会へ平等な国民として参入することを一層促進させるだろう。

これまでオーストラリア先住民の現代社会における生活向上や文化保持に観光がいかなる役割を果たし得るかについて考察してきた。アボリジニといっても、生活習慣、文化、物事の考え方が異なる多くの部族がいる。例えばブーメランはアボリジニの道具として有名だが、全て

の部族がこれを使っているわけではない。観光者は訪ねる場所によって出会う部族が異なるため、それぞれの印象が違うかもしれない。また、内陸部に住み伝統的な文化を保持している者がいたり、都市部に住み現代的な生活に身をおく者がいるなど、その文化には多様性がある。とはいえ、オーストラリアのアボリジニとしてマイノリティ・グループに属する彼らのおかれている状況や背景は大同小異である。

「先住民」という存在は、二十世紀の終わりから国際的にも国家の枠においても注目を集めるようになってきた。マイノリティといわれる彼らの状況は、地域的にも歴史的にも多様ではあるが、“人間の根源”に関わる普遍的な何か（人類の根底にある普遍性）を残しており、それは殺伐とした現代社会の人間を魅了している。グローバリゼーションが加速し、人・モノ・カネそして情報が地域や国家を越えて錯綜している。この数十年の間に彼らを取り巻く社会的環境が大きく変化してきて、彼らの生活も変化を余儀なくされている。国家・社会と彼らの相互関係において、彼らがその変化を能動的に受け入れるために“観光”はその力を発揮することできると考える。また、観光は、彼らの普遍性と多様性を紹介すること、そして「共生」にも一役買うものとする。彼らのユニークな「文化資源」は、彼らのおかれている状況の改善に資するものとして注目に値する。日本においても先住民アイヌの人びとの文化的伝統の再認識を必要としているが、アイヌに関しては資料の情報の不確実性及び現代的課題への対応が指摘されている⁽¹⁾。国際社会は先住民族の問題を重要な課題として注目して取り組んできている。これまで見てきたように観光による破壊など、懸念されることもあり注意を要することもあるが、観光は、マイノリティとしての彼らが主流社会の経済的社会的負荷として見られてきた存在から独自の「文化資本」を持つ大きな存在となるための力として重要な役割を果たすものと期待される。

〈 注・引用文献 〉

- (1) 若園雄志郎「先住民と博物館—アイヌとアボリジニの比較から」(山内由理子編『オーストラリア先住民と日本—先住民学・交流・表象』お茶の水書房、2014 年、239 ページ)

参考文献

◎和書

* 観光(学) 関係

- [1] 油川洋、三橋勇、青木忠幸、長瀬一男『新しい視点の観光戦略』学文社、2009 年
- [2] 井口貢編著『観光学への扉』学芸出版社、2008 年
- [3] 今井成男・大庭英雄・捧富雄『観光学概論』ジェイティービー能力開発、2009 年
- [4] 岡本伸之編『観光学入門』有斐閣、2001 年
- [5] 小口孝司編『観光の社会心理学』北大路書房、2006 年
- [6] 北川宗忠編著『観光文化論』ミネルヴァ書房、2004 年
- [7] 櫻川昌哉『ツーリズム成長論』慶應義塾大学出版会、2013 年
- [8] 佐藤喜子光、椎川忍編著 (2011)『地域旅で地域力創造』学芸出版社、2011 年
- [9] 総合観光学会『復興ツーリズム観光学からのメッセージ』同文館出版、2013 年
- [10] 徳久球雄・塚本瑋一・朝水宗彦編著『地域・観光・文化』嵯峨野書院、2001 年
- [11] 長崎国際大学人間社会学部国際観光学科編『観光の地平』学文社、2009 年
- [12] 日本政府観光局『JNTO 国際観光白書 2010』国際観光サービスセンター、2010 年
- [13] 日本旅行業協会『数字が語る旅行業 2011』
- [14] 日本旅行業協会『数字が語る旅行業 2014』
- [15] 橋本和也『観光人類学の戦略 ―文化の売り方・売られ方』世界思想社、2007 年
- [16] 羽田耕治監修『観光学基礎』ジェイティービー能力開発、2011 年
- [17] 前田勇編著『21 世紀の観光学』学文社、2003 年
- [18] 前田勇・佐々木土師二監修、小口孝司編『観光の社会心理学』北大路書房、2006 年
- [19] 前田勇編著『現代観光総論』学文社、2010 年
- [20] 松本源太郎・村上了太・菊地裕幸他編『地方は復活する』日本経済評論社、2011 年
- [21] 溝尾良隆『観光学基礎と実践』古今書院、2003 年
- [22] 溝尾良隆『観光学の基礎』原書房、2009 年

- [23] 安田純子・三橋勇「場所と人で考える震災後の観光 ―被災地における 2 つの考え方」(『総合観光研究』総合観光学会、2012 年)
- [24] 安田純子「被災地と観光 ―福島から」(『「復興ツーリズム」観光からのメッセージ』総合観光学会、同分館出版、2013 年)
- [25] 安田純子「震災後の生活変化と観光利用 ―被災地福島を中心に」(『郡山女子大学紀要』第 50 集、郡山女子大学、2014 年)
- [26] 安村克己他編著『よくわかる観光社会学』ミネルヴァ書房、2011 年
- [27] 山口誠『ニッポンの海外旅行 ―若者と観光メディアの 50 年史』筑摩書房、2010 年
- [28] 山下晋司編『観光文化学』新曜社、2007 年
- [29] 山下晋司編『観光学キーワード』有斐閣、2011 年

＊オーストラリア関係

- [30] 青柳清孝・松山利夫編『先住民と都市 ―人類学新しい地平』青木書店、1999 年
- [31] 青山晴美『もっと知りたいアボリジニ』明石書店、2001 年
- [32] 青山晴美『女で読み解くオーストラリア』明石書店、2004 年
- [33] 青山晴美『アボリジニで読むオーストラリア ―もうひとつの歴史と文化』明石書店、2008 年
- [34] 青山晴美「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業の実態 ―マーケット調査とケーススタディ No.1」(『愛知学泉大学・短期大学紀要』43 号、2008 年)
- [35] 青山晴美「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 No.2.―アボリジニ文化の表象について：ケーススタディ No.2」(『愛知学泉大学・短期大学紀要』44 号、2009 年)
- [36] 青山晴美「オーストラリアにおけるアボリジニ観光産業 No.3 ―エコ・ツーリズムの現状と可能性について：ケーススタディ No.3」(『愛知学泉大学・短期大学紀要』45 号、2010 年)
- [37] 朝水宗彦『オーストラリアの観光と食文化』学文社、1999 年

- [38] 石川栄吉・越智道雄・小林泉・百々祐利子監修，平凡社編集部編『オセアニアを知る事典』
平凡社、2000 年
- [39] 石出法太・石出みどり『オーストラリア・ニュージーランドの歴史』大月書店、2009 年
- [40] 上橋菜穂子『隣のアボリジニ』筑摩書房、2000 年
- [41] 上橋菜穂子「観光土産物に表象される『象徴化された自分化イメージ』について ―西オーストラリア州中西部のアボリジニ、ヤマジーの事例を中心に―」（『女子栄養大学紀要』
Vol.29 1998 年）
- [42] 内田真弓『砂漠で見つけた夢 ―アボリジニに魅せられて』KK ベストセラーズ、2008 年
- [43] 内山工『AUS 留学体験記 ―アボリジニの大地にて』郁朋社、2008 年
- [44] 遠藤雅子『オーストラリア物語』平凡社、2000 年
- [45] 大江志乃夫『オーストラリア考察紀行』朝日新聞社、1990 年
- [46] 大津彬裕『オーストラリア 変わりゆく素顔』大修館書店、1995 年
- [47] オーストラリア大使館広報部『豪日関係』オーストラリア大使館、1994 年
- [48] オーストラリア大使館広報文化部『もっと知りたい！オーストラリア Tell me about
Australia』オーストラリア大使館、2007 年
- [49] オーストラリア大使館広報文化部『Australia in Brief 第 49 版 オーストラリア連邦政府
外務貿易省 日本語版』オーストラリア大使館、2012 年
- [50] オーストラリア政府観光局『Travel Australia ―オーストラリア旅ブック』
- [51] オーストラリア各州観光局資料
- [52] オーストラリア連邦政府外務貿易省『Australia in Brief 第 47 版日本語版』オーストラリ
ア大使館広報文化部、2005 年
- [53] 海美央『アボリジニの教え ―大地と宇宙をつなぐ精霊の知恵』KK ベストセラーズ、1998
年
- [54] KAWADE ムック『オーストラリアの大自然を楽しむ本』河出書房新社、2000 年
- [55] 桐原書店編集部「“世界遺産”と先住民 ウルル、カタ・ジュタ国立公園 Uluru, the Land
in the Shade」（『Messages of World Heritage』桐原書店、2005 年）

- [56] 窪田幸子『アボリジニ社会のジェンダー人類学』世界思想社、2005 年
- [57] 小池秀夫「オーストラリアにおける失業率とその地域差」(『愛知学院大学論集「経営学研究」』第 2 巻第 3・4 号 1993 年)
- [58] 越智道雄『新世界の文化エトス ―オーストラリアの場合』評論社、1884 年
- [59] 越智道雄『オーストラリアを知るための 55 章』明石書店、2006 年
- [60] 小山修三「オーストラリア・アボリジニ狩猟採集民の現在」(『国立民族学博物館研究報告』別冊 15 号、1991 年)
- [61] 小山修三『狩人の大地』雄山閣出版、1994 年
- [62] 小山修三・窪田幸子編『多文化国家の先住民』世界思想社、2002 年
- [63] 駒井健吉『オーストラリア ―その国土と市場』科学新聞社、1982 年
- [64] 塩原良和『ネオ・リベラリズムの時代の多文化主義 ―オーストラリアン・マルチカルチュラリズムの変容』三元社、2005 年
- [65] 白石理恵『精霊の民アボリジニー』明石書房、1993 年
- [66] 新保満『野生と文明』未来社、1979 年
- [67] 新保満『悲しきブーメラン』未来社、1994 年
- [68] 杉本良太『オーストラリア ―多文化社会の選択』岩波書店、2000 年
- [69] 関根政美・鈴木雄雅・竹田いさみ・加賀爪優・諏訪康雄『概説オーストラリア史』有斐閣、1988 年
- [70] 竹田いさみ・森健編『オーストラリア入門』東京大学出版会、1998 年
- [71] 張能美希子『アボリジニー差別論の展開と事例研究』文真堂、2012 年
- [72] 同朋舎出版『GEO1995Vol2No6』同朋舎出版、1995 年
- [73] 友永雄吾『オーストラリア先住民の土地権と環境管理』明石書店、2013 年
- [74] 永井浩『オーストラリア解剖』晶文社、1991 年
- [75] 長坂寿久『北を向くオーストラリア』サイマル出版会、1978 年
- [76] 中野不二男『もっと知りたいオーストラリア』弘文堂、1990 年
- [77] 福島健次『オーストラリア I』日本放送出版協会、1978 年

- [78] 福島健次『オーストラリアⅡ』日本放送出版協会、1978 年
- [79] 藤川隆男『オーストラリア歴史の旅』朝日新聞社、2001 年
- [80] 藤川隆男編『オーストラリアの歴史 ―多文化社会の歴史の可能性を探る』有斐閣、2004 年
- [81] 保苅実の『ラディカル・オーラル・ヒストリー ―オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』お茶の水書房、2004 年
- [82] 堀武昭『オーストラリアの日々 ―複合多文化国家の現在』日本放送出版協会、1988 年
- [83] 堀武昭『オーストラリア A to Z』丸善、1993 年
- [84] 松山利夫『ユーカリの森に生きる』日本放送出版協会、1994 年
- [85] 松山利夫監修、読売新聞社文化事業部編『オーストラリア・アボリジニの美術＜ドリームタイム＞へのいざない』読売新聞社、2001 年
- [86] 歴史教育者協議会編『知っておきたいオーストラリア・ニュージーランド』青木書店、1999 年
- [87] 三箇修司『アウトバック オーストラリア』東洋出版、2009 年
- [88] 室井美稚子「“Sorry” in the Sky-A Reconciliation in Australia」(『Global Journal』桐原書店、2001 年)
- [89] 安田純子「アボリジニと貨幣経済」(『東北経済学会誌』東北経済学会、2004 年)
- [90] 安田純子「アボリジニ社会 ―女性で見る強制隔離政策と貨幣経済」(『商学論集』第 75 巻 3 号 福島大学経済学会、2007 年)
- [91] 安田純子・三橋勇「アボリジニの生活文化と観光 ―オーストラリア社会参入への構想」(『日本観光学会誌』第 55 号、日本観光学会、2014 年)
- [92] 山内由理子編『オーストラリア先住民と日本 ―先住民学・交流・表象』お茶の水書房、2014 年
- [93] L・ライアン (Lyndall Ryan)『豪日交流基金主催 Teach Australia 報告資料』2002 年
- [94] ロンリープラネット『オーストラリア東海岸&ノーザンテリトリー』メディアファクトリー、2009 年

- [95] オーストラリア学会編『オーストラリア研究』オーストラリア学会、各年版
- [96] 『オーストラリア研究紀要』追手門学院大学オーストラリア研究所、各年版
- [97] まっぷるマガジン『オーストラリア』昭文社、2000 年
- [98] まっぷるマガジン『オーストラリア』昭文社、2007 年
- [99] るるぶ情報版『オーストラリア』JTB パブリッシング、2006 年
- [100] ワールドガイド『オーストラリア』JTB パブリッシング、2007 年

*** 翻訳書**

- [101] Alison McClelland & Paul Smyth (2006), *Social policy in Australian Understanding for Action, First Edition*, Oxford University Press (新潟青陵大学ワークフェア研究会訳『オーストラリアにおける社会政策 ―社会実践のための基礎知識』第一法規、2111 年)
- [102] Bollnow,OF (1963) ,*Mensch und Raum*, WKohlhammer GmbH,Stuttgart (大塚恵一他訳『人間と空間』せりか書房、1978 年)
- [103] Cayley,D (1992), *Ivan Illich Conversation*, House of Anansi Press (高島和哉訳『イバン・イリイチ 生きる意味』藤原書店、2005 年)
- [104] Colin Simpson (1951), *Adam in Ochre*, Angus and Robertson Limited in Association with the FHJohnston Publishing CoPtyLtd (竹下美保子訳『今日に生きる原始人』サイマル出版会、1972 年)
- [105] Craig McGregor (1986), *The Australian People* Curtis Brown (Aust) Pty Ltd, Australia (穂田照子監訳『オーストラリアの人びと』PMC 出版、1987 年)
- [106] David Dale (1997), *The 100 Things Everyone Needs to Know about Australia*, Pan Macmillan Australia Pty Ltd (小林健・久村研訳『オーストラリア 100 の常識』大修館書店、1998 年)
- [107] David Malouf (1993), *Remembering Bebyion* (武舎るみ訳『異境』現代企画室、2012 年)

- [108] Deborah Bird Rose (1996), *Nourishing Terrains: Australian Aboriginal Views of Landscape and Wilderness*, Commonwealth of Australia (保莉実訳『生命の大地 ―アボリジニ文化とエコロジー』平凡社、2003 年)
- [109] Doris Pilkington (1996), *Follow the Rabbit-Proof Fence*, University of Queensland Press (仲江昌彦訳『裸足の 1500 マイル』メディアファクトリー、2003 年)
- [110] Geoffrey Blainey (1966), *Tyranny of Distance* (長坂寿久・小林宏訳『距離の暴虐』サイマル出版会、1980 年)
- [111] Geoffrey Blainey (1983), *Triumph of the Nomade* (越智道雄・高野真知子訳『アボリジナル』サイマル出版会、1984 年)
- [112] Howard Morphy (1998), *Aboriginal Art* (松山利夫訳『アボリジニ美術』岩波書店、2003 年)
- [113] Ilsa Sharp (1999), *Culture Shock ! Australia*, Times Edition Pte Ltd (坂本憲一・村上和久訳『オーストラリア人』河出書房新社、2000 年)
- [114] Jack Davis (1982), *The Dreamers and No Sugar*, Currency press (佐和田敬司訳「ドリーマーズ/ノー・シュガー」『アボリジニ戯曲選』所収、オセアニア出版社、2006 年)
- [115] Jane Harrison (1998), *Stolen*, Currency press (佐和田敬司訳「ストールン」『アボリジニ戯曲選』所収、オセアニア出版社、2001 年)
- [116] Jared Diamond (1997), *Guns, Germs, and Steel: The Fates of Human Societies* Worton & Company, Inc, New York (倉骨彰訳『銃・病原菌・鉄上・下』草思社、2012 年)
- [117] Kenneth Maddock (1982), *The Australian Aborigines*, Penguin Books, London (松本博之訳『オーストラリアの原住民』勁草書房、1986 年)
- [118] Maslow, AH (1954), *Motivation and Personality*, Harper & Row, Publishers, Inc (小口忠彦訳『人間性の心理学』産能大学出版部、1987 年)

- [119] Norma Grieve, Patricia Grimshaw etc. (1981), *Australian Women: Feminist Perspectives* Oxford University Press, Melbourne (加藤愛子訳『フェミニズムとオーストラリア』勁草書房、1986 年)
- [120] Passmore John (1974), *Man's Responsibility for Nature* Geraid Duckworth & CoLtd (間瀬啓允訳『自然に対する人間の責任』岩波書店、1998 年)
- [121] Ross Terrill (1987), *The Australians*, Barbara Lowenstein Literary Agent, New York (田村泉訳『オーストラリア人』時事通信社、1989 年)
- [122] Viktor Emil Frankl (2005), *Arztliche Seelsorge-Grundagen der Logotherapie und Existenzanalyse*, Deuticke im Paul Zsolnay Verlag Wien (山田邦男監訳『人間とは何か 実存的な精神療法』春秋社、2011 年)
- [123] エンゲルス著 (1884), 村井康男・村田陽一訳『家族、私有財産および国家の起源』大月書店、1986 年。
- [124] ボルノー著、須田秀幸訳「人間とその家」(『郡山女子大学紀要』Vol3、1966 年)
- [125] J・ホイジンガ著、高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論新社、1973 年、里見元一郎訳『ホモ・ルーデンス』河出書房新社、1979 年

* その他関連書

- [126] 青木貞茂『文化の力 ―カルチュラル・マーケティングの方法』NTT 出版、2008 年
- [127] 阿久澤麻理子・金子匡良『人権ってなに？Q&A』解放出版社、2006 年
- [128] 石毛直道・小山修三『文化と環境』日本放送出版協会、1993 年
- [129] 大庭健他『職業と仕事・・・働くって何？』専修大学出版局、2008 年
- [130] 神野直彦『人間回復の経済学』岩波書店、2002 年
- [131] 玄侑宗久『福島に生きる』双葉社、2011 年
- [132] 後藤明・松原好次・塩谷亨編著『ハワイ研究への招待』関西学院大学出版会、2011 年
- [133] 瀬川拓郎『アイヌの世界』講談社、2011 年
- [134] 関口富左編著『人間守護の家政学』家政教育社、1999 年

- [135] 橘木俊詔『いま、働くということ』ミネルヴァ書房、2011 年
- [136] 都筑学編『働くことの心理学』ミネルヴァ書房、2008 年
- [137] 富田洋三『生活経済論』八千代出版、2001 年
- [138] 中島義道『働くことがイヤな人のための本 ―仕事とは何だろうか』日本経済新聞社、2001 年
- [139] 原司郎・酒井泰弘編著『生活経済学入門』東洋経済新報社、1997 年
- [140] 藤川隆男編『白人とは何か?』刀水書房、2005 年
- [141] 藤村正之『〈生〉の社会学』東京大学出版会、2008 年
- [142] 北海道大学観光学高等研究センター、財団法人日本交通公社 (2010) 「3 ニュージーランド・マオリ編」 p115 (<http://hdlhandlenet/2115/42685>) URL
- [143] 溝上泰子『生活人間学』国土社、1974 年
- [144] 宮里孝生「ニュージーランド先住民マオリの同化と自立」『共生の文化研究』愛知県立大学多文化共生研究所編、2008 年
- [145] 宮島喬・梶田孝道編『マイノリティと社会構造』東京大学出版会、2002 年
- [146] 村上雄一「放射線被ばくと人権に関する一考察 ―脱被ばくへ向けて―」『行政社会論集』第 26 巻第 2 号、福島大学行政社会学会、2014 年
- [147] 矢口祐人『ハワイの歴史と文化 ―悲劇と誇りのモザイクの中で』中央公論新社、2009 年
- [148] 柳まちこ編『開発の文化人類学』古今書院、2000 年
- [149] 山尾一郎『縄文人に学ぶ ―歴史・環境・ライフスタイル』地歴社、1997 年
- [150] 山下晋司編『資源人類学 ―資源化する文化』弘文堂、2007 年
- [151] 山中速人『ハワイ』岩波新書、1993 年
- [152] 米山俊直『同時代の人類学』日本放送出版協会、1994 年

◎洋書

- [153] Aboriginal Tourism association of British Columbia (2005), *Aboriginal Cultural Tourism Blueprint Strategy for British Columbia*
- [154] Anne Daly (1995), Employment and Social Security for Aboriginal Women, in Anne Edwards and Susan Magarey (ed) *Women in a Restructuring Australia* Allen & Unwin
- [155] Annette Hamilton (1985), *A Complex Strategical Situation : Gender and Power*, in *Aboriginal Australia*, In Norma Grieve and Patricia Grimshaw (eds) *Australian Women*, Oxford University Press
- [156] Australian Bureau of Statistics (1994), *Women's Health* ABS Catalogue No.43650
- [157] Australian Bureau of Statistics materials 2014
- [158] Australian Government Department of Health and Ageing (2012), *Aboriginal and Torres Strait Islander Health Performance Framework*
- [159] Australian Government Department of Resources Energy and Tourism (2008), *Tourism White Paper Evaluation Final Report*
- [160] Australian Government Department of Resources Energy and Tourism (2010), *Indigenous tourism in Australia: Profiling the domestic market*
- [161] Australian Government Institute of Health and Welfare (2008), *Australia's Aboriginal and Torres Strait Islander People 2008*
- [162] Australian Government Institute of Health and Welfare (2012), *The Health and Welfare of Australia's Aboriginal and Torres Strait Islander People an Overview 2011*
- [163] Australian Government Department of the Environment, Water, Heritage and the Arts (2009) ,
- [164] Australian Government Department of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities (2012), *One Place, Many Stories: Our Country Commonwealth of Australia*
- [165] Australian Government Department of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities (2012), *Indigenous Employment in Environmental Services*

- [166] Australian Government Department of Sustainability, Environment, Water, Population and Communities, *Indigenous Employment and Capability Strategy 2012-2014*
- [167] Australian Government Department of Foreign Affairs and Trade (2014), *Australia*
- [168] Brooke Pickering (2008), *Indigenous Tourism Involvement in Queensland*, CRC for Sustainable Tourism Pty Ltd
- [169] Caroline Martin & Karyn Ross (2008), *Aboriginal Tourism, Aboriginal Tourism Victoria*, Tourism Victoria
- [170] Ontario (2009), *Ontario Cultural and Heritage Tourism Product Research Paper*
- [171] Damien Jacobsen(2010), *Desert Aboriginal People and Tourism: Indicators from Recent Research*, Southern Cross University
- [172] Department of Employment, Education and Training Economic and Policy Analysis Division (1995), *Workforce 2005 : Jobs in the Future*, Australian Government Publishing Service
- [173] Destination NSW, *Aboriginal Tourism Action Plan 2011*
- [174] Destination NSW, *Aboriginal Tourism Action Plan 2013-2016*
- [175] Dermot Smyth (2011), *Review of Working on Country and Indigenous Protect area programs Through telephone Interviews Final report*
- [176] Hannah Middleton (1987), *Aborigines*, in Sol Encel and Michael Berry (eds) *Selected Readings*, in *Australian Society*, Longman Cheshire
- [177] Jackie Huggins (1995), *A Contemporary view of Aboriginal Women's Relationship to the White Women's Movement*, in Norma Grieve and Ailsa Burns (ed) *Australian Women* Oxford University Press Australia
- [178] JCAltman & JFinlayson (1992), *Center for Aboriginal Economic Policy Research Discussion Paper*, Aborigines,tourism and sustainable development
- [179] Jennifer Isaacs, (1999), *Spirit Country-Contemporary Australian Aboriginal Art*, Hardie Grant Books
- [180] Jennifer Isaacs (2002), *Spirit Country Fine Arts*, Museums of San Francisco

- [181] Mapunda Gido (2001), *Indigenous Tourism as a Strategy for Community development :An analysis of indigenous business initiatives in South Australia*, University of Canberra Press
- [182] Memorandum of Understanding between Indigenous Land Corporation and Department of the Environment and Heritage (2004)
- [183] Michael Wilding (1984), *Living Together* ,University of Queensland Press
- [184] *National Geographic Australia Vol173No2* National Geographic Society 1988
- [185] Natural Heritage Trust (2004), *Indigenous Knowledge Forum Workshop Outcomes*, Commonwealth of Australia
- [186] Patricia Grimshaw (1985), *Aboriginal Women : a Study of Culture Contact*, in Norma Grieve and Patricia Grimshaw (eds) *Australian Women*, Oxford University Press
- [187] Patricia Grimshaw (1987), ' *Man's Own Country*' : *Women*, in Colonial Australian History, in Norma Grieve And Ailsa Burns (eds) *Australian Women New Feminist Perspectives* Oxford University Press Australia
- [188] Paul Thompson (1983), *The Nature of Work* ,Macmillan Education LTD
- [189] Queensland Government (2014), *Guidelines for developing Indigenous Tourism Experiences In Central West Outback Queensland*
- [190] Robin ESmith (1992), *Australia Commonwealth of Australia*
- [191] SEncel, MBerry, LBryson,etc (1984), *Australian Society Introductory Essays Fourth Edition*, Longman Cheshire Pty Limited
- [192] The World Tourism Organization (UNWTO) (2013), *UNWTO Annual Report 2013*
- [193] Tourism Australia (2009), *National Indigenous Tourism Product Manual*
- [194] Tourism NSW (2011), *Principles for Developing Aboriginal Tourism*
- [195] Tourism Western Australia (2010), *Making a Difference 2011-2015 Aboriginal Tourism Strategy for Western Australia*
- [196] Victoria Government (2008), *Aboriginal Tourism*

謝 辞

本研究を進めるにあたり、他分野を専攻しておりました私に、事業構想学（観光学）の分野をご紹介くださり世界観を広めてくださいました宮城大学大学院事業構想学研究科 三橋勇教授、三橋教授ご退職後貴重なお時間をさいて丁寧なご指導を賜りました同研究科 富樫敦教授、引き続き観光学分野について貴重なご指導を賜りました同研究科 宮原育子教授、研究をまとめるためにご指導賜りました同研究科 徳永幸之教授、蒔苗耕司教授に厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

また、オーストラリアについての貴重な文献や資料、写真をお示しいただき提供してくださいましたオーストラリア大使館、豪日交流基金、オーストラリア統計局、オーストラリア観光局に深く感謝申し上げます。

そして、本研究に対するご助言、ご教示を賜りました宮城大学大学院事業構想学研究科の先生方、職員の皆様にも心よりお礼申し上げます。

皆様本当にありがとうございました。若輩でございますので、これからもご教示ご鞭撻いただけますようお願い申し上げます、さらに精進いたしますこととお誓いし、感謝のことばといたします。

2015 年 3 月 安田 純子